

はたき こやつ しいづちゃのき
市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木遺跡（第2次）
— 不特定遺跡発掘調査報告（3） —

2000・3

市 原 市 教 育 委 員 会
財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県市原市は房総半島のほぼ中央に位置し、市の北に村田川、南に養老川が支流を取り込んで東京湾に流れ込み、豊かな自然の恵みのなかで太古から多くの人々が生活を営んでまいりました。私たちは市内に残る数多くの遺跡から、その足跡をたどることができます。

市原市は首都圏に位置することから、住宅造成や交通網などの都市基盤整備などの開発が日々行われております。これらの開発と埋蔵文化財の保護、さらには自然環境の保全などの諸問題といかに調和を図っていくかが私たちに課せられた大きな課題であると思います。

このたび、市内所在の畑木小谷遺跡および椎津茶ノ木遺跡の2遺跡について報告書を刊行するはこびとなりました。畑木小谷遺跡からは古墳時代中期の竪穴住居跡が検出され、椎津茶ノ木遺跡からは漁労に深く関わっていたらしい古墳時代後期の集落跡が検出されるなど東京湾岸の古墳時代の村の様子を知る貴重な資料を得ることができました。

この報告書が学術資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護と理解のために広く市民の皆様にも活用していただけるなら幸いです。

最後に、今回、発掘調査を実施するにあたりご指導、ご協力を賜りました文化庁記念物課・千葉県教育庁文化課・市原市教育委員会ふるさと文化課ならびに発掘調査費及び整理作業費についてご協力いただきました大野裕久氏と株式会社ライフ式拾壺世紀に対して、心から謝意を申し上げる次第であります。

平成12年3月

財団法人 市原市文化財センター

理事長 小 茶 文 夫

例 言

1. 本書は、平成11年度不特定遺跡発掘調査事業による県費補助事業として、市原市教育委員会の委託により、財団法人市原市文化財センターが整理作業を行った、畑木小谷遺跡および椎津茶ノ木遺跡の報告書である。

2. 発掘調査から報告書刊行に至る経緯は、下記のとおりである。

畑木小谷遺跡（センター調査コード セ256）

所在地 市原市畑木246－1の一部、246－2の一部

確認調査 平成9年1月27日～平成9年2月10日 調査面積 6,028㎡のうちの400㎡

調査担当 小出紳夫 （平成8年度不特定遺跡発掘調査事業による調査）

本調査 平成9年10月21日～平成10年2月3日 調査面積 1,160㎡

調査担当 北見一弘 （平成9年度市内遺跡発掘調査事業による調査）

整理作業 平成10年10月19日～平成11年2月15日

整理担当 北見一弘 （平成10年度市内遺跡発掘調査事業による整理）

刊行 本調査1,160㎡分について「平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告」にて刊行

本調査 平成9年10月21日～平成10年1月30日 調査面積 1,190㎡

調査担当 北見一弘 （大野裕久氏との委託契約による調査）

整理作業 平成11年6月1日～平成11年9月30日

整理担当 北見一弘 （大野裕久氏との委託契約による整理）

整理作業 平成12年1月5日～平成12年3月10日

整理担当 北見一弘 （平成11年度不特定遺跡発掘調査事業による整理）

刊行 本調査1,190㎡分について「平成11年度不特定遺跡発掘調査事業」にて刊行

椎津茶ノ木遺跡（センター調査コード セ266）

所在地 市原市椎津545－1 他

本調査 平成10年5月13日～平成10年6月11日 調査面積300㎡

調査担当 小出紳夫 （平成10年度不特定遺跡発掘調査事業（県費補助）による調査）

整理作業 平成10年6月10日～平成10年8月31日

整理担当 鶴岡英一 （株式会社ライフ式拾壺世紀との委託契約により一部を整理）

整理作業 平成11年10月1日～平成12年3月10日

整理担当 鶴岡英一 （平成11年不特定遺跡発掘調査事業による整理）

刊行 「平成11年度不特定遺跡発掘調査事業」にて刊行

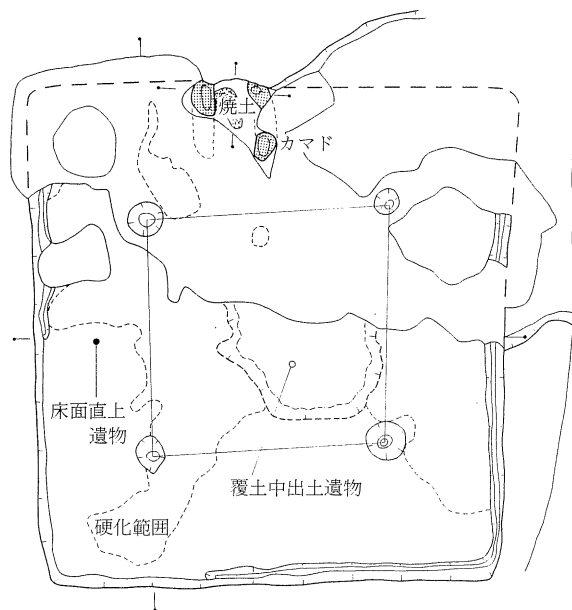
3. 本書の執筆は、畑木小谷遺跡を北見一弘、椎津茶ノ木遺跡を鶴岡英一が担当した。

4. 調査区のグリッド設定は、畑木小谷遺跡が公共座標、椎津茶ノ木遺跡が任意座標による。

5. 本書に使用した地形図は、市原市発行の1：25,000地形図及び1：2,500地形図である。

凡 例

1. 実測図の縮尺は、遺構は1/80、土器は1/3、を基本としたが、遺構の規模、遺物の大きさによって、適宜縮尺を変えているので、スケールに従って頂きたい。
2. 全体図・遺構図における方位は、畑木小谷遺跡は座標北、椎津茶ノ木遺跡は磁北である。
3. 実測図中のスクリーン・トーン使用部位の説明は、なるべく図中若しくは観察表に対応する記載をしているので参照して頂きたい。
4. 石器・鉄器等の軽量遺物の重量測定には、エー・アンド・ディ社製パーソナル電子天秤 EW-300Gを使用した。
5. 畑木小谷遺跡の遺構番号については、連続して行われた東側調査区（平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告書報告分）の遺構番号との関連性を考え、続き番号を使用した。調査時の遺構番号は、第3図 畑木小谷遺跡全体図に括弧書きの数字で表記してある。
6. 畑木小谷遺跡の遺構実測図の説明は、下記凡例図に記す。



本文目次

序 文	
例 言	
凡 例	
第1章 調査遺跡の位置と環境	1
第2章 畑木小谷遺跡	3
第3章 椎津茶ノ木遺跡	28

挿 図 目 次

調査遺跡の位置と環境

第1図 調査対象遺跡と周辺の主な遺跡 … 2

畑木小谷遺跡

第2図 畑木小谷遺跡周辺地形図 …… 3
第3図 畑木小谷遺跡全体図 …… 4
第4図 19号遺構と遺物実測図 …… 5
第5図 20号遺構遺物実測図 …… 6
第6図 21号遺構及び遺物実測図 …… 7
第7図 22・23・24号遺構及び遺物実測図 … 8
第8図 25号遺構及び遺物実測図 …… 9
第9図 26号遺構及び遺物実測図 …… 10
第10図 27号遺構及び遺物実測図 …… 11
第11図 28号遺構及び遺物実測図 …… 11

第12図 29号遺構及び遺物実測図 …… 12
第13図 30号遺構及び遺物実測図 …… 13
第14図 31号遺構及び遺物実測図 …… 14
第15図 31号遺構遺物実測図 …… 15
第16図 32号遺構及び遺物実測図 …… 16
第17図 33号遺構実測図及び等高線図 …… 18
第18図 33号遺構遺物実測図 …… 19
第19図 33号遺構遺物実測図 …… 20
第20図 34号遺構及び遺物実測図 …… 20
第21図 石器実測図 …… 21

椎津茶ノ木遺跡

第22図 椎津茶ノ木遺跡周辺地形図 …… 28
第23図 椎津茶ノ木遺跡調査区位置図 … 29
第24図 椎津茶ノ木遺跡（第2次）全体図 … 30
第25図 SI1・2遺構実測図と遺物実測図 … 31
第26図 SI3・4・5遺構実測図 …… 33
第27図 SI3遺物実測図 …… 34
第28図 SI4・5遺物実測図 …… 35

第29図 SI6・7・8、SK3遺構実測図 …… 37
第30図 SI6・7・8遺物実測図 …… 38
第31図 SI9・10、SK4、SD1遺構実測図 … 39
第32図 SI11・12、SK2遺構実測図 …… 40
第33図 SI11・12遺物実測図 …… 41
第34図 遺構外出土の遺物 …… 44

図 版 目 次

畑木小谷遺跡

図版1 畑木小谷遺跡遺構写真
図版2 畑木小谷遺跡遺構写真
図版3 畑木小谷遺跡遺物写真
図版4 畑木小谷遺跡遺物写真
図版5 畑木小谷遺跡遺物写真

椎津茶ノ木遺跡

図版6 椎津茶ノ木遺跡遺構写真
図版7 椎津茶ノ木遺跡遺構写真
図版8 椎津茶ノ木遺跡遺構写真
図版9 椎津茶ノ木遺跡遺物写真

表 目 次

畑木小谷遺跡

表1 畑木小谷遺跡土器観察表 …… 25

椎津茶ノ木遺跡

表2 椎津茶ノ木遺跡土器観察表 …… 46
表3 椎津茶ノ木遺跡土器観察表 …… 47

第1章 調査遺跡の位置と環境

市原市は、千葉県、房総半島のほぼ中心部に位置する。本地では、北から延びる、いわゆる下総台地が収れんし、上総丘陵が南に広がる地勢をなす。南部には、房総半島の水系を太平洋と東京湾に分ける分水嶺、清澄山系が広がり、ここに源を発する養老川が、兩岸の丘陵、台地を開析し、蛇行を繰り返しながら東京湾に注いでいる。畑木小谷遺跡及び椎津茶ノ木遺跡が立地する、通称袖ヶ浦台地は、上総国分僧寺・尼寺が所在する市原台地と、養老川下流域に広がる低地を挟んで対峙する。両遺跡は、台地を分けて流れる、椎津川を挟んで、直線で2.5kmの距離にある。この地は『和名類聚抄』にみられる海上郡馬野郷に比定される地域で、上海上国造及びその前身となる豪族の奥津城とみられる姉崎古墳群、式内社である姉崎神社が存在する。当地域は古くは1950年代から、古墳を中心とした調査が行われてきたが、調査事例は多くはなく、不明な点が多い。最近の成果としては、群中の大型前方後円墳である釈迦山古墳の部分調査が行われ、後円部ほぼ中央に全長9.1mを推定可能な粘土槨が検出され、布留ⅡからⅢ式期に担当する土器が出土し、築造年代の根拠となっている（小久貫 1996）。

畑木小谷遺跡は、椎津川右岸の標高42m程の洪積台地上に立地する。台地は東京湾を正面に、両側を小支谷に挟まれ、舌状に突き出した形を呈する。眼下の沖積平野まで30mの比高差をもつ。台地上には式内社である姉崎神社が立地する。この台地上は宅地造成が大規模に行われ、集落遺跡として、毛尻遺跡、原遺跡、六孫王原遺跡、東原遺跡、宮山遺跡が調査されている。同台地より東は、小河川に細く開析された舌状台地が続き、いくつかの群集墳が高密度で認められているが、調査事例は少ない。昭和43年に早稲田大学により、海保吉谷前古墳群のうち1号から3号の3基が調査され、木棺直葬の埋葬施設、鉄剣、鉄鏃、勾玉、管玉、ガラス小玉などが検出されている（中村恵次他 1968）。この他には、海保大塚が測量調査され、直径60mを測る円墳を改変した塚である可能性が指摘されている（杉山晋作他 1990）。

椎津茶ノ木遺跡は、椎津川下流域南岸に位置し、東京湾を眼下に臨む、舌状台地先端部に立地する。平成2年には宅地造成に伴い、対象面積2,639㎡の本調査が行われ、遺構が幾重にも重複して検出されるなど、古墳時代には拠点的な集落を形成していたことが明らかになっている。周辺には数多くの遺跡が所在するが、古くからの市街化が進んでいるため、比較的調査例の少ない地域といえる。茶ノ木遺跡の主体となる古墳時代の遺跡には、北側隣接地に椎津稲荷山古墳、谷を挟んだ西側に外郭古墳が位置している。稲荷山古墳は、石枕出土の伝承があり、平成2年調査時に周溝の調査が一部行われたが、築造年代・墳形ともに確定するには至っていない。外郭古墳は、平成元年に、千葉県教育委員会による確認調査が行われ、6世紀代の円筒埴輪片が出土している。墳形については、椎津城主郭の築造により大幅に改変されたとの伝承もあり、不確定要素が多い。その他、近年調査が行われた周辺遺跡には、古墳時代前・後期を中心とする集落跡が検出された椎津五霊台遺跡や、平安時代の井戸跡や中世の遺構群が検出された椎津尾崎遺跡などがある。

近年、姉崎地域では、本報告の2遺跡を含め、台地上、低地砂堆上の調査が断続的ながら実施され、資料の蓄積がなされている。

《参考文献》（五十音順）

- 小久貫隆史 『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』 千葉県文化財センター調査報告第293集 1996
杉山晋作 他 「海保大塚遺跡の測量調査」『関東地方における終末期古墳の調査』 1990
中村恵次 他 「海保古墳群」『市原市埋蔵文化財調査報告書』4 市原市教育委員会 1968

第2章 畑木小谷遺跡

第1節 調査方法

調査は遺跡近隣の基準点を基にして公共座標を用い、20m×20mの大グリッドを設定し、南北方向に北から1、2、3、…、東西方向に東からA、B、C、…、とナンバリングした。遺構外の遺物の取り上げ等には、2m×2mの小グリッドを用いた。方眼杭の設定後、重機により表土の掘削を行い、確認した順に001から番号を付けた。遺構図面は方眼杭を基準に、一部を平板を使用して、1/20を基本に、1/10、1/40の縮尺で作成した。遺構番号は、整理作業時に付け替えているので第3図を参照されたい。

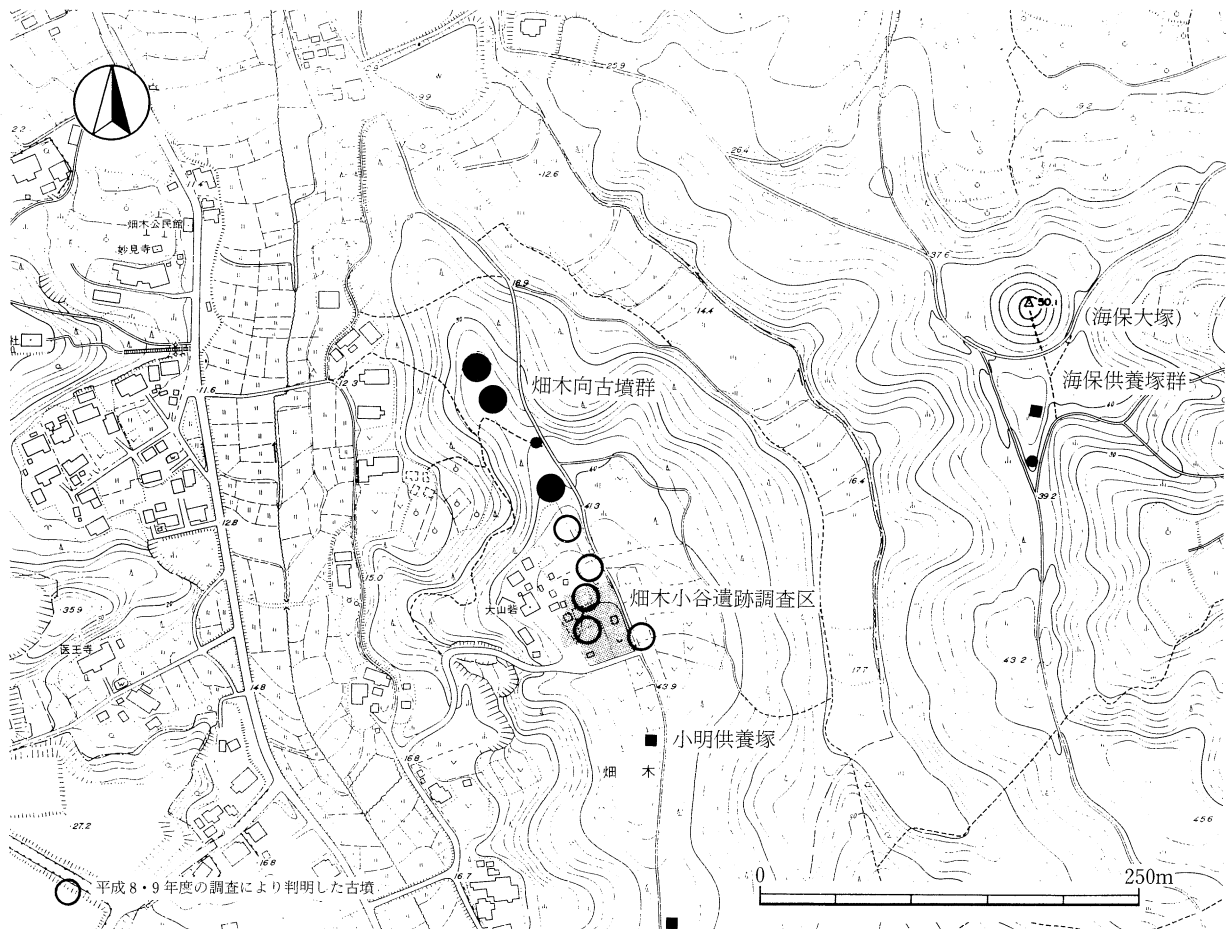
第2節 遺構と遺物

調査の結果、検出された遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居跡10軒、古墳時代中期竪穴住居跡4軒、の計14軒、古墳時代後期円墳が1基、時期不明溝状遺構1条である。

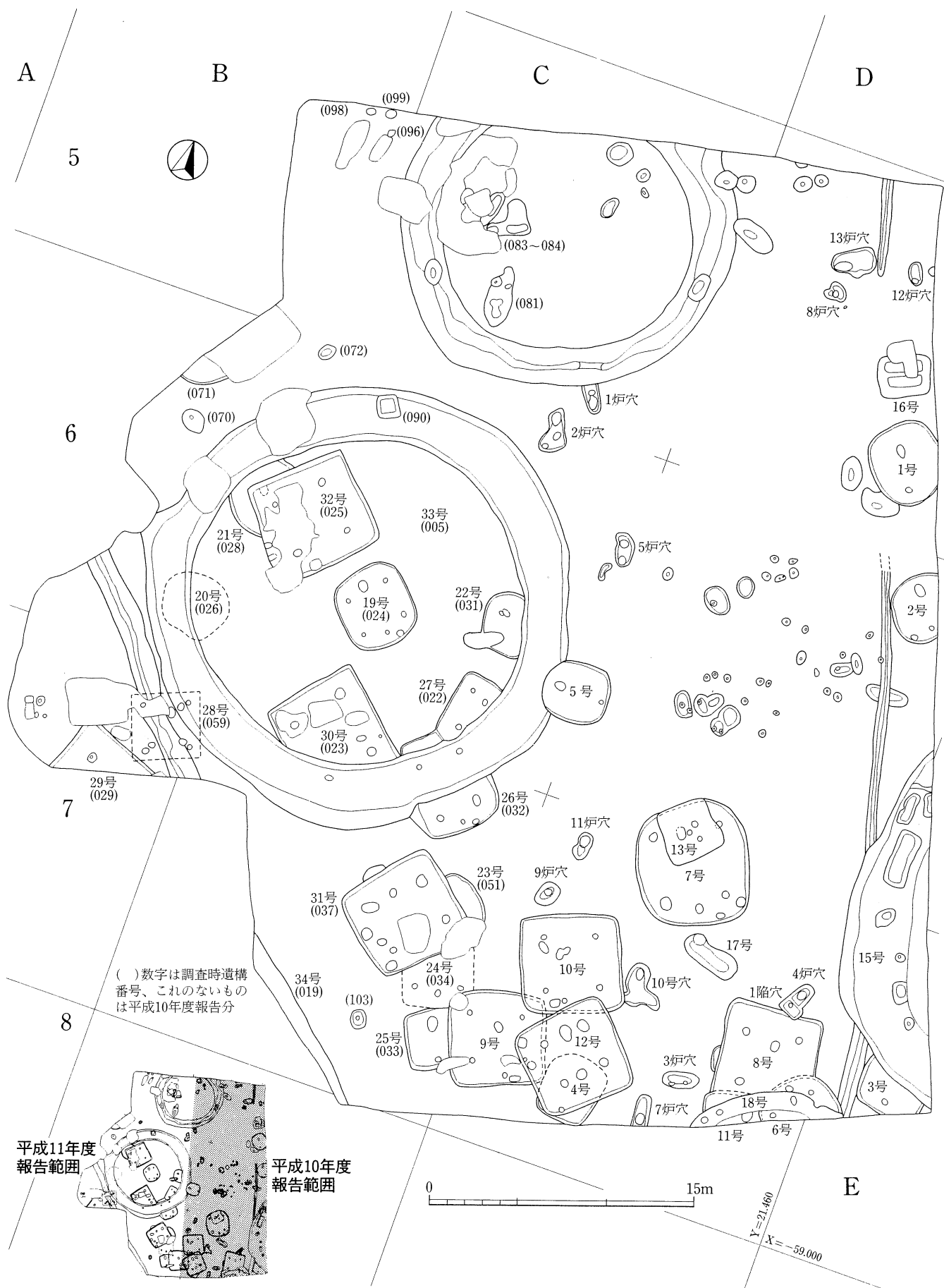
1 竪穴住居

19号遺構（第4図）

遺 構 C6グリッドに位置する。遺構の切り合いはない。平面形態は小判型を呈する。規模は4.69m×4.14mを測り、主軸方位はN-45°-W。壁の立ち上がりは緩やかで確認面から床面まで16cmを測

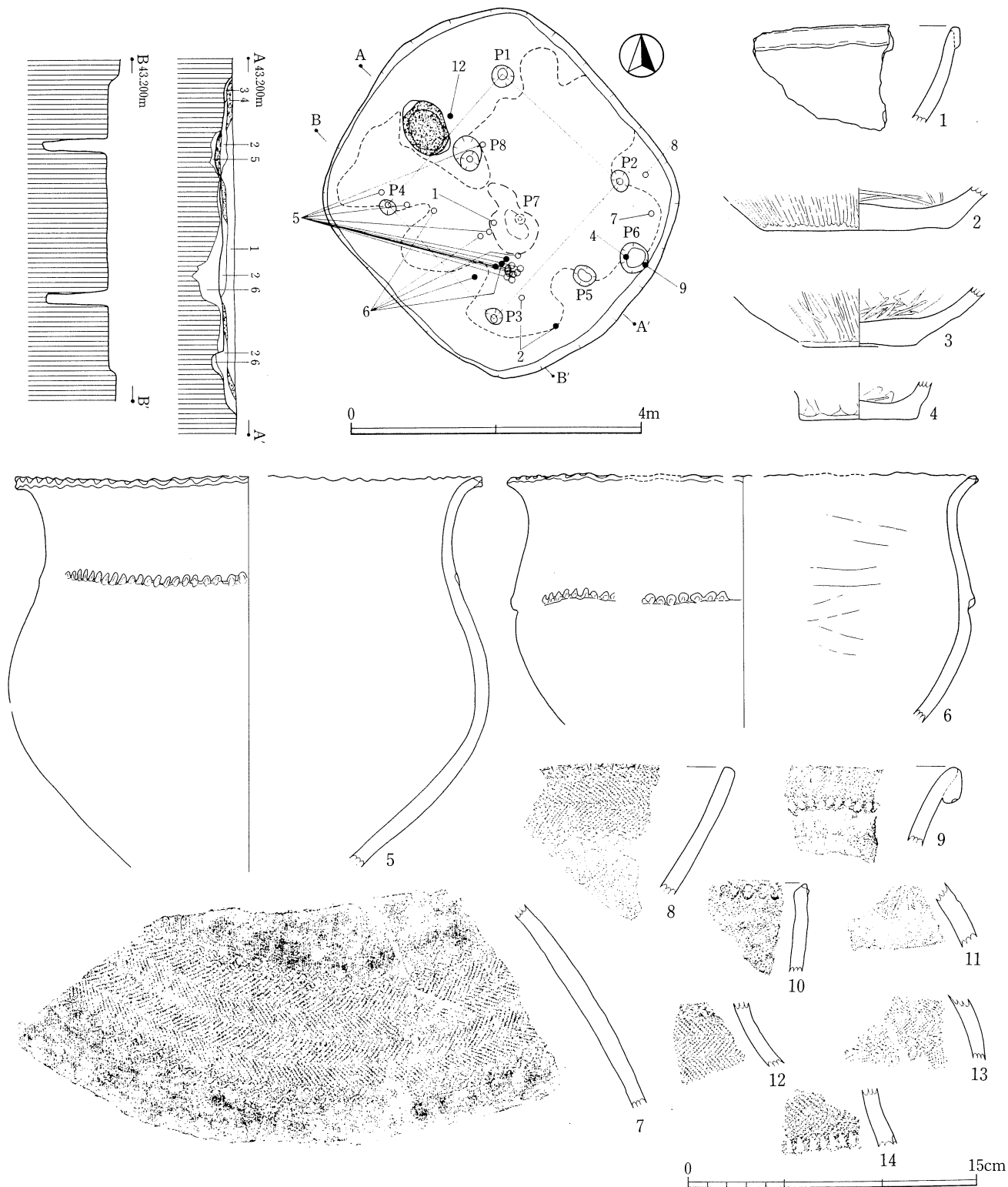


第2図 畑木小谷遺跡周辺地形図



第3図 畑木小谷遺跡全体図

る。床面は全体的に良く踏み締められている。住居北西側に76cm×54cmの炉が備えられ、周溝は認められない。P1～P4は支柱穴で、床面から63cm、58cm、85cm、83cmを測る。P5は入り口施設に伴うものと考えられ、深さは19cm。P6は位置から判断していわゆる貯蔵穴と考えられ、深さ15cmを測る。底面は平坦部は認められず、レンズ状に窪む形態を呈する。P7は床面除去後に検出された。



第4図 19号遺構と遺物実測図

36cmの深さを測る。覆土中には、比較的多くの焼土が、床面からやや浮いたレベルで認められた。焼土中には、炭化物が混入する。一部に、住居の構築材と見られる炭化材が検出されており、断面形は円形を呈する。

遺物 遺物はそのほとんどが4層の焼土層以下の出土である。1・7～11・13・14は覆土中の出土である。

土層 1層は暗褐色土、2層は焼土粒多く含む暗褐色土、3層は暗黄褐色土、4層は炭化物粒多く含む焼土、5層は暗赤褐色土、6層は暗褐色土。

20号遺構（第5図）

遺構 B6グリッドに位置する。西側半分は33号遺構（古墳周溝）により破壊されている。東側についても攪乱により、明瞭な床面は認められず、遺存状態は極めて悪い。覆土中より遺物が出土し、その下位にはごく弱い硬化面も確認できたことから、本遺構を住居と認定した。住居としての施設は検出されていない。

遺物 1は硬化面の直上から、これ以外は僅かに残る覆土中から出土している。

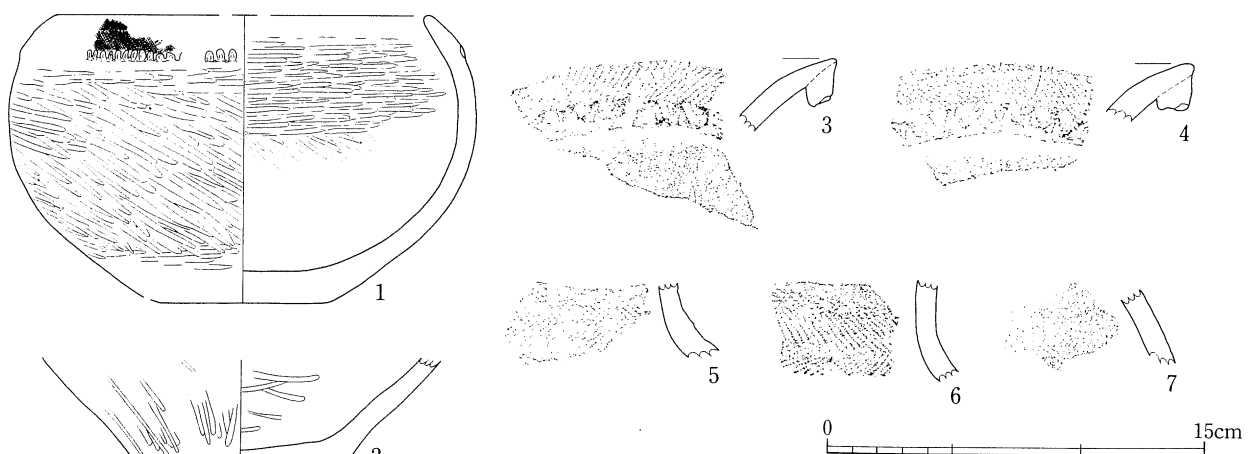
21号遺構（第6図）

遺構 B6～B7グリッドに位置する。北西側壁が33号遺構（古墳周溝）によって削られている。また、住居の東側1/2以上は32号遺構（竪穴住居跡）の床下より検出された。よって、住居中央から東側にかけては、32号遺構の影響を受けている。平面形態は遺存部位から不整楕円形を想定しうるが、主軸方位は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、確認面から床面まで24cmを測る。床面は壁際までよく踏み締められており、周溝は伴わない。施設としては、炉が1/2程度遺存し、短軸長は52cmを測る。柱穴や貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物 4, 6は床面直上から、これ以外は覆土上層からの出土である。

22号遺構（第7図）

遺構 C6グリッドに位置する。東側は33号遺構（古墳周溝）により削られており、遺存度は全体の1/3程度である。平面形態は不整楕円形と考えられ、3.90m×3.20mを推定する。主軸方位は不明。壁は緩く立ち上がり、確認面から床面までは26cmを測る。床面は一様に締まりはなく、図示した硬化範囲は、相対的にやや締まっている程度にとどまる。施設としては住居北西側に長軸長90cmと56cmの



第5図 20号遺構遺物実測図

炉が2基、接して東西に位置する。その部位について、調査時の観察では、明瞭な切り合いは確認できなかった事から、機能した最終段階では2基同時に使用されていた可能性も伺える。東側の炉には土器片が直立した状態で据えられていた。周溝、柱穴等は認められない。覆土の観察から、本遺構は東側から埋没していった様子がうかがえる。上層にハードロームブロックを主体とする層が認められることから、人為的な埋め戻しや、古墳築造時の盛り土の可能性が考えられる。

土 層 1層は焼土粒を微量含む暗褐色土、2層はソフトロームがしみ状を呈する暗黄褐色土、3層はハードロームのブロックが主体をなし、黒褐色土が少量含まれる黄褐色土、4層は暗黄褐色土、5層はあまり締まらない暗褐色土、6層ローム粒を微量含む暗褐色土。

遺 物 1・4は炉内と覆土下層から出土したものが接合している。また、4の1片は炉内の壁に直立した状態で出土した。2・3は覆土上層の出土遺物である。

23号遺構（第7図）

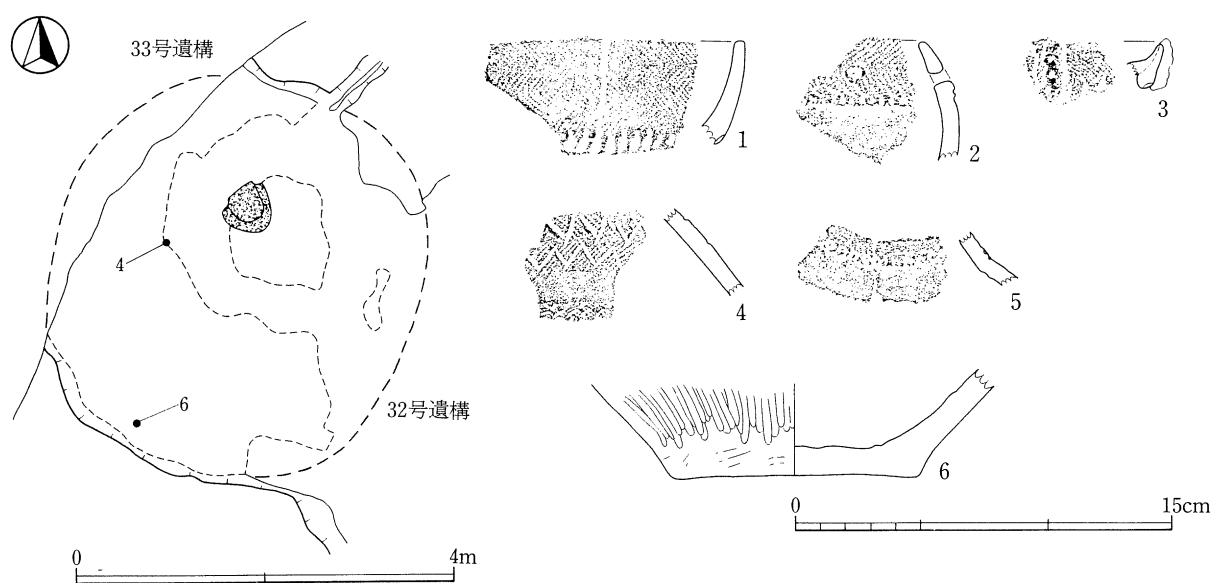
遺 構 C7グリッドに位置する。南西側が31号遺構（竪穴住居跡）及び攪乱坑に破壊されている為、全体の1/3程度の遺存と考えられる。平面形態は不整楕円形を推定する。規模、主軸方位については不明。床面は北側に於いてよく踏み締められている。柱穴、炉等の施設は検出されていない。壁はほぼ直立に近くたちあがり、確認面から床面まで14cmを測る。

遺 物 出土遺物は皆無であった。

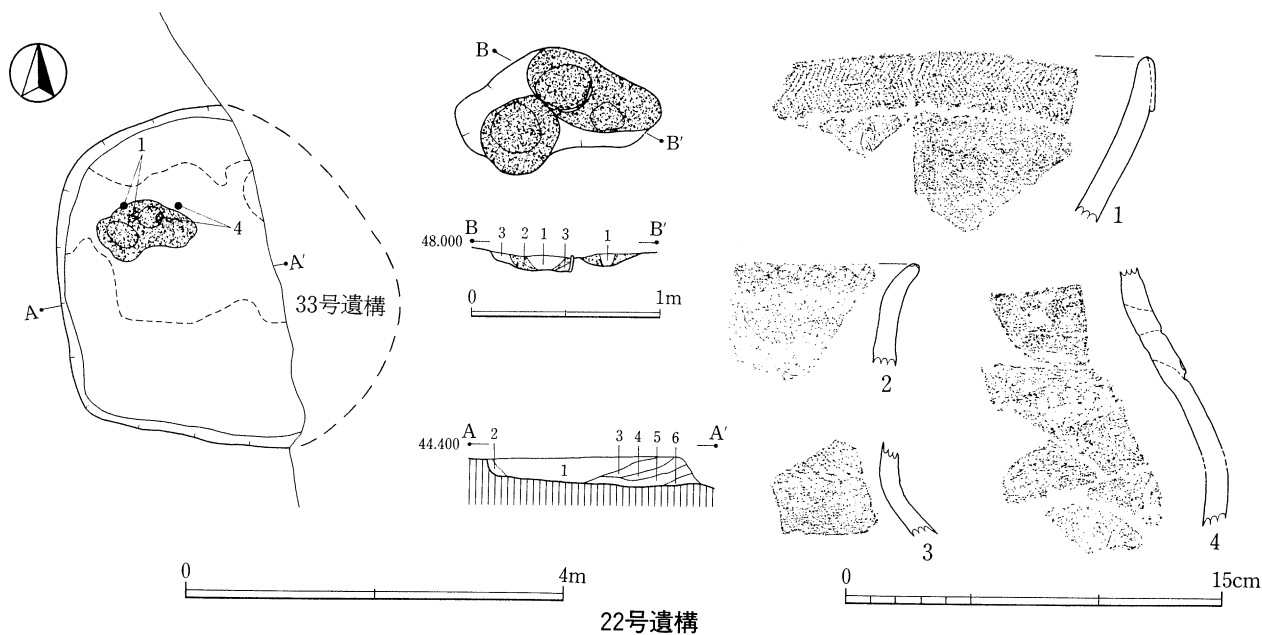
24号遺構（第7図）

遺 構 C7グリッドに位置する。南北で竪穴住居と重複する。土層観察から本遺構は、9号遺構、31号遺構より古く、25号遺構より新しい。広範囲の攪乱により、本遺構は床面まで削られており、遺存状態は悪い。平面形態は、僅かに残る壁から、隅丸方形と思われる。主軸方位は、主柱穴P1、P2を結ぶラインに、直交するラインを主軸と仮定すると、N-17°-Wである。P3は梯子穴で、P4は貯蔵穴と思われる。P4の開口部西側には、黄橙色の粘土塊が検出されている。削平面からの深さは、P1が74cm、P2が68cm、P3が49cm、P4が13cmである。

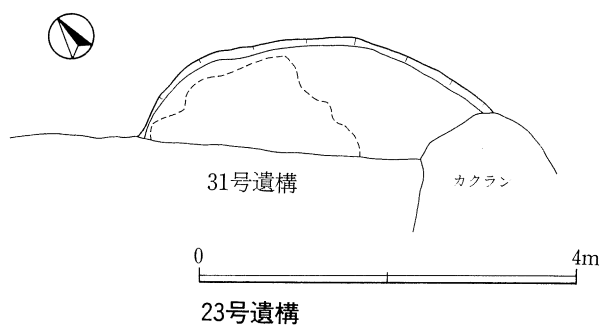
遺 物 1は住居南側入り口付近の壁際、床面直上から出土している。



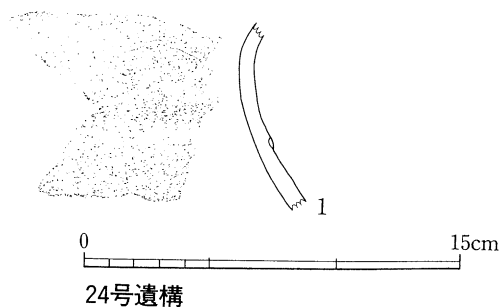
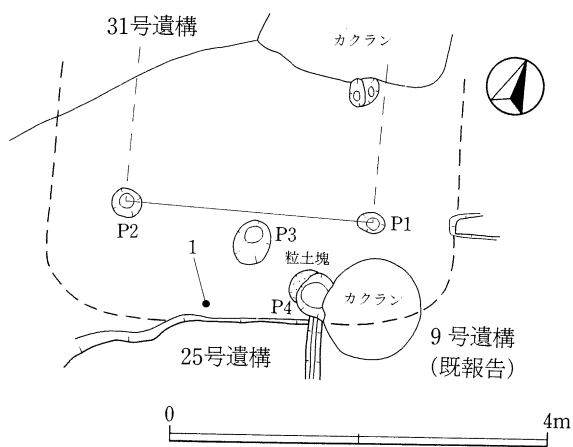
第6図 21号遺構及び遺物実測図



22号遺構



23号遺構



24号遺構

第7図 22・23・24号遺構及び遺物実測図

25号遺構 (第8図)

遺 構 C7グリッドに位置する。北側、西側が遺構と攪乱坑により床面まで破壊されている。全体の2/3程度の遺存と考えられる。平面形態は遺存部の形態より、隅丸方形と思われる。主軸方位はN-27°-Wを測る。規模は3.72m×3.48mを推定する。床面はよく踏み締められており、平坦である。主軸線上北側に炉があり、88cm×52cmを測る。炉内は良く焼き締まっている。壁はほぼ直立に近くたちあがり、確認面から床面まで15cmを測る。支柱穴、周溝、貯蔵穴等の施設は検出されていない。調査時の観察により、自然堆積と思われる。

遺 物 出土遺物はほとんどが床面から10cm以内の高さで出土しているが、2、4は遺構に伴う可能性は低い。

26号遺構 (第9図)

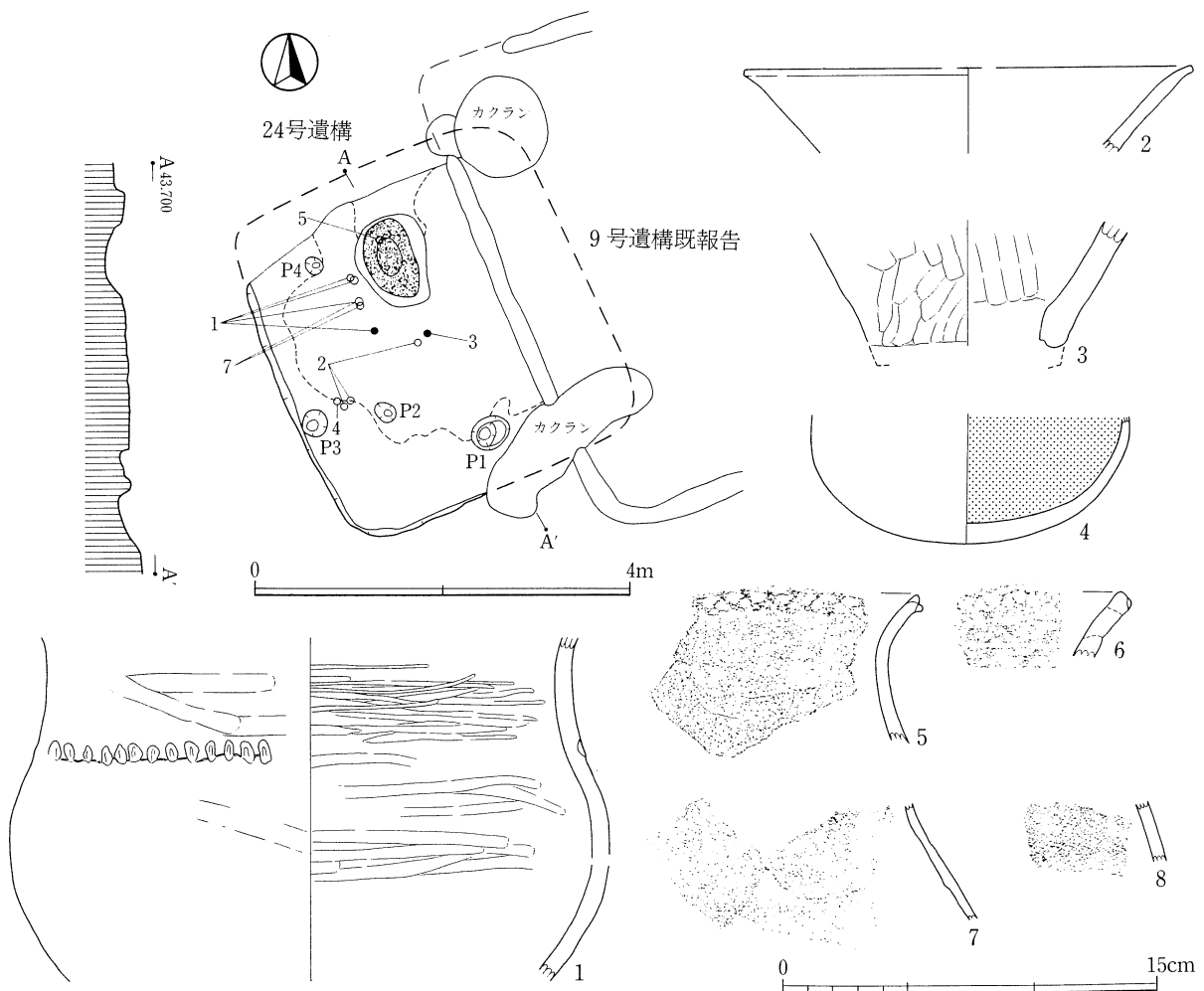
遺 構 C6～C7グリッドに位置する。中央が33号遺構に削られ、北側隅で27号遺構と重複するが、切り合い関係は不明瞭である。遺存度は1/2程度である。平面形態はやや胴張りの隅丸方形であり、規模は5.90m×4.90mを測る。主軸方位は、柱穴の位置関係から推定すると、N-40°-Wとなる。床面は概ね締まりが弱い、硬化面は、支柱穴を含むその内側に寄る傾向が見られる。床面が壁際ほど締

まりが弱いと判断し難いが、掘形面においても周溝の存在は認められない。壁は緩やかに立ち上がり確認面から床面までは18cmを測る。P1～P4は支柱穴と見られ、P1は78cm、P2は86cm、P3は79cm、P4は90cmを測る。P5は出入り口施設に伴うと見られ、26cmを測る。P6はいわゆる貯蔵穴とみられる。プランは上端、下端共に不整楕円形で、底面はレンズ状に僅かに窪む。深さは、床面から26cmを測る。

遺物 6以外は床面よりやや浮いた状態で出土した。5は底部を下に、つまり、正位で出土した。6は貯蔵穴底から倒れた状態で出土した。器形は台付甕と思われるが、甕底部との接合面が、使用痕と見られる摩滅が認められる事から、転用されたものと考えられる。

27号遺構（第10図）

遺構 C6グリッドに位置する。東側が33号遺構（古墳周溝）に削られ、南側で26号遺構（竪穴住居）と重複するが、新旧関係は不明である。住居北側一部に床面を掘り込む近年の攪乱が入る。全体の1/2程度が遺存する。平面形態は胴長の隅丸方形を呈する。主軸方位は遺存する壁と炉の位置からN-10°-Eを測る。住居規模は4.38m×3.60mを推定する。壁は周溝から僅かに開きながら立ち上がり、15cmを測る。床面は全体的に締まりがわるく、硬化範囲とした部位もやや締まる程度である。炉は56cm×48cmを測り、炉内は良く焼けていた。ピットは、P1が23.7cm、P2が44.1cm、P3が17.2



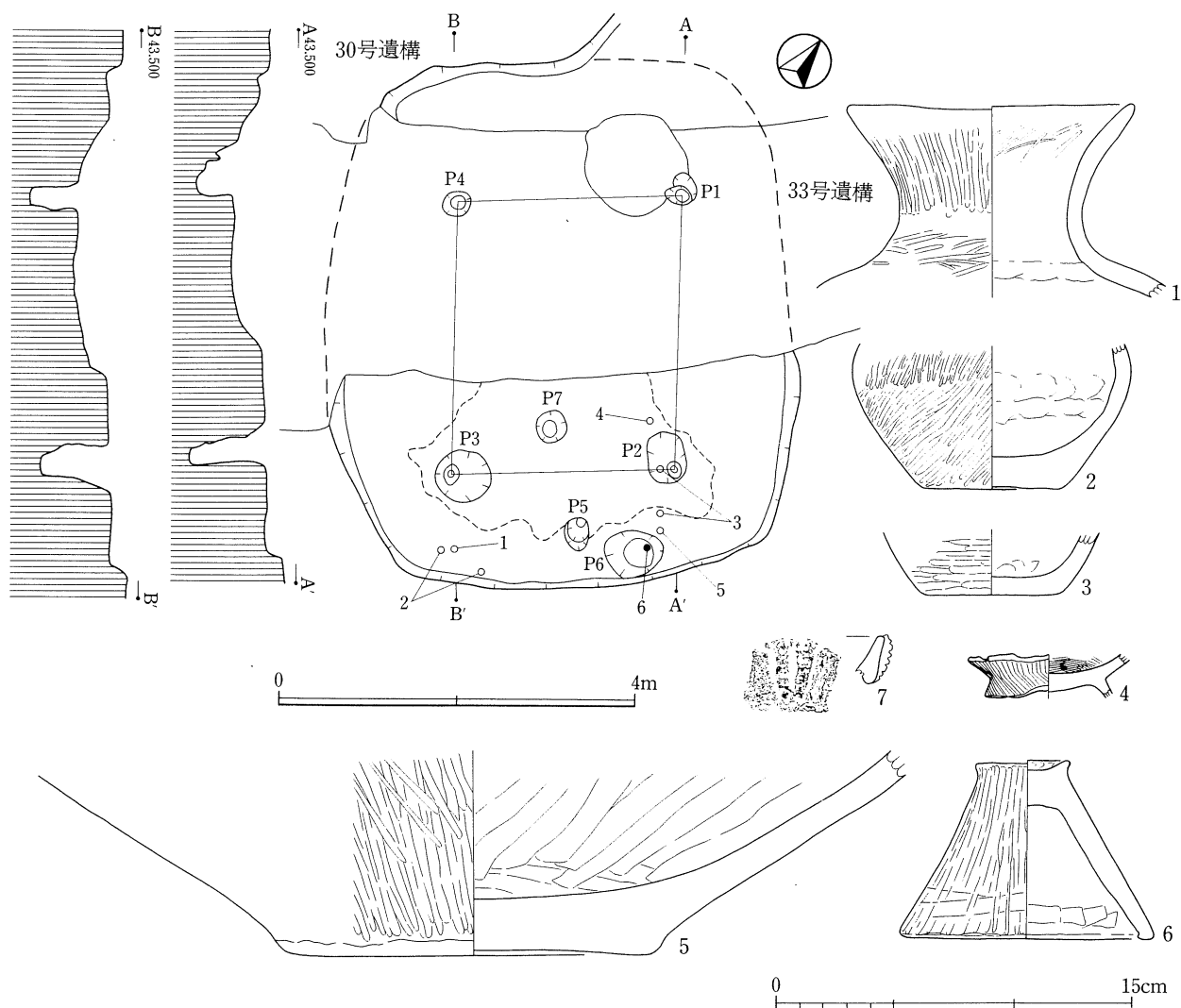
第8図 25号遺構及び遺物実測図

cm、P 4 が11.7cm、P 5 が13.5cmを測るが、深さ、位置から考えると、柱穴は認めがたい。周溝は遺構の重複によって途切れているが、全周すると考えられる。

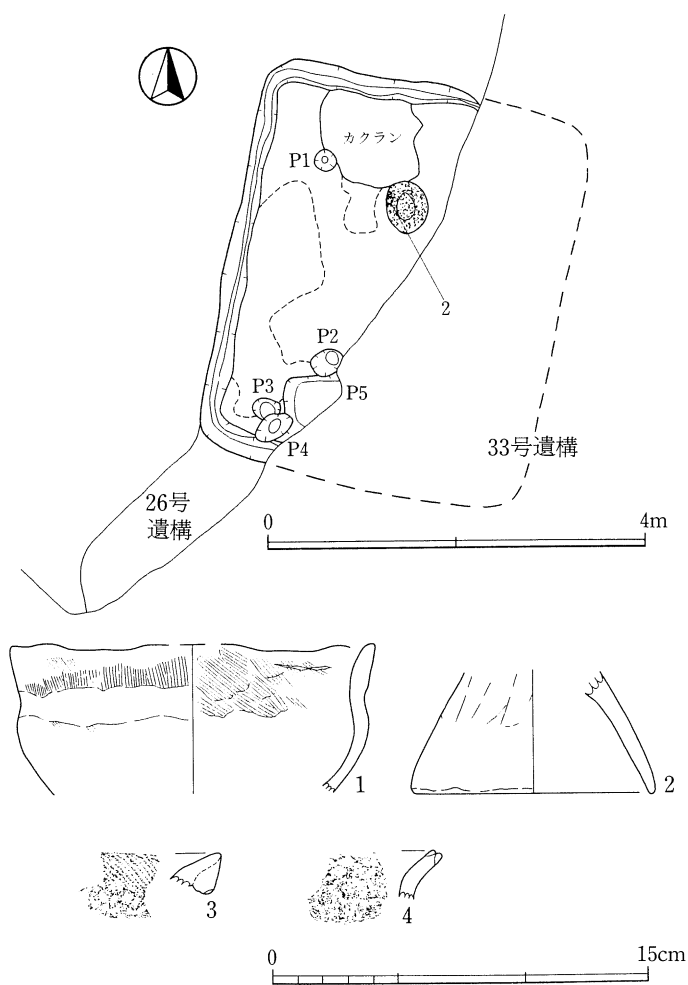
遺 物 遺物量は少ない。床直上から検出された遺物は細片に尽きる。1 は覆土中の出土であり、3、4 は床よりやや浮いて検出された。他に、P 5 の覆土上面、床面とほぼ同レベルから、直径が80cm程に復元可能な壺（器種不確定）の一部を検出している。

28号遺構（第11図）

遺 構 B 7 ～C 7 グリッドに位置する。33号遺構（古墳周構）、34号遺構（溝）、29号遺構（竪穴住居）、近年の攪乱坑に床レベルまで破壊され、依存度は全体の1/4以下である。平面形態は、唯一残る南東コーナーの形状から、胴張りの隅丸長方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-24°-Eを、住居規模は、4.10m×3.90mを復元出来る。炉は攪乱坑により一部削られているが68cm×40cmを測る。ピットの深さは、P 1 が55cm、P 2 が57cm、P 3 が60cm、P 4 が57cm、P 5 が53cm、P 6 が54cm、P 7 が54cmを測る。柱穴の配置から、今回の調査では唯一、建て替えによる拡張が考えられる事例である。炉は、その位置から外側の柱穴、P 4 からP 7 段階の住居に伴うと考えられる。



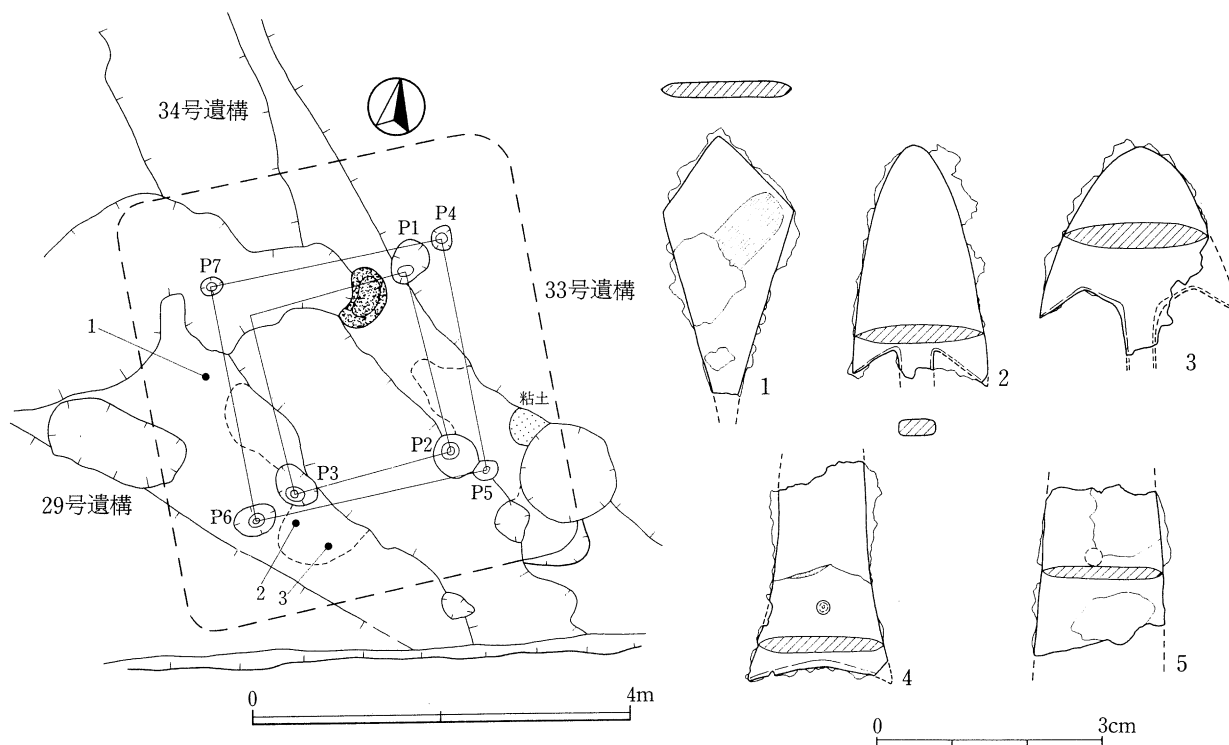
第9図 26号遺構及び遺物実測図



第10図 27号遺構及び遺物実測図

遺物 鉄鏃5点のみの出土である。調査時では、本遺構の範囲が確定できず、遺物は29号遺構に帰属するものとして取り上げたが、整理の段階で、その出土位置から本遺構に伴う遺物と判断した。出土位置は、P6周辺の2箇所から、何れも床面付近である。出土時の切先の方は再現できない。

1は茎部を欠損する。鏃身は圭頭式を呈する。鏃身断面形状は切刃か平造で、木質が付着する。2は頸部を欠損する。逆棘関を呈し、鏃身は柳葉式に含まれるであろうか。断面形状は両丸造りである。3は頸部を欠損する。逆棘関をなし、腸袂を持つ。鏃身は三角形式に含まれるであろうか。鏃身断面形状は両丸造りである。4は切先を欠損する。無頸で逆棘関をなし、鏃身は柳葉式を呈する。目釘が遺存する。鏃身断面は平造りと思われる。5は鏃身中央部のみの遺存である。レントゲン写真によると目釘穴が穿たれている。断面形状は平造りと思われる。



第11図 28号遺構及び遺物実測図

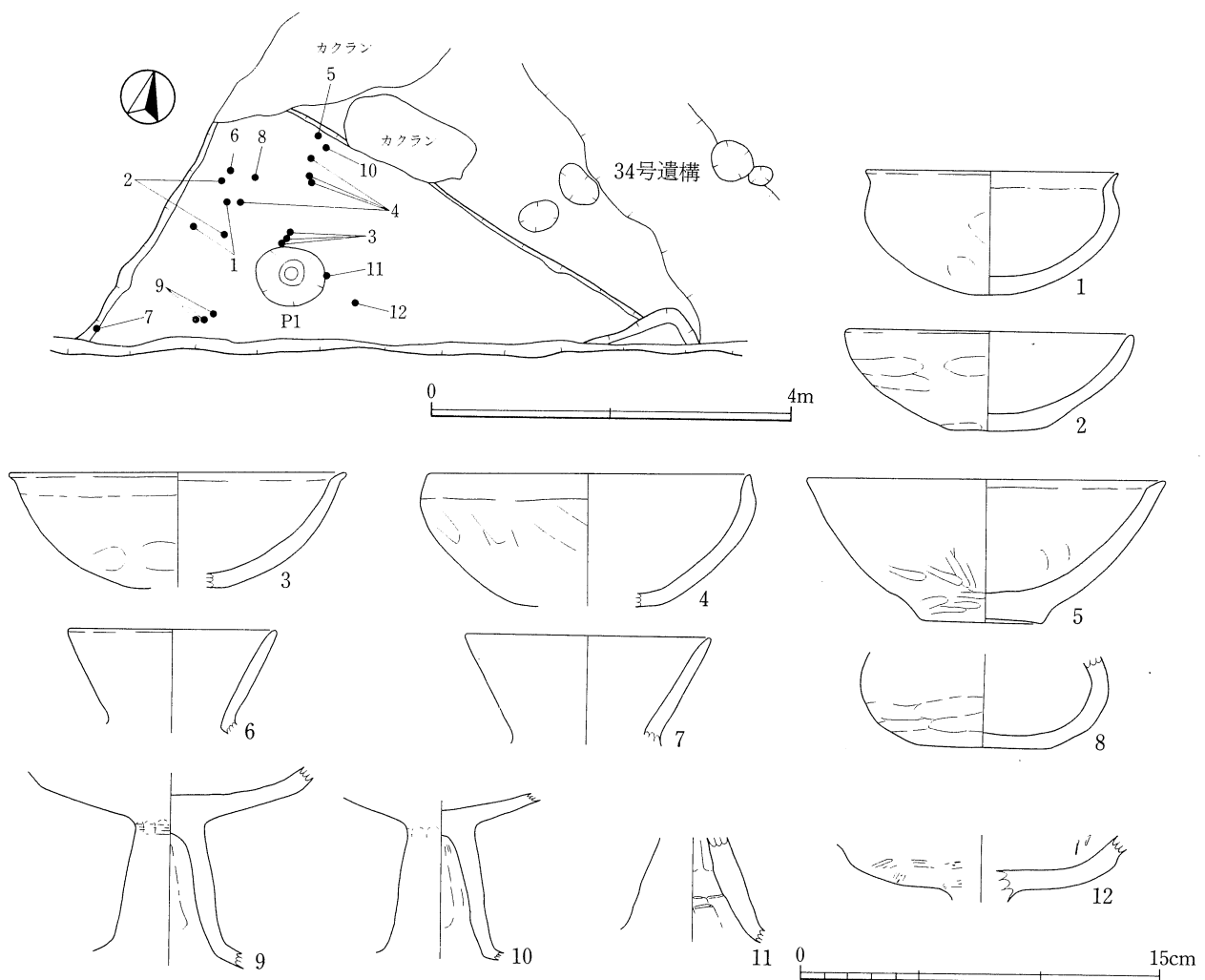
29号遺構（第12図）

遺 構 B7グリッドに位置する。南側は調査区外となり、全体の1/4程度の検出と思われる。平面形態は方形を呈するであろう。主軸方位は不明。床面は貼り床構造をもち、全体に締まりが弱い。周溝は掘形面においても確認できなかった。炉は検出されていない。壁高は17cmを測る。P1は支柱穴とみられ、上端で78cm×62cm、深さは109cmを測る。覆土はロームブロックを多く含み、締まっていない。

遺 物 遺物はほとんどが、床直上の検出である。3は底部が欠損しているが平底を呈すると見られる。9～12の高杯は小型のものばかりである。完形品はない。第21図の8は被熱した石で、床直上から出土している。

30号遺構（第13図）

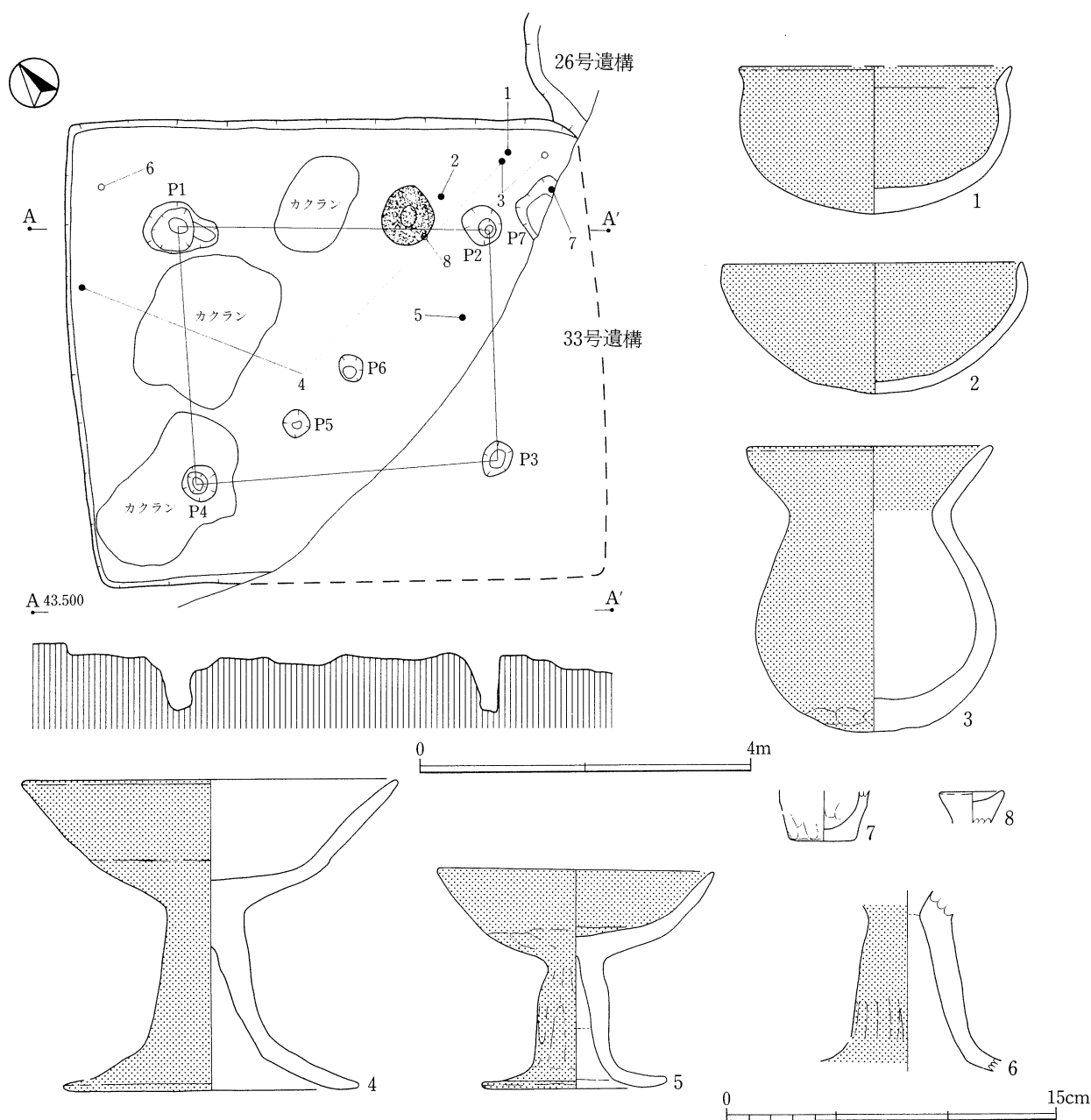
遺 構 C6～C7グリッドに位置する。南側を33号遺構（古墳周溝）に、北西側で3カ所、攪乱坑により床面に達する破壊を受けている。平面形態は長方形を呈し、6.20m×5.64mを測る。主軸方位はN-45°-E、炉はP1、P2間を結ぶライン上に位置し、70cm×61cmを測る。壁高は36cmを測る。床は張り床構造で、一様に締まりは弱い。P1～P4が支柱穴とみられる。P7は不整形ではあるが、



第12図 29号遺構及び遺物実測図

いわゆる貯蔵穴と思われる。深さはP1が66cm、P2が67cm、P3が65cm、P4が66cm、P5が40cm、P6が24cm、P7が9cmを測る（P3、P4は推定値）。周溝は掘形面でも認められていない。検出された炉は、焼土量が少なく、炉の底部は燃焼による締まりもみられない。主柱穴（P2）との間隔も30cmと近接することなどから、31号遺構と同様に、北西方向にもう一つの炉の存在も考えられる。この炉を想定した場合、主柱穴による主軸方向はN-50°-Wとなる。

遺物 遺物量は比較的多く、覆土下層からの出土に占められる。出土状況は、炉からP7にかけての範囲、床面直上に遺物の集中がみられる。実測可能な破片の1/3程が高杯である。3は床面よりやや浮き、胴部が小さく割れて出土している。4は脚部が住居東側隅に、杯部は正位で北西側壁際に置かれていた。どちらも器面の色調から二次的な被熱を受けている可能性があること、脚部が床面で

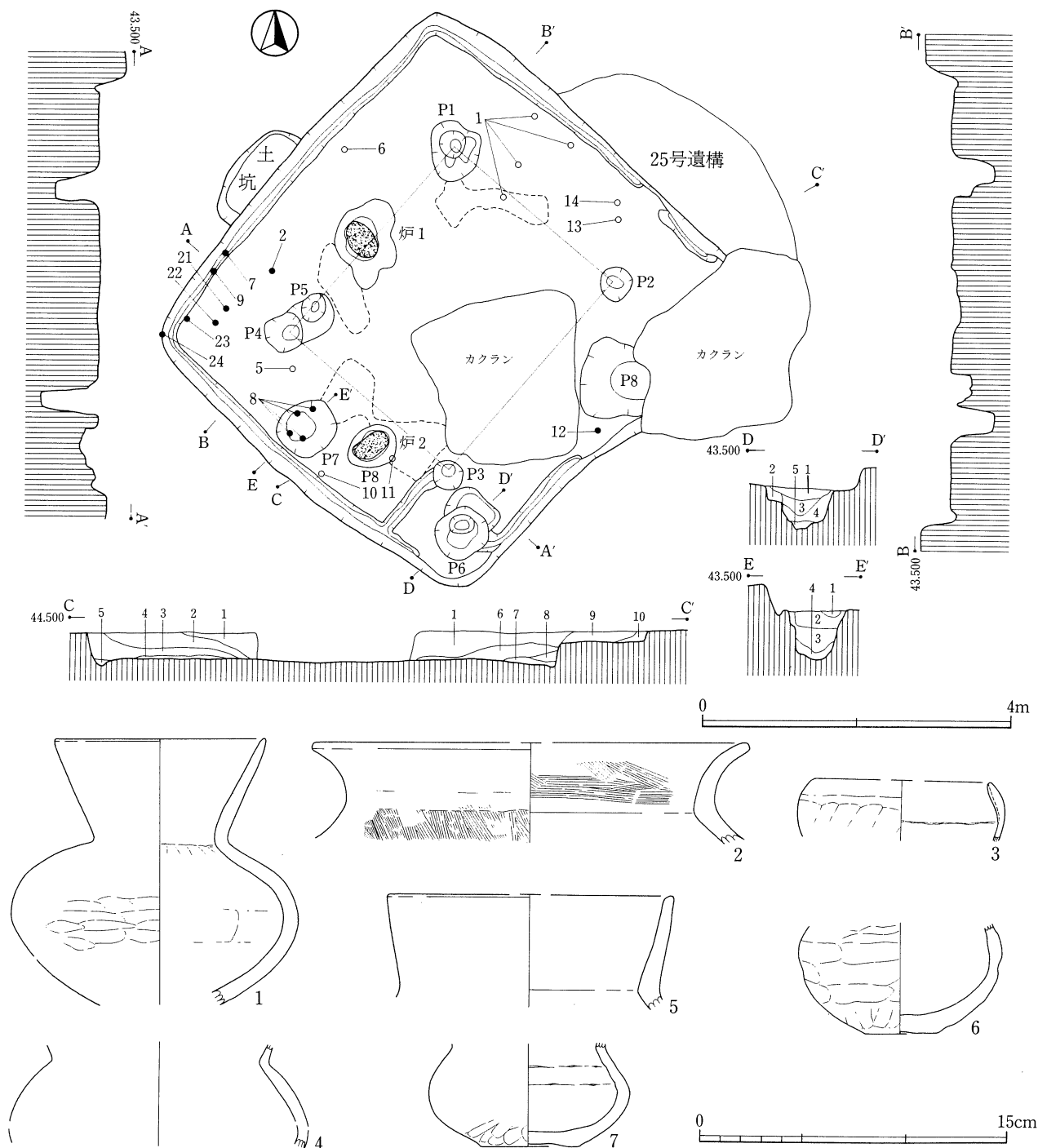


第13図 30号遺構及び遺物実測図

出土している事などから、脚部の扱いは不明確だが、住居の最終的な段階で、杯部は壁際に置かれていたと考えられる。7はミニチュア土器で貯蔵穴底から、8の土師器蓋のつまみは、炉の火床面からの出土である。

31号遺構（第14・15図）

遺 構 C7グリッドに位置する。東側で25号遺構（弥生時代後期竪穴住居）を、南側で24号遺構（古墳時代前期竪穴住居）を切っている。東南側隅と中央よりやや南側に床面に達する攪乱を受けて

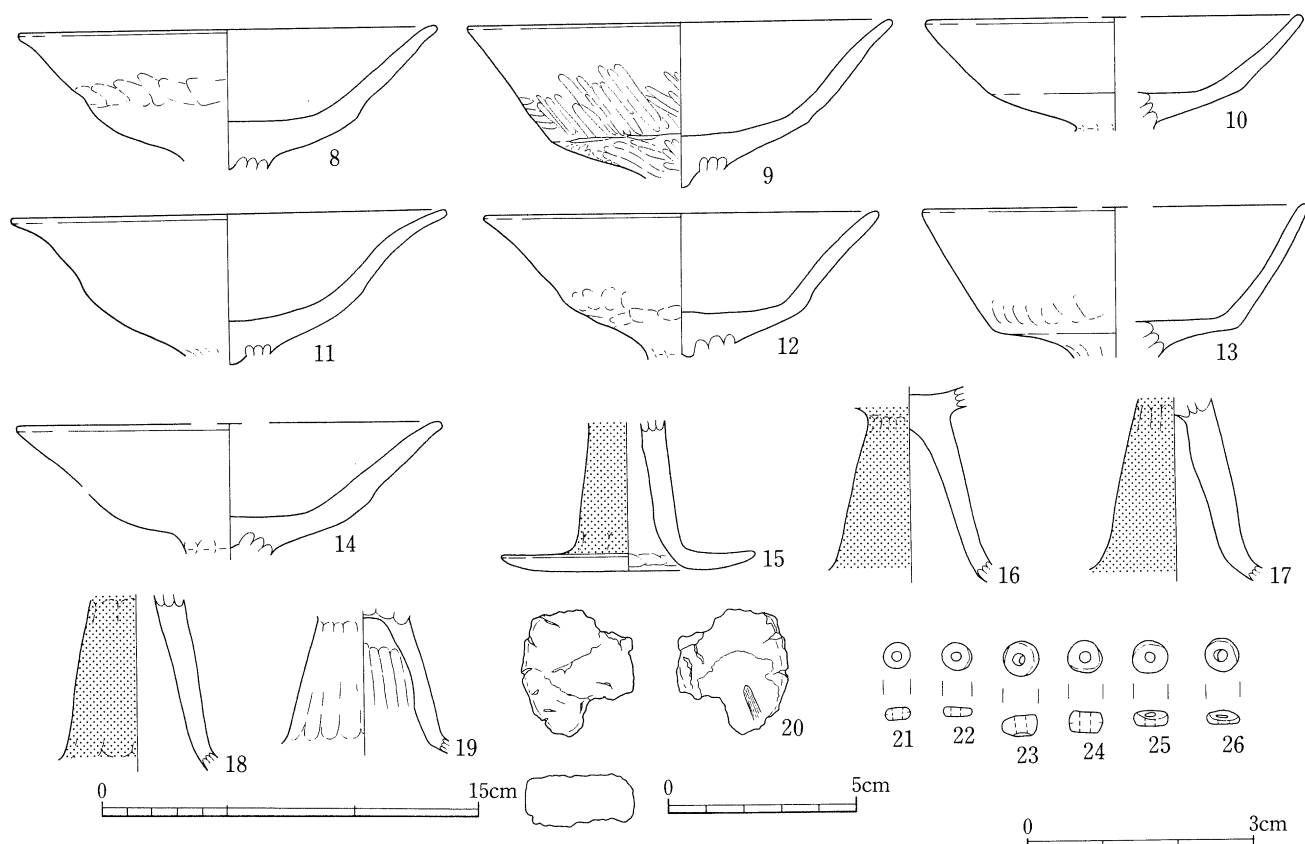


第14図 31号遺構及び遺物実測図

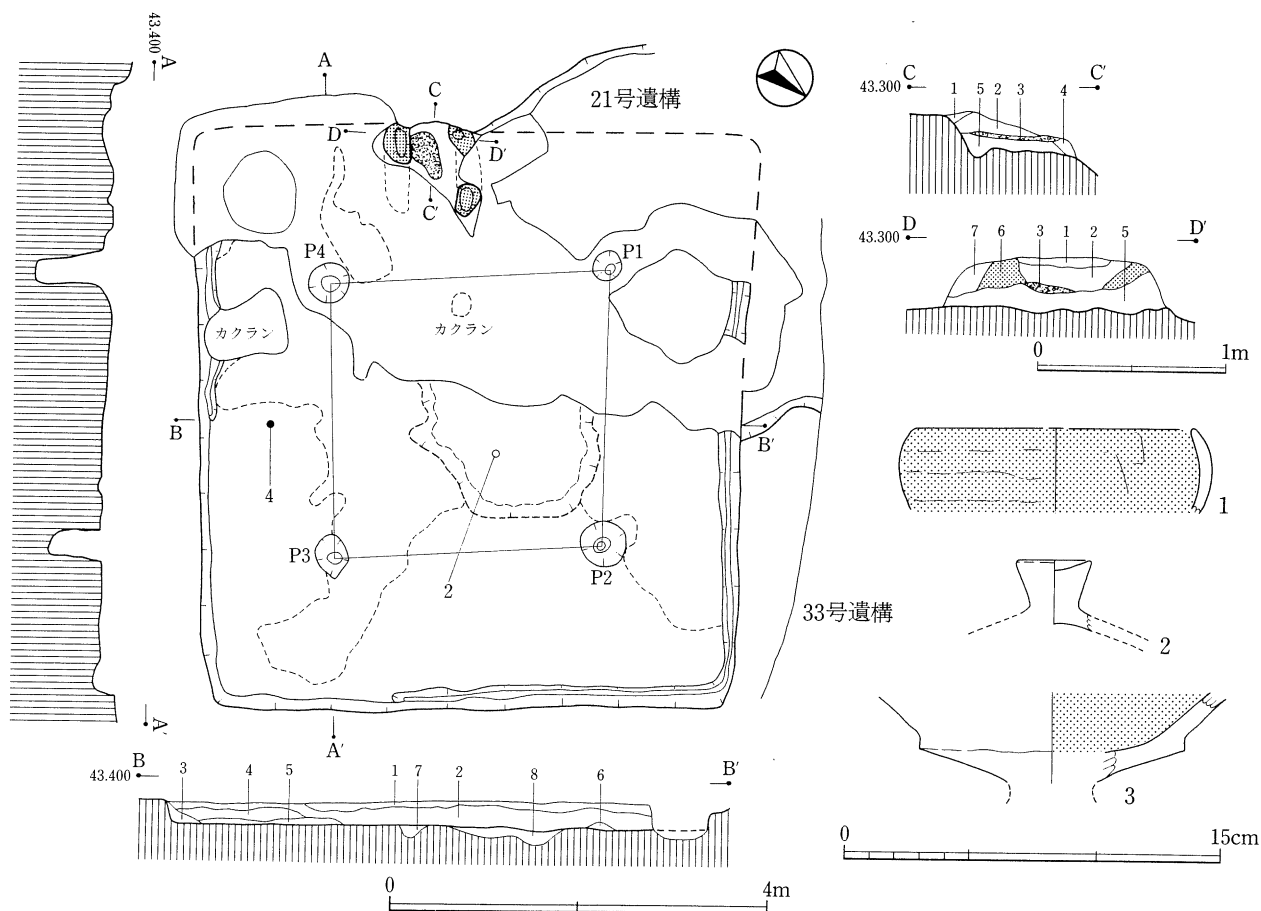
いる。隅丸方形で、5.98m×5.65mを測る。主軸方位は、N-49.5°-W、壁の高さは44cmを測る。床は貼り床構造で締まりは弱い。図示した硬化範囲は、周辺床よりもやや締まる程度の硬化である。炉は2基検出された。炉1は54cm×34cmで良く焼けている。炉2は52cm×32cmで炉1に比べ焼土量が少なく焼き締まりも弱い。周溝は4面に認められるが、掘形面においても断続的である。住居南側隅には、P3に接して、幅17cm、深さ6cm程の間仕切り溝が認められる。P1～P4は支柱穴、P6、P7、P8はいわゆる貯蔵穴とみられる。P8はレンズ状に緩く落ち込み、凹凸が多い。覆土の状況から、別遺構（24号遺構）に伴う可能性が高い。深さはP1が55cm、P2が80cm、P3が74cm、P4が60cm、P5が28cm、P6が55cm、P7が64cm、P8が20cmを測る。他に、住居北西側の1.4m×0.4mの掘り込みは、覆土の状況から、住居に先行する土坑と判断される。

土 層 (C-C') 1層はローム極小粒多く含む暗褐色土、2層は暗褐色土、3層は炭化物小粒微量含む暗褐色土、4層は暗黄褐色土（貼り床）、5層は暗黄褐色土、6層は炭化物小粒少量含む暗褐色土、7層は暗黄褐色土（貼り床）、8層はローム小粒密に含む暗褐色土、9層は焼土粒少量含む暗褐色土（25号遺構覆土）、10層は暗黄褐色土。(D-D'、E-E') 1層は黒褐色土、2層はローム粒少量含む黒褐色土、3層は暗褐色土、4層はロームブロック少量含む褐色土。

遺 物 遺物量は多く、実測可能遺物の約1/3は高杯である。床面が上記の状態の為、掘りすぎている可能性が大きく、本来、遺物は床面近くのものが多いと思われる。住居西側隅においては、7の小型壺の胴部と、9の高杯の杯部が、周溝に沿った床の縁辺部に、正位で並んで出土した。隣接して、滑石製の臼玉6点が認められた。床面から2点、壁面中位から2点、近接した覆土中から2点が出



第15図 31号遺構遺物実測図



土している。また南西側壁際においてはP7底から8の高杯杯部が、P7に隣接した壁際から、共に伏せた状態で出土している。20は土製不明品で、2カ所欠損しており、全体の2/3程度の遺存と思われる。剥離面に植物繊維が確認できる。

32号遺構（第16図）

遺 構 B6～C6グリッドに位置する。西側

隅は21号遺構（弥生時代後期竪穴住居）の覆土を切っている。住居中央より南西側1/3は床面に届く攪乱を受けている。平面形態は方形で、6.28m×5.78mを測る貼り床構造で、床面は締まりが弱く、図示した硬化範囲はやや締まるにとどまる。住居中央の掘形は浅く掘り窪む。周溝は東側隅で途切れる。カマドは、南西壁に主軸線上をずれて造られているが、攪乱により2/3程度の遺存である。床面より僅か上位に、黄橙色粘土、山砂を主体として袖部を造っている。火床面は掘り込みをもたない。煙道部は明確には認められないが、住居壁に外方向に向かい僅かに掘り出しが認められる。南隅の攪乱中に土坑の残骸が確認出来、貯蔵穴と思われる。P1～P4は支柱穴で、深さはP1が63cm、P2が58cm、P3が58cm、P4が81cmを測る。梯子穴は認められない。

土 層 (B-B') 1層は焼土粒微量含む暗褐色土、2層は炭化物少量含む、暗褐色土、3層はロー

第16図 32号遺構及び遺物実測図

ムブロック少量含む暗褐色土、4層は焼土粒微量含む暗褐色土、5層は焼土粒、炭化物粒多く含む暗褐色土、6層は暗赤褐色土、7層は暗黄褐色土、8層はロームブロック主体で、焼土粒、炭化物粒、褐色土少量含む。(C-C'、D-D') 1層は暗褐色土、2層は黄橙色粘質土少量含む暗褐色土、3層は暗赤褐色土、4層は焼土粒少量含む暗褐色土、5層は暗褐色土、6層は砂粒多く含む黄橙色粘質土である。

遺物 攪乱の影響か、遺物量は少ない。4の曲刃鎌が床面直上から出土している以外は、覆土中の出土である。

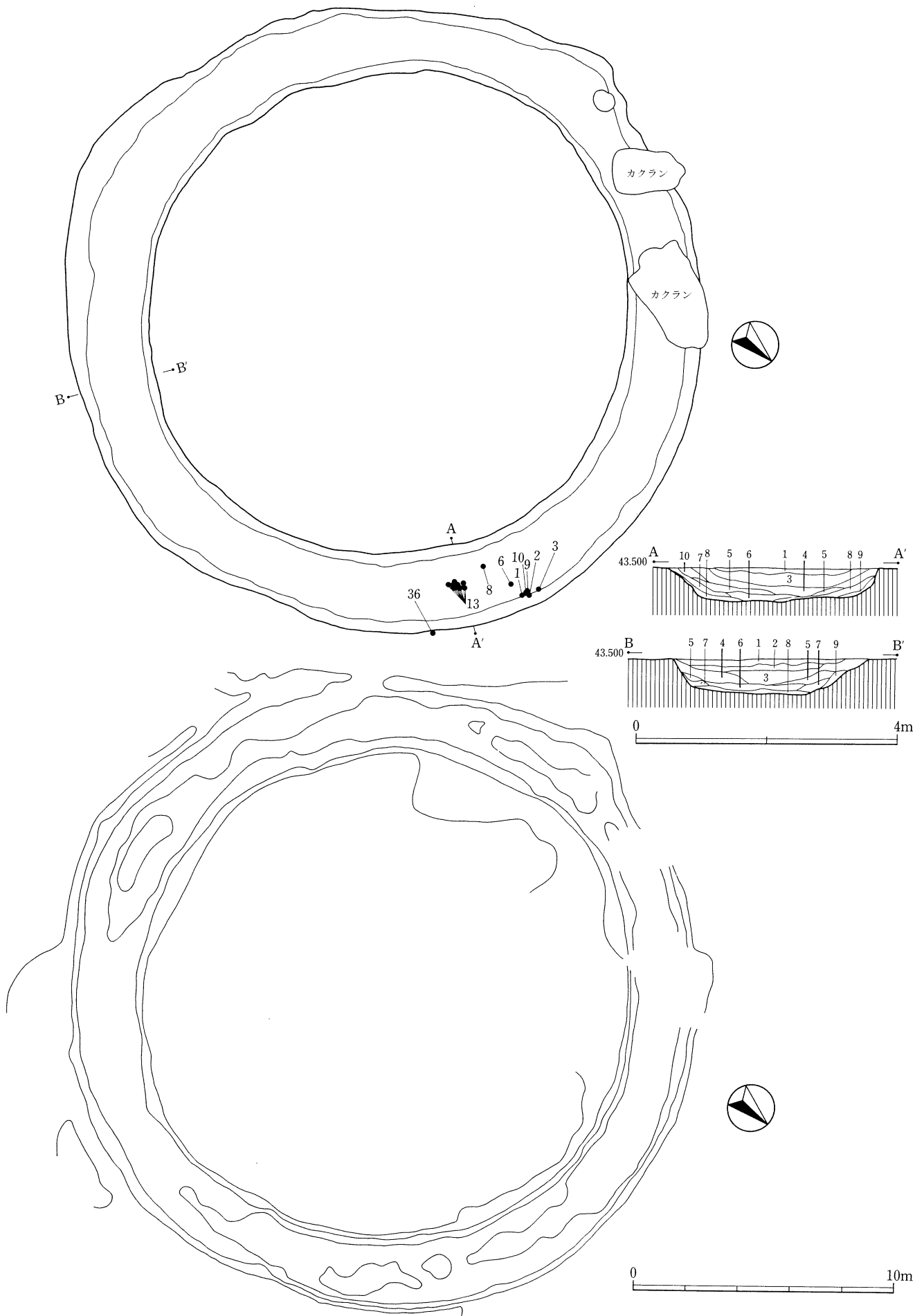
2 古墳

33号遺構 (第17・18・19図)

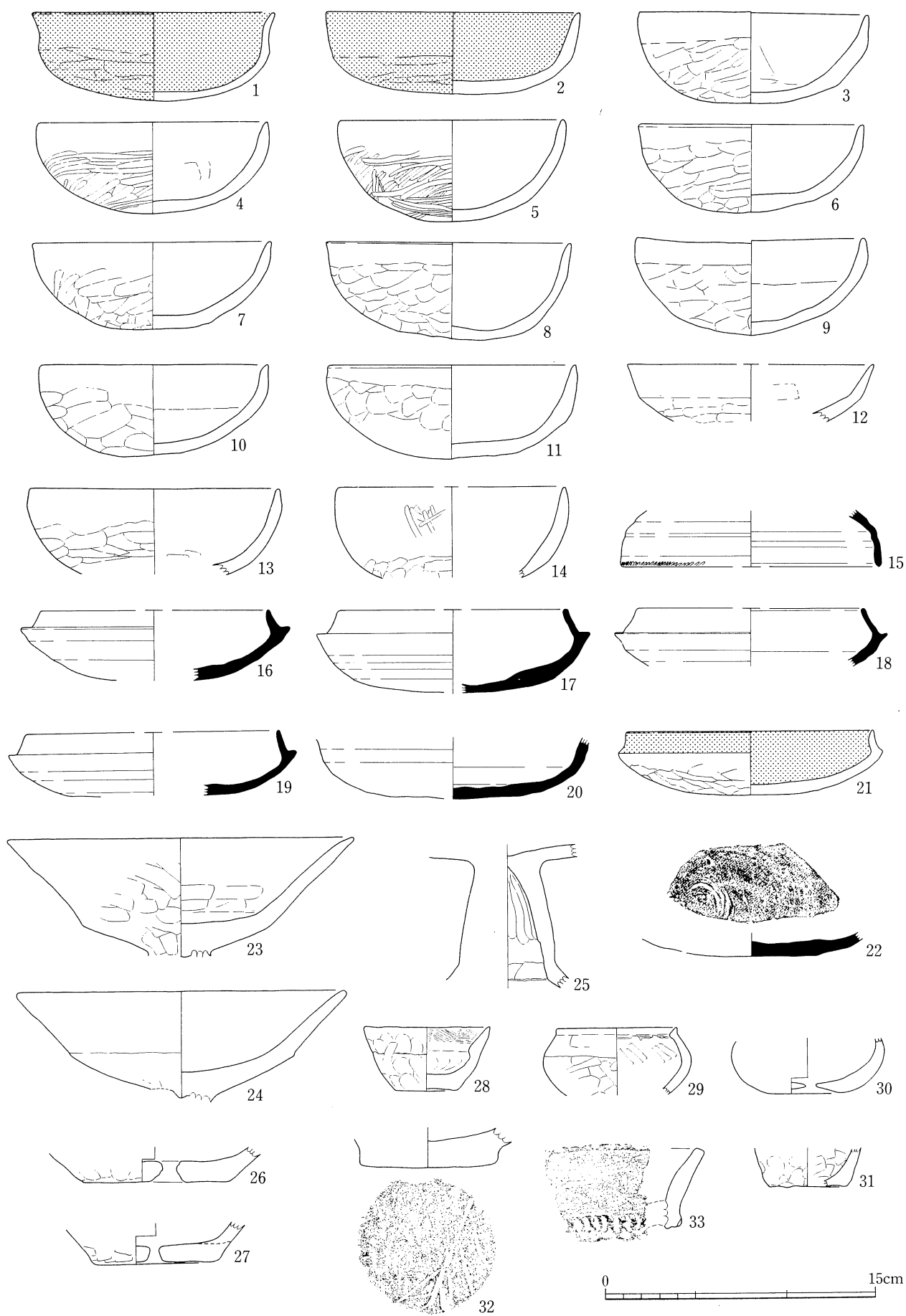
遺構 B6・7～C6・7グリッドに位置する。内径18.5m、周溝は幅3.0m～3.5m、深さ48cm～57cmを測る円墳である。盛り土は削平されており、昭和36年の航空写真でも確認できない。周溝西側で周溝底に達する攪乱坑が3カ所、これより浅い攪乱は古墳の中心より西側に数カ所確認されている。埋葬施設は遺存しない。北東側周溝内、遺物が集中する地点の覆土下層に少量の焼土が確認できる。

土層 1層は暗褐色土、2層は焼土粒微量含む暗褐色土、3層は暗褐色土ローム粒、炭化物粒微量含む、4層は暗褐色土、5層は焼土粒多く含む暗褐色土、6層はローム粒少量含む暗褐色土、7層は暗黄褐色土、8層はソフトロームしみ状を呈する暗黄褐色土、9層はロームブロック少量含む暗黄褐色土。

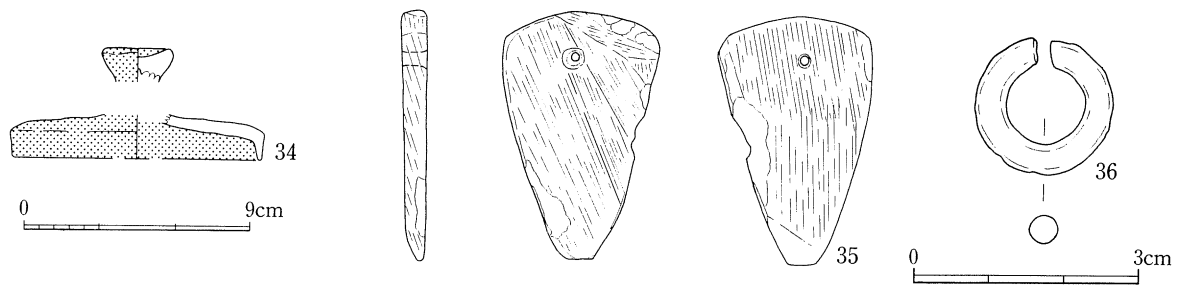
遺物 1～14は北側周溝内から出土している。1、2は須恵器蓋の模倣杯と思われ、口縁を上にして出土した。これらは、胎土、焼成、整形において他の土師器杯とは明らかに趣が異なる。3は正位で、6・8は伏せた状態で、10は9の上に、正位で重ねた状態で、13は潰れた状態で、それぞれ出土した。3・6・7～11・13は胎土、製作技法において極めて類似している。この中には器面に黄橙色の粘土塊が混ざりきらずに残っている個体もあり、精製とは言い難い。35は滑石製の剣型模造品で茎表現のないものである。北側周溝の落ち込み際から出土した。15～22は周溝南西側の28号遺構に近接した覆土上層からの出土である。なお20は杯蓋の可能性が高い。23～25の高杯及び、34の土師器蓋は30号遺構との切り合い部分から出土しており、そちらに帰属する個体の可能性が高い。周溝南東側、28号遺構付近の覆土下層からの出土遺物は、26・27の底部穿孔土器（焼成後穿孔）、28～31ミニチュア土器である。覆土上層から32の木葉痕のある底部破片と、33の二重口縁壺の口縁部破片は、28号遺構に帰属する可能性が高い。36の耳環は、旧墳丘部南西側の、周溝に面した攪乱坑内から出土した。一部剥離部位があるがほぼ完形である。外径18mm、挟み幅1.8mmを測る。緑青に覆われているが、一部金箔がみられることから、緑青下に金箔が遺存すると思われる。攪乱坑内では、他の遺物が皆無であることから、元位置から大きく動いている可能性が考えられる。また、この位置より南西の周溝から、15～22の須恵器、須恵器模倣杯が出土しており、遺構プランを確認していないが、この地点における周構内土壌の存在も想定し得る。古墳の遺物とは時期差が認められ、既報告の単独の土壌である16号遺構の存在も含めて、古墳との埋葬形態の差をどう捉えるか検討が必要である。



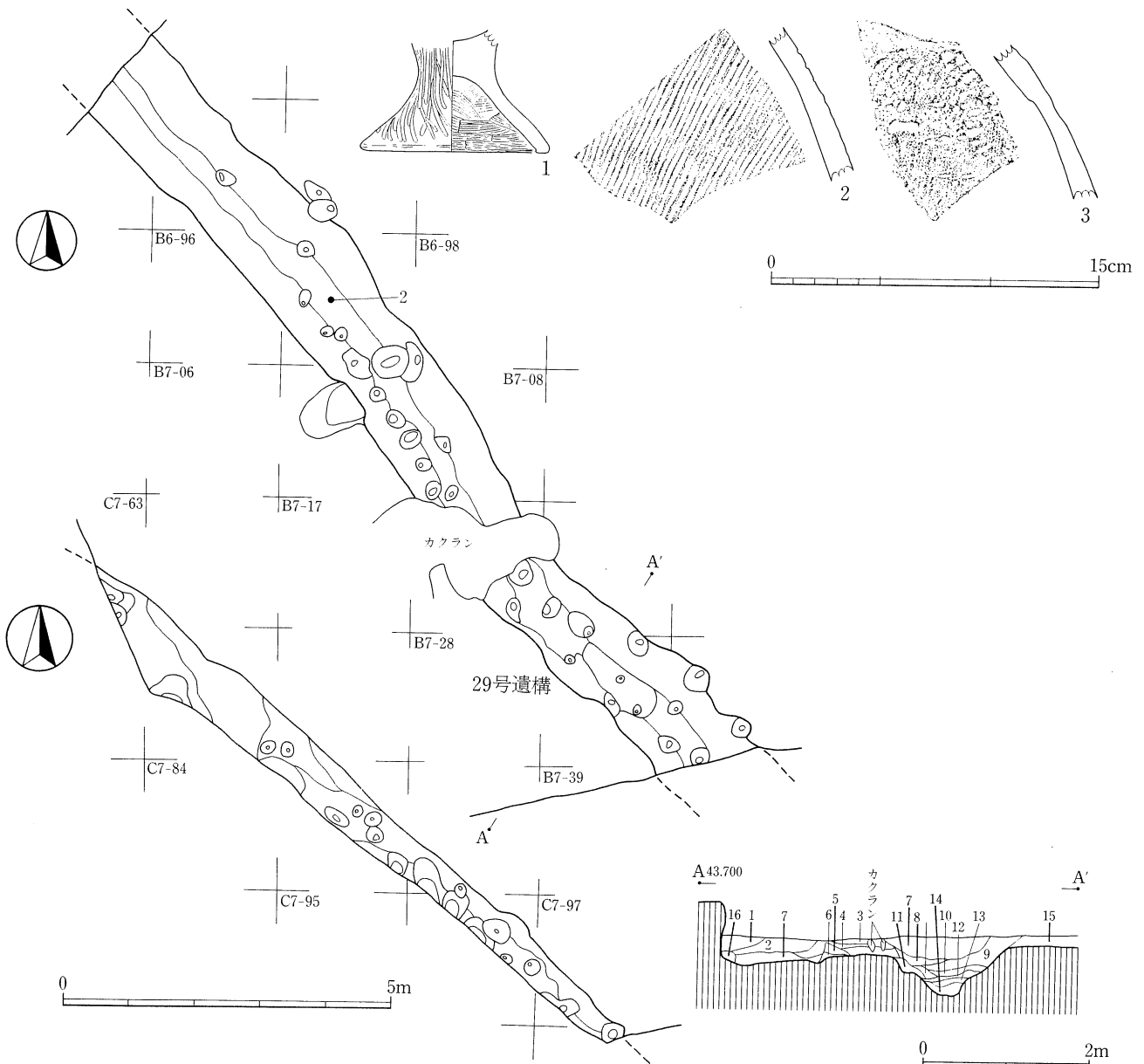
第17図 33号遺構実測図及び等高線図



第18図 33号遺構遺物実測図



第19図 33号遺構遺物実測図



第20図 34号遺構及び遺物実測図

3 溝状遺構

34号遺構（第20図）

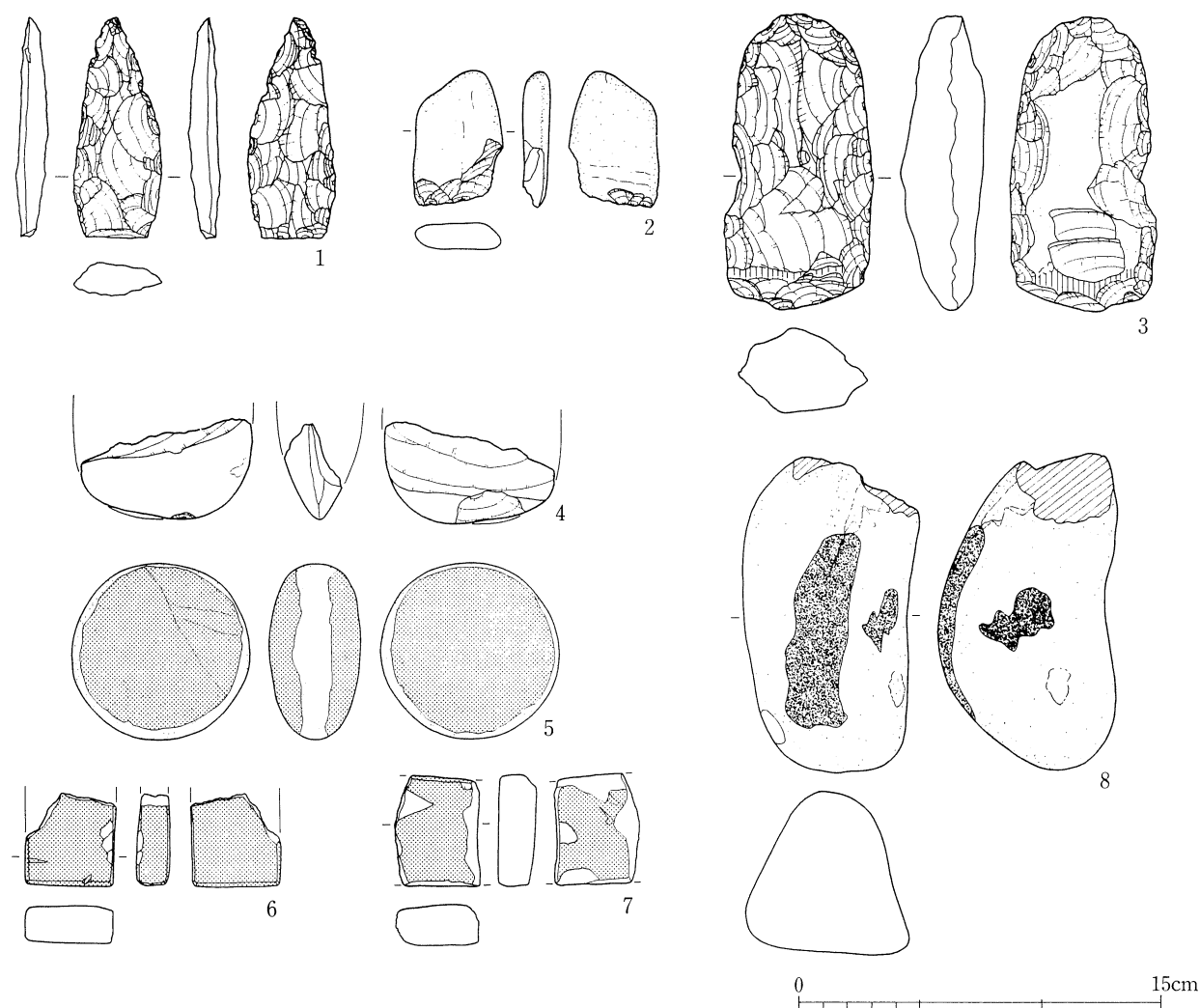
遺 構 B6 から C8 グリッドに位置する。調査区境界により、ふたつに分断されるが、位置関係から、一条の溝状遺構と判断した。南側については、片側のり面のみの検出である。33号遺構（古墳）との新旧関係は明確ではなく、28号遺構（竪穴住居跡）より新しい。全長は、北側が13.5m、南側が11mで、全長は34mになり、調査区外、南北方向に延びるものと思われる。東側上端による溝方向は、N-44°-W となる。幅は、確認面において1.64m、深さは約70cmを測る。

断面形状はV字型を呈するが、その開きは一定しない。明確な硬化部位は認められないが、遺構がほぼ埋没してから、浅く掘り込んでいるか、踏み締められたかしている。

遺 物 2の須恵器片が底直上からの出土である以外は覆土下層からの出土。図示していないが、常滑の甕片も覆土上層から出土している。

4 その他の遺物

ここでは遺構内外から出土した石器を一括して掲載する。



第21図 石器実測図

石 器（第21図）

1 はホルンフェルス製の尖頭器で基部を欠損する。33号遺構周溝内から出土している。残存長13.5 cm×5.4 cm×厚さ1.8 cm、17.5 g をはかる。2 は頁岩製の礫斧で完形。確認調査時に遺構外より出土である。8.1 cm×5.5 cm×1.7 cm、33.6 g。3 は輝緑岩製の打製石斧でほぼ完形。遺構外縄文早期の包含層からの出土である。18.1 cm×9.0 cm×5.1 cm、314.5 g。4 は変質安山岩製の磨製石斧と思われる。刃部のみ遺存。33号遺構旧墳丘下からの出土である。6.2 cm×10.3 cm×2.9 cm、56.7 g。5 は石英斑岩製の磨石で、31号遺構覆土上層からの出土である。直径11 cm×5.6 cm、287.3 g。6・7 は砂岩製の砥石である。6 は34号遺構覆土中からの出土である。端部の遺存。5.6 cm×5.5 cm×2.0 cm、30.6 g。7 は遺構外の出土である。両端部欠損。6.8 cm×5.1 cm×2.3 cm、39.3 g。8 は輝緑岩と思われるが、用途は不明。端部欠損。29号遺構（竪穴住居）の床面直上からの出土で、接地面以外は被熱により暗赤褐色を呈し、摩耗部位が認められる。31.5 cm×16.8 cm×15.7 cm、2,800 g。図中のスクリーントーン部は、敲打痕である。（8のみ1/5掲載）

第3節 小 結

畑木小谷遺跡で検出された遺構は、平成10年度報告分を含め、縄文時代早期（田戸上層）の包含層及び炉穴13基、時期不明陥し穴1基、弥生時代後期～古墳時代前期初頭住居跡16軒、古墳時代前期5軒、古墳時代中期竪穴住居5軒、古墳時代後期円墳4基、内、推定1基、古墳時代中期祭祀関連遺構1地点、土壇1基、時期不明溝状遺構1条である。以下時期を追って、概略を述べて小結としたい。

なお、今回検出された住居の内、最も新しい段階、古墳時代中期後葉について、若干の気づいた点を記述したい。

縄文時代 早期に限られる。撚糸文式、三戸式、田戸下層式、田戸上層式、野島式の土器が認められる。遺物は包含層、炉穴からの出土である。

弥生時代後期～古墳時代初頭 当該期の遺構は、竪穴住居跡16軒であるが、弥生時代後期後葉から、古墳時代前期に位置づけることが可能と思われ、住居の規模、主軸方向等も併せる事で、小期に区分可能と思われる。

古墳時代中期 当該期の遺構は、竪穴住居跡5軒、祭祀関連遺構1地点である。

畑木小谷遺跡においては、いわゆる鬼高期に含まれる住居跡は認められない。遺構の切り合い関係から、最終段階のものは、いわゆる和泉期の範疇に含まれる。谷を挟んで西側の台地上に位置する姉崎六孫王原遺跡において、少数ながら古墳時代中期の住居跡が検出されており、これ以降の住居跡は確認されていない。これをふまえて集落としての最終的な段階を、出土土器により見てみる。

当該期の遺構は、29号、30号、31号、32号、平成10年度報告分の12号、祭祀関連遺構とした13号である。

29号遺構は高杯、杯、埴が認められる。高杯は小型で、杯部下位には稜が認められない。杯は平底のものが主体であるが、丸底で「く」の字に開く個体も認められる。埴は直線的に外傾する。胴部は横方向のヘラケズリが見られ、平底である。いずれの器種にも赤彩は見られない。

30号遺構は高杯、杯、埴、ミニチュア、蓋つまみが認められる。高杯は大小あり、杯部下位の稜は僅かに認められる。杯は丸底で、口縁部が「く」の字に開くもの、碗形のものがある。いずれも赤彩

が施されている。

31号遺構は高杯、埴、甕が認められる。高杯は、大型のもので、杯部は下位に弱い稜を持つもの、丸みを持つものがある。脚部はやや短脚化が看取できる。僅かに内側に湾曲しながら開く器形も認められる。埴は胴部に最大径を持ち、横方向のヘラケズリが施される。口縁部は直線的に開く。

32号遺構は高杯、蓋つまみが認められる。高杯は、覆土中の出土で、確実に本遺構に伴うとは言いが、坏部下位に三角突起を持つものであり、和泉式期中葉から認められる形態と見られる。

12号遺構は高杯、杯、壺、甕、ミニチュア、蓋形土器、刀子が認められる。高杯は杯部下位に稜が認められる。脚部は緩やかに開く。杯は口縁部が「く」の字に開き、平底である。壺は口縁部が折り返し口縁で、ハケメ調整が施された個体も含まれる。甕は頸部外面は緩やかに開き、内面では、弱い稜を持つ。ハケメ調整は認められない。赤彩は認められない。

13号遺構は高杯、杯、甕が認められる。高杯は杯部下位に僅かに稜を持つ。脚部は若干中膨れを持つ。杯は口唇部内面に面取りがなされ、僅かに外反し、丸底を呈するものが主体である。甕は頸部の屈曲は認められず、胴部外面は斜方向のヘラナデが施されている。

対象となる古墳時代中期の土器様相については、明瞭に形態変化が見られる高杯を基準として見る事ができる。高杯脚部の形態において、柱状化→中膨化→開脚化→外反化→小型化とした傾向が指摘されている。(小沢 洋 1999) これに加え、鬼高期の高杯とされる形態に見られるように、短脚化が進むと見られている。

畑木小谷の和泉期の遺構から出土した土器群は、高杯脚部では、明瞭な中膨れを有するもの、また、短脚化したものが認められない。杯では、いわゆる碗形杯といわれる平底のものが伴う段階から、赤彩が施され、口縁部が「く」の字に開く丸底の杯が共伴する段階までのものが認められる。杯は、和泉期中葉の碗形杯の出現から、丸底杯が加わる段階で器種として確立し、次第に組成でその割合を増やしてゆく。これに伴うかのように高杯の割合は減少する(小沢 洋 1999)。この傾向は遺構数の少ない本遺跡でも垣間見ることが出来る。これ等をふまえると、須恵器杯蓋模倣杯の存在をもって鬼高期との画期とするならば、本遺跡の中期の遺構は、大枠で、和泉期中葉以降、鬼高期に至らない段階のものであると考えられる。この中に、どの程度の時間差が内包されているかは検討する術を持たない。

また、この段階で畑木小谷遺跡では、32号遺構とした、堅穴住居では、南西壁にカマドが設置された事例が認められる。時期の問題は出土遺物が少量であるため明確にし得ないが、33号遺構(円墳)との関係や、カマド、貯蔵穴、梯子穴が、住居の一隅による構造がカマド導入初期の形態を示す(大村 直 1991)という条件に概ね合致すること、他に、出土遺物の中に、和泉期中葉に散見される土師器の蓋が出土していることなどから、32号遺構は当地域のカマド導入初期の堅穴住居と捉え得る。姉崎地域の事例としては、椎津茶ノ木遺跡130号遺構が挙げられる(木對和紀 1992)。ここでも畑木小谷同様、南西側の壁にカマドが作られているが、出土遺物には短脚化した高杯が伴う。

古墳時代後期 当該期の遺構は、円墳4基、土壇1基が認められる。

33号遺構周溝底から検出された土師器杯の一群中には、1・2の須恵器杯蓋模倣杯が検出されている。2個体とも内外面に赤彩が施されており、2は口縁部下位に極弱い稜を作りだしている。一括性の高い土器群の中に杯身模倣杯が認められないことから、鬼高期初段階、陶邑編年のTK47型式併行

期の様相と見ることができようか。既報告の中では3基の古墳（14号・15号・18号）、1基の土壙（16号）が認められるが、中でも15号遺構とした古墳の周溝内土壙からは、馬歯が出土し、殉葬を想定できる事例として、また、16号遺構とした単独の土壙からは、銅釧2、金銅製耳環5、琥珀製棗玉7、石製小玉1、滑石製白玉14、黄色、黄緑色を含むガラス小玉210が出土しており、特筆される。

畑木小谷遺跡内の本区域では、以上のことから、古墳時代中期後葉とみられる、32号段階の住居跡が最後に営まれ、これ等の廃絶後、弱干の隔たりをもって、古墳時代後期初頭には墓域としての性格を持つに至ると考えられる。周辺遺跡をみると、低地の姉崎上野合遺跡では、いわゆる和泉期の竪穴住居跡が検出され、台地上となると、姉崎六孫王原遺跡では、和泉期において集落が終焉を迎えると捉えられ、姉崎東原遺跡では古墳時代の遺構の中に、和泉期に含まれる遺構は検出されていない。同様に、椎津川（境川）を隔てた五霊台遺跡では、いわゆる五領期から鬼高期に至る遺構が検出されたが、和泉期の竪穴式住居跡は見られず、断続的な集落の在り方を示す。こうした中、拠点集落と考えられる椎津茶ノ木遺跡では、和泉期終末段階を経て、いわゆる鬼高期以降に遺構数の増加が見られる等、複雑な様相を呈する。以前から指摘されている問題だが、やはり、低地の調査及び、同地域の調査成果の累積が待たれる。

墓域として機能した以後、本遺跡での明確な土地利用は認められない。舌状台地の先端において、尾根部に連続して平坦面が確認でき、隣接する畑木砦跡との関係から、中世城郭跡の可能性もあるが、現時点では不明である。明確なのは近世以降のものと思われる道路跡が見られる事と、これに沿って塚が残るのみである。

以上の所見は 集落を完掘しているのではないため、一部に見られる傾向として捉えるに留まることは言うまでもない。煩雑、かつ舌足らずな記述ではあるが、まとめにかえさせていただきたい。

《参考文献》（五十音順）

- 大村 直 「小田部向原遺跡」『市原市文化財センター調査報告書 第40集 市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』不特定遺跡発掘調査報告（2） 市原市教育委員会 1991
- 小沢 洋 『小浜遺跡群Ⅱ マミヤク遺跡』財団法人 君津郡市文化財センター（第44集） 1989
- 小沢 洋 「房総の古墳中期土器とその周辺」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 1999
- 北見一弘 『平成10年度 市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会 1999. 3
- 木對和紀 『市原市椎津茶ノ木遺跡』財団法人 市原市文化財センター調査報告書49集 財団法人 市原市文化財センター 1992
- 木對和紀 「姉崎上野合遺跡」『平成元年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会 1990
- 桜井敦史 『市原市姉崎東原遺跡 C 地点』財団法人 市原市文化財センター調査報告書54集 財団法人 市原市文化財センター 1994
- 高橋康男 『市原市姉崎東原遺跡』市原市文化財センター調査報告書37集 財団法人 市原市文化財センター 1990
- 高橋康男 『市原市姉崎東原遺跡 B 地点』市原市文化財センター調査報告書51集 財団法人 市原市文化財センター 1993
- 高橋康男 『市原市五霊台遺跡』市原市文化財センター調査報告書64集 財団法人 市原市文化財センター 1998
- 半田堅三 『市原市姉崎六孫王原遺跡』市原市文化財センター調査報告書58集 財団法人 市原市文化財センター 1997

表1 畑木小谷遺跡土器観察表

掲載遺構 番 号	掲載 番号	出 土 位 置	種 別	器 種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	遺 存 度	焼 成	色 調	胎 土	口径	器高	底 径・ (最大径)
19号遺構	1	覆土中	弥生土器	鉢	横方向・縦方向ヘラミ ガキ	斜め方向ヘラミガ キ	口縁部1/4以 下	並	2.5YR6明褐色	赤褐色小粒少量 含む	—	5.0	—
19号遺構	2	床面	弥生土器	壺?	斜方向ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	底部遺存	良	7.5YR6/6橙 色	黄褐色極小粒多 赤褐色小粒やや 多く含む	—	2.2	9.4
19号遺構	3	覆土中	弥生土器	壺?	斜方向荒いヘラミガキ	斜方向ヘラミガキ	底部遺存	良	10R4/4赤褐 色	暗黄褐色中粒や や多く 赤褐色 極小粒多く含む	—	3.0	6.0
19号遺構	4	P6内	弥生土器	甕?	斜方向ヘラケズリ	斜方向ヘラナデ	底部遺存	良	7.5YR6/4に ぶい橙色	赤褐色小粒多く 含む	—	2.0	6.1
19号遺構	5	床面	弥生土器	甕	口唇部指頭による押捺 胴部上位に縄文原体の 押捺による刻み目 胴 部斜方向ヘラナデ	斜め方向ヘラナデ?	3/4遺存	並	7.5YR6/6橙 色	橙色小粒多量に 含む	24.0	20.0	(24.7)
19号遺構	6	床面	弥生土器	甕	口唇部指頭による押捺 胴部上位に縄文原体の 押捺による刻み目 胴 部斜方向ヘラナデ	斜め方向ヘラナデ	1/2遺存	良	7.5YR6/6橙 色	赤褐色小粒少量 含む	(24.2)	13.0	—
20号遺構	1	床面	弥生土器	鉢	口縁部羽状縄文、体部 ヘラミガキ	横・斜方向ヘラミ ガキ	1/2遺存	良	10YR6/6明 黄褐色	灰色・白色・半 透明小粒少量。	14.6	11.4	7.4
20号遺構	2	床面	弥生土器	壺?	縦・斜方向ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	底部遺存	良	10YR6/4に ぶい黄褐色	黒色・灰色・白 色中粒少量。			
21号遺構	6	床面	弥生土器		縦方向ヘラミガキ	横方向ナデ	底部遺存	良					
24号遺構	1		弥生土器	甕	輪積痕端部に棒状工具 による刺突	横方向ヘラナデ。	口縁部1/4遺 存	並	5YR7/4にぶ い橙色	白色半透明・明 褐色・灰色中粒 少量。			
25号遺構	1	覆土中	弥生土器	甕	胴部横・斜方向ヘラナ デ 胴部上位輪積痕端 部に棒状工具による押 捺	上位横方向ヘラミ ガキ 下位斜方向 ヘラナデ	胴部1/2遺存	良	7.5YR6/6橙 色	橙色小粒・黄橙 色極小粒多く含 む	—	13.6	(23.8)
25号遺構	2	覆土中		埴?	斜方向ナデ	斜方向ナデ?	口縁部1/4遺 存	良	7.5YR6/6橙 色	灰色・黄褐色極 小粒少量。	17.6	3.4	—
25号遺構	3	床面	弥生土器	壺	胴部下位縦・斜方向ヘ ラナデ	斜方向ヘラナデか。	胴部下位1/4 遺存	良	5YR7/6褐色	黄褐色極小粒少 量。	—	5.1	—
25号遺構	4	覆土中	土師器	杯	横・斜方向ヨコナデ	赤彩か	1/3遺存	良	内2.5YR 明 赤褐色	黄褐色極小粒少 量。	—	5.2	(12.6)
26号遺構	1	覆土中	土師器	壺	口縁部ヨコナデ 頸部 縦方向ヘラミガキ 胴 部斜方向ヘラミガキ	斜方向ヘラミガキ	胴部欠損	良	10YR6/6明 黄褐色	灰色・白色半透 明極小粒少量。	11.6	8.1	—
26号遺構	2	覆土中	土師器	碗	斜方向ヘラミガキ	横方向ナデか	口縁部欠損	良	10YR6/6明 黄褐色	赤褐色小粒少量 含む	—	6.1	5.8
26号遺構	3	覆土中	土師器	碗	横方向ヘラミガキ	斜方向ヘラナデ	底部遺存	良	10YR6/6明 黄褐色	乳白色・半透明 小粒少量。	—	2.8	10.6
26号遺構	4	覆土中	土師器	台付甕	斜方向ハケメ	ナデ	底部遺存	良	2.5Y7/4浅黄 色	半透明小粒多量。			
26号遺構	5	覆土中	土師器	甕	縦・斜方向ヘラミガキ	斜方向ヘラナデ	底部遺存	良	10YR6/6明 黄褐色	乳白色・黒色・ 半透明小粒少量。	—	8.6	15.4
26号遺構	6	P6	土師器	台付甕	縦方向ヘラミガキ(下 位横方向ヘラナデ後)	横方向ヘラナデ	台部遺存	良	5YR7/6褐色	黄褐色・黒色極 小粒少量。	—	7.4	10.6
27号遺構	1	覆土中	土師器	碗	口縁部縦方向ハケメ 体部中位ヨコナデか 体部斜方向ハケメ	斜方向ハケメ	1/4以下遺存	良	5YR5/6明赤 褐色	白色半透明・灰 色極小粒少量。	(14.0)	5.8	—
27号遺構	2	炉内	土師器	台付甕	斜方向ヘラナデ	横方向ナデか	台部のみ遺存	良	2.5YR6/2橙 色	乳白色極小粒少 量。	—	4.8	9.6
29号遺構	1	床面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 横方向ナデ	斜方向ヘラナデ。	2/3遺存	良	5YR5/6明赤 褐色	乳白色極小粒多 量。	12.0	5.1	—
29号遺構	2	床面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 下位ヘラケズリ	横方向ナデ	完形	良	5YR5/3にぶ い赤褐色	黄褐色極小粒少 量。	13.2	4.5	—
29号遺跡	3	床面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラナデ	横方向ナデか	1/2遺存	良	2.5YR6/2橙 色	白色半透明・灰 色小粒少量。	13.0	5.3	—
29号遺構	4	床面	土師器	碗	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラナデ	横方向ナデ	2/3遺存	良	5YR7/6褐色	黄褐色極小粒少 量。	12.4	5.7	—
29号遺構	5	床面	土師器	碗	口縁部ヨコナデ 体部 横・斜方向ヘラミガキ	横方向ヘラナデか	完形	良	7.5YR7/6橙 色	黄褐色・乳白色 極小粒多量。	14.3	6.2	6.3
29号遺構	6	床面	土師器	埴	斜方向ナデか	ヘラナデか	口縁部遺存	良	7.5YR6/4に ぶい橙色	赤褐色中粒微量。	7.9	—	—
29号遺構	7	床面	土師器	埴	横方向ナデか	ヘラナデか	口縁部遺存	良	7.5YR7/6橙 色	黒色・灰色中粒、 白色半透明小粒 多量。	9.1	—	—
29号遺構	8	床面	土師器	埴	横方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデか	1/2遺存	良	10YR6/6明 黄褐色	黒色・灰色・半 透明小粒少量。	—	—	6.0
29号遺構	9	床面	土師器	高杯	脚部縦方向ヘラナデ	脚部縦方向ヘラナ デ	1/2遺存	良	7.5YR7/6橙 色	黄褐色・乳白色 極小粒多量。	—	—	—

掲載遺構 番号	掲載 番号	出土 位置	種 別	器 種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	遺 存 度	焼 成	色 調	胎 土	口径	器高	底 径・ (最大径)
29号遺構	10	床面	土師器	高杯	脚部縦方向ヘラナデ	脚部縦方向ヘラナデ	1/3遺存	良	7.5R4/8赤	黒色・白色極小粒少量。	—	—	—
29号遺構	11	床面	土師器	高杯	脚部縦方向ヘラナデか	縦・横方向ヘラナデ	1/4遺存	良	10R6/8赤褐色	灰色・乳白色半透明小粒少量。	—	—	—
29号遺構	12	床面	土師器	高杯	斜方向ヘラミガキか	横方向ナデか	杯部1/3遺存	良	7.5R4/6赤	白色・黒色小粒少量。	—	—	—
30号遺構	1	床面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部斜方向ヘラナデ	横方向ナデか	3/4遺存	良	10R5/6赤	黒色・白色小粒・中粒少量。	12.4	6.7	—
30号遺構	2	床面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部斜方向ヘラナデ	横方向ナデか	完形	良	10R4/8赤	灰色・黄褐色小粒少量。	13.4	5.9	—
30号遺構	3	床面	土師器	壺	縦方向ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 胸部ヘラケズリ 斜方向ヘラナデ 底部不定方向ヘラケズリ	3/4遺存	不良	7.5YR6/4に ぶい橙色	黄褐色・白色極小粒少量。	10.8	12.9	—
30号遺構	4	床面	土師器	高杯	斜方向ヘラナデか	横方向ヘラナデか	裾部1/3欠損	良	2.5YR5/6明 赤褐色	白色半透明小粒微量。	16.6	14.0	—
30号遺構	5	床面	土師器	高杯	杯部斜方向ヘラナデ 体部から脚部縦方向ヘラナデ	脚部横方向ヘラナデ	ほぼ完形	良	2.5YR5/6明 赤褐色	黒色半透明小粒少量。	12.2	10.0	—
30号遺構	6	覆土中	土師器	高杯	体部下位縦方向ヘラナデ	横方向ヘラナデか	脚部1/2遺存	良	10R5/6赤	黒色・灰色・半透明小粒少量。	—	—	—
30号遺構	7	P7	土師器	ミニチュ ア	胴部下位斜方向ヘラナデ	胴部下位斜方向ヘラナデ	1/2遺存	良	7.5YR6/4に ぶい橙色	白色半透明小粒少量。	—	2.3	2.9
30号遺構	8	炉直上	土師器	つまみ	指頭によるナデ	——	蓋欠損	良	7.5YR6/4に ぶい橙色	赤褐色中粒微量。	—	—	—
31号遺構	1	覆土中	土師器	埴	口縁部ヨコナデ。胸部横方向ヘラケズリ。	横方向ヘラナデ。	底部欠損	良	7.5YR7/6褐色	黒色・灰色中粒、白色半透明小粒多量。	10.0	—	(13.9)
31号遺構	2	床面	土師器	甕	口縁部ナデ 胸部斜方向ハケメ	横・斜方向ハケメ	口縁部1/3遺存	良	7.5YR7/6褐色	黒色・灰色・白色中粒少量。	20.6	—	—
31号遺構	3	覆土中	土師器	碗?	口縁部ヨコナデ 体部斜方向ヘラケズリ	横方向ナデか	口縁部1/3遺存	良	5YR7/4に ぶい橙色	灰色・白色小粒少量。黒色・黄褐色極小粒。	8.4	—	—
31号遺構	4	覆土中	土師器	甕	斜方向ヘラナデか	横方向ヘラナデか	胴上部1/3遺存	良	7.5YR4/1褐 灰色	赤褐色小粒多く含む	—	—	(14.4)
31号遺構	5	覆土中	土師器	埴	斜方向ヘラナデか	横方向ヘラナデか	口縁部1/3遺存	良	5YR7/6褐色	白色半透明中粒多く含む	13.0	—	—
31号遺構	6	覆土中	土師器	埴	胸部ヘラナデか 胸部下位斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	口縁部欠損	良	7.5YR6/4に ぶい橙色	黒色・赤褐色・黄褐色小粒多く含む	—	—	4.7
31号遺構	7	床面	土師器	埴	胸部横方向・下位斜方向ヘラケズリ	ヘラナデか	口縁部欠損	良	2.5Y1/3黒褐 色	黄褐色極小粒多く含む	—	—	3.5
31号遺構	8	P7	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ 杯部横方向ヘラケズリか	横方向ヘラナデ	脚部欠損	良	5YR7/6褐色	黄褐色極小粒多く含む	16.2	—	5.6
31号遺構	9	床面	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ 杯部斜方向ヘラミガキ	横方向ナデか	脚部欠損	良	5YR7/6褐色	黄褐色小粒微量含む。	16.4	—	6.6
31号遺構	10	覆土中	土師器	高杯	横方向ナデか	横方向ナデか	脚部欠損	良	10YR7/4に ぶい橙色	黄褐色極小粒少量含む	14.6	—	4.5
31号遺構	11	覆土中	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ。横・斜方向ナデ	斜・横方向ヘラナデ	脚部欠損	良	10YR7/4に ぶい橙色	黄褐色極小粒多く含む	17.0	—	6.0
31号遺構	12	床面	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ 杯部指頭によるナデ	横方向ヘラナデ	脚部欠損	良	5YR7/6褐色	黄褐色極小粒多く含む	15.2	—	5.8
31号遺構	13	覆土中	土師器	高杯	横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	脚部欠損	良	5YR6/6褐色	半透明小粒・黄褐色極小粒多く含む	14.8	—	6.0
31号遺構	14	覆土中	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ。横・斜方向ナデ	横方向ヘラナデ	脚部欠損	良	10YR7/4に ぶい橙色	黄褐色極小粒多く含む	16.2	—	5.4
31号遺構	15	覆土中	土師器	高杯	横方向ナデ	横方向ヘラナデ	杯部欠損	良	10YR5/8赤	白色・赤褐色小粒多く含む	—	—	5.9
31号遺構	16	覆土中	土師器	高杯	縦方向ヘラナデ	横方向ヘラナデか	杯部・裾部欠損	良	10YR6/8赤 褐色	黒色極小粒多く含む	—	—	—
31号遺構	17	覆土中	土師器	高杯	縦方向ヘラナデ	横方向ヘラナデか	杯部・裾部欠損	良	2.5YR5/8明 赤褐色	黄褐色極小粒多く含む	—	—	—
31号遺構	18	覆土中	土師器	高杯	縦方向ヘラナデ	横方向ヘラナデか	杯部・裾部欠損	良	10R5/8赤	黄褐色極小粒多く含む	—	—	—
31号遺構	19	覆土中	土師器	高杯	横方向ヘラナデ	縦方向ヘラナデ	杯部・裾部欠損	良	2.5YR5/6明 赤褐色	白色半透明・黄褐色小粒多く含む	—	—	—
32号遺構	1	覆土中	土師器	碗?	口縁部ヨコナデ 体部横方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	口縁部1/3遺存	良	7.5R赤	黒色・褐色小粒少量含む	11.0	—	—
32号遺構	2	覆土中	土師器	つまみ	指頭による横方向ナデ	——	蓋欠損	良	10YR7/4に ぶい黄褐色	黒色・黄褐色極小粒多く含む	—	—	(2.8)
32号遺構	3	覆土中	土師器	高杯	斜方向ナデか	横方向ナデか	口縁部・脚部欠損	良	5YR6/6褐色	黒色・黄褐色極小粒少量含む	—	—	(15.2)

掲載遺構 番号	掲載 番号	出土 位置	種 別	器 種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	遺 存 度	焼 成	色 調	胎 土	口径	器高	底 径・ (最大径)
33号遺構	1	周溝底面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 横方向ヘラナデ	ヘラナデか	完形	良	10YR6/8 赤 橙色	黒色極小粒少量 含まれる	13.2	4.8	—
33号遺構	2	周溝底面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデか	完形	良	10YR6/8 赤 橙色	黄橙色極小粒少 量含まれる	13.3	4.5	—
33号遺構	3	周溝底面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	完形	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色・赤褐色 極小粒多く含ま れる	12.5	5.0	—
33号遺構	4	周溝覆 土下層	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	ほぼ完形	良	5YR橙色	黄橙色極小粒多 く含まれる	12.0	5.6	—
33号遺構	5	周溝覆 土下層	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	完形	良	7.5YR橙色	黄橙色小粒多く 含まれる	12.4	5.1	—
33号遺構	6	周溝底面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデか	完形	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色・赤褐色 極小粒多く含ま れる	12.2	4.9	—
33号遺構	7	周溝覆 土下層	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデか	完形	良	7.5YR橙色	黄橙色極小粒多 く含まれる	12.8	4.8	—
33号遺構	8	周溝底面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデか	完形	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色極小粒多 く含まれる	13.1	5.5	—
33号遺構	9	周溝底面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	完形	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色極小粒多 く含まれる	12.5	5.3	—
33号遺構	10	周溝底面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	ほぼ完形	良	2.5YR明褐色	黄橙色極小粒多 く含まれる			—
33号遺構	11	周溝覆 土下層	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	完形	良	7.5YR橙色	黄橙色極小粒多 く含まれる	13.4	5.2	—
33号遺構	12	周溝覆 土下層	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	1/4遺存	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色・赤褐色 極小粒多く含ま れる			—
33号遺構	13	周溝底面	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	1/4遺存	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色・赤褐色 極小粒多く含ま れる			—
33号遺構	14	周溝覆 土下層	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 ヘラミガキ 体部下位 ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	1/4遺存	良	2.5YR明褐色	黄橙色極小粒多 く含まれる	12.2	5.0	—
33号遺構	15	周溝覆 土上層	須恵器	杯蓋	ロクロ調整 口唇部に 刻みのある工具の押捺 による刻み	ロクロ調整	1/4遺存	良	2.5GY5/1 オ リーブ灰	白色極小粒微量 含む	14.0	3.1	—
33号遺構	16	周溝覆 土上層	須恵器	杯	ロクロ調整 体部反時 計回り回転ヘラケズリ	ロクロ調整	1/2遺存	良	2.5GY5/1 オ リーブ灰	黒・灰色小粒少 量含まれる	12.4	3.9	—
33号遺構	17	周溝覆 土上層	須恵器	杯	ロクロ調整 体部反時 計回り回転ヘラケズリ	ロクロ調整	口縁部1/2遺 存	良	2.5GY5/1 オ リーブ灰	白色小粒少量含 まれる	12.2	5.6	—
33号遺構	18	周溝覆 土上層	須恵器	杯	ロクロ調整 体部反時 計回り回転ヘラケズリ	ロクロ調整	口縁部1/2遺 存	良	2.5GY5/1 オ リーブ灰	白色小粒少量含 まれる	12.2	3.2	—
33号遺構	19	周溝覆 土上層	須恵器	杯	ロクロ調整 体部反時 計回り回転ヘラケズリ	ロクロ調整	口縁部1/3遺 存	良	2.5GY5/1 オ リーブ灰	白色小粒少量含 まれる	13.8	3.5	—
33号遺構	20	周溝覆 土上層	須恵器	杯?	ロクロ調整 体部反時 計回り回転ヘラケズリ	ロクロ調整	1/4以下遺存	良	2.5GY5/1 オ リーブ灰	白色・灰色小粒	—	—	—
33号遺構	21	周溝覆 土上層	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部 斜方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	完形	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色極小粒多 く含む	13.5	3.5	—
33号遺構	22	周溝覆 土上層	須恵器	杯	ロクロ調整 体部反時 計回り回転ヘラケズリ	ロクロ調整 向心 円状あて具痕残る	1/4以下遺存	良	10GY5/1 オ リーブ灰	黒色・白色小粒 少量含む	—	—	—
33号遺構	23	周溝覆 土上層	土師器	高杯	斜方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	脚部欠損	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色極小粒多 く含む	18.2	—	—
33号遺構	24	周溝覆 土上層	土師器	高杯	斜方向ヘラナデか	横方向ヘラナデか	脚部欠損	良	7.5YR橙色	黄橙色極小粒多 く含む	17.1	—	—
33号遺構	25	周溝覆 土上層	土師器	高杯	横方向ヘラナデか	上位縦・下位横方 向ヘラナデ	杯部・裾部欠 損	良	7.5YR橙色	黄橙色極小粒多 く含む	—	—	—
33号遺構	26	周溝覆 土下層	土師器	甕	斜方向ヘラケズリ 底部 焼成後穿孔	斜方向ヘラナデか	底部遺存	良	2.5Y に ぶい 黄色	黄橙色・白色小 粒少量含む	—	8.0	—
33号遺構	27	周溝覆 土下層	土師器	甕	斜方向ヘラケズリ 底部 焼成後穿孔	斜方向ヘラナデか	底部遺存	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色・白色小 粒少量含む	—	6.8	—
33号遺構	28	周溝覆 土下層	土師器	ミニチュ ア	体部斜方向ヘラケズリ 口縁部指頭による押捺	口縁部斜方向ヘケ メ 底部斜方向ヘ ラナデ	完形	良	7.5YR明褐色	黄橙色極小粒少 量含む	6.8	3.5	3.4
33号遺構	29	周溝覆 土下層	土師器	ミニチュ ア	口縁部ヨコナデ 体部 ヘラナデ			良	10YR7/4 に ぶい橙色				
33号遺構	30	周溝覆 土下層	土師器	ミニチュ ア	斜方向ナデか 底部中 央直径3.5mmの焼成後 穿孔	横方向ナデ	口縁部欠損	良	10YR7/4 に ぶい橙色	黄橙色・黒色極 小粒多く含む	—	2.1	2.0
33号遺構	31	周溝覆 土下層	土師器	ミニチュ ア	指頭によるナデ	斜方向ヘラナデか	1/4遺存	良	10YR7/4 に ぶい橙色	白色極小粒含む			
33号遺構	34	周溝覆 土下層	土師器	甕		斜方向ヘラナデか		良	7.5R赤				
34号遺構	1	覆土上 層	土師器	高杯		斜方向ヘラナデか		良	10YR7/4 に ぶい橙色				

第3章 椎津茶ノ木遺跡（第2次）

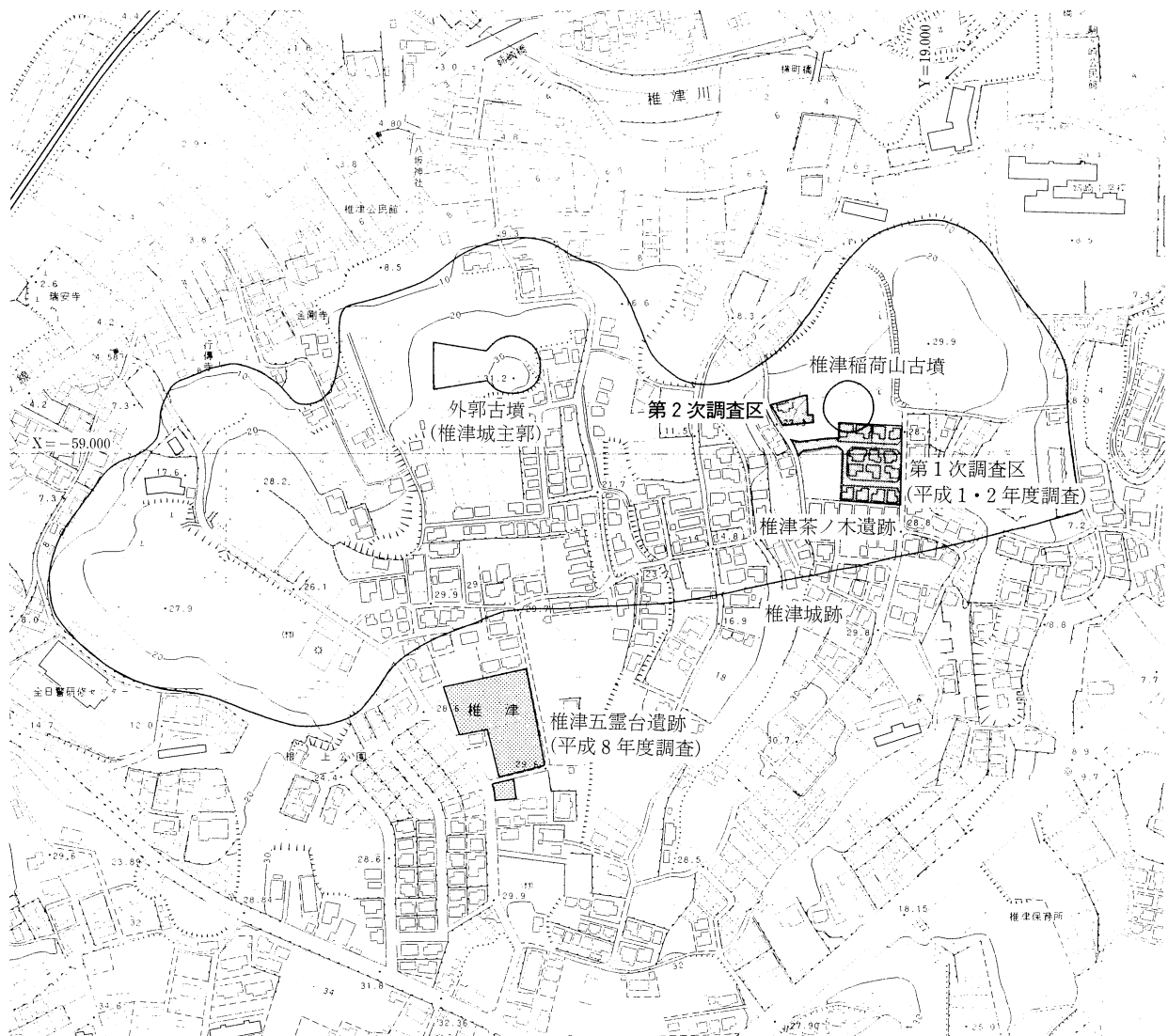
第1節 調査方法

椎津茶ノ木遺跡では、平成2年に宅地造成に伴う本調査が実施され、約2,600㎡の調査範囲から157軒の竪穴住居跡が検出されるなど、古墳時代を中心として非常に密度の高い遺構分布を示すことが明らかとなっている。

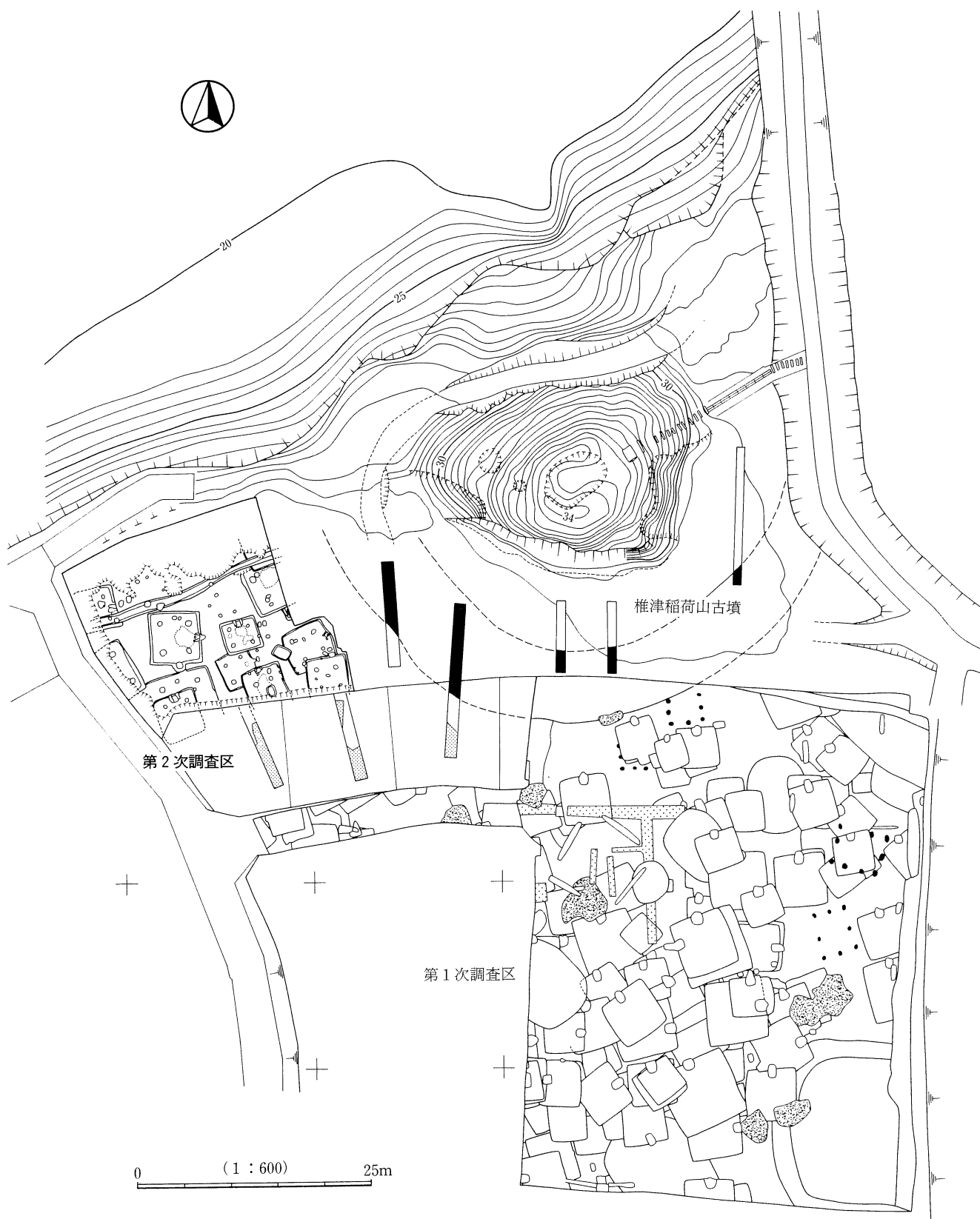
今回の調査区は、第1次調査区の北西に位置し、眼下に東京湾を臨む、台地先端部にあたる。調査は宅地造成に伴い、不特定遺跡事業として、470㎡について、平成10年に本調査を行った。

調査対象範囲には、20m×20m方眼の大グリッドを任意に設定し、さらにこれを2m×2m方眼に細分して小グリッドとした。大グリッドは北西端から南北方向にA・B・C…、東西方向に1・2・3…と番号を付し、小グリッドは北西端を00とし、東へ01～09、南へ10～90と番号を与えた。

本調査は、重機による表土除去を行い、遺構は確認した順序に番号を付けた。遺構図面は、方眼杭を基準に縮尺1/10・1/20ないし1/40で作成した。なお、整理作業段階でSK1を欠番としている。



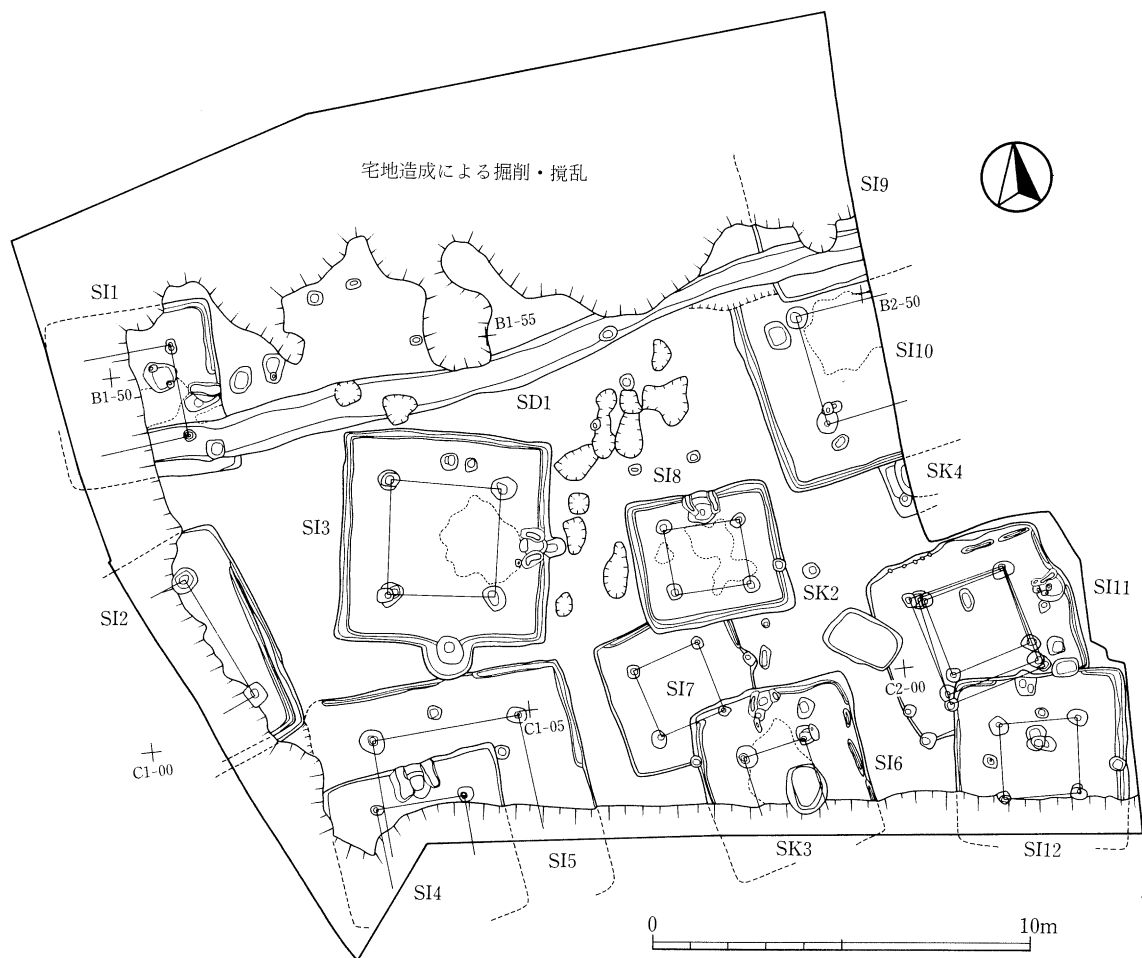
第22図 椎津茶ノ木遺跡周辺地形図（1：5,000）



第23図 椎津茶ノ木遺跡調査区位置図

第2節 遺構と遺物

調査の結果検出された遺構は、竪穴住居跡が古墳時代前～中期中葉 1 軒・中期後葉～後期 8 軒、奈良時代 2 軒、時期不明 1 軒の計 12 軒。土坑が奈良・平安時代 1 基、時期不明 2 基の計 3 基。その他、奈良・平安時代の溝跡 1 条と時期不明のピット 12 基である。

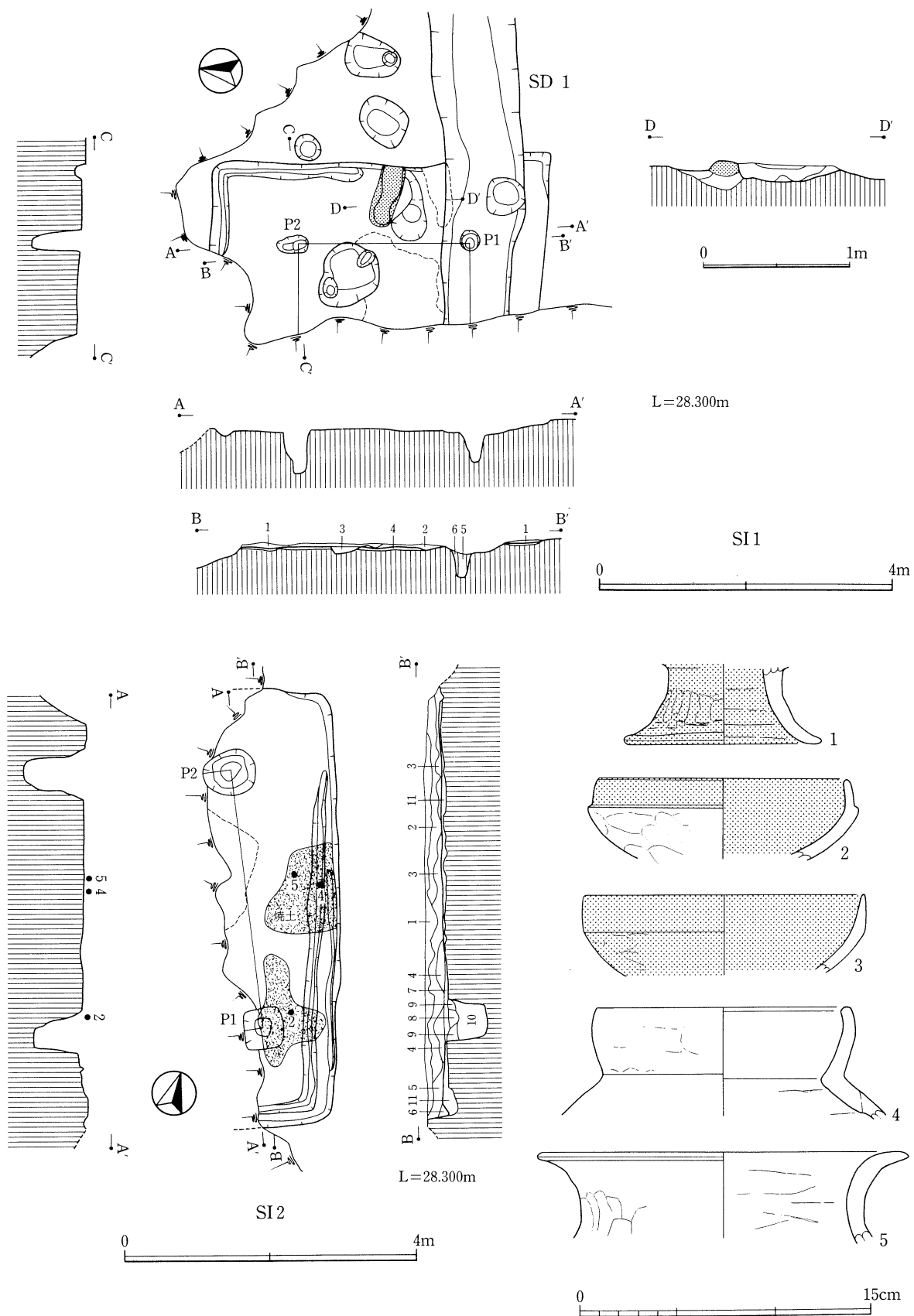


第24図 椎津茶ノ木遺跡（第2次）全体図

1 竪穴住居跡

SI 1（第25図）

遺 構 調査区の北西隅、B 1 - 40・50グリッドを中心に位置する。SD 1 に切られ、遺構の西側は削平されるため、全体の 1/2 程度の調査となる。平面形態は方形を呈する。規模は一辺 4.56 m を測り、主軸方位は N - 83° - E。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、確認面からの深さは 3 cm ~ 10 cm である。床は貼り床である。平坦で、中央部付近の狭い範囲では硬く踏み締められる。中央付近には、84 cm × 80 cm・深さ 18 cm を測る不整円形の掘り込みが見られるが、性格は不明である。周溝はカマド左側から北壁にかけて検出された。P 1・P 2 は支柱穴で、深さは P 1 が SD 1 底面から 33 cm・P 2 は床面から 60 cm を測る。貯蔵穴は住居南東、カマド右側に位置する。不整円形を呈し、深さは SD 1 底面から 48 cm を測る。カマドは東壁やや南寄りに位置し、右袖は SD 1 に切られる。煙道上昇角 50° を測り、壁への掘り込みは見られない。



第25図 SI 1・2 遺構実測図と遺物実測図

遺 物 覆土中から土師器の細片がわずかに出土するのみで、図示しうる遺物はない。

土 層 1層暗褐色土でローム粒を多く含む、2層暗褐色土でやや粗いローム粒を多く含む、3層暗褐色土でロームブロックを多く含む、4層暗黄褐色土でローム土・ロームブロックを多く含む（貼り床）、5層暗褐色土で粗いローム粒を含む（ピット）、6層黄褐色土でローム土・ロームブロックを多量に含む（ピット）。

SI 2（第25図）

遺 構 調査区の西隅、B1-70・81・91グリッドを中心に位置する。遺構の西側は削平されるため、全体の1/4程度の調査である。平面形態は方形を呈する。規模は一辺5.96mを測り、主軸方位は不明であるが、北カマドとした場合はN-26°-Wとなる。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、確認面からの深さは24cm～33cmである。床は貼り床である。平坦で、中央部付近の狭い範囲では硬く踏み締められる。床面には焼土が分布しており、火災住居と思われる。周溝は東壁に一部検出された。また、貼り床下からも、東・南壁で周溝が検出され、建て替えがなされたものと考えられる。P1・P2は主柱穴で、深さはそれぞれ66cm・67cmを測る。貯蔵穴・カマドは調査区内では検出されない。

遺 物 1の高杯脚柱部はP1内、2の杯と4・5の甕は焼土中、3の杯は覆土中からの出土である。4の甕は、口縁部が内湾して立ち上がり、口唇部は面取りされる。在地には見られない形態である。

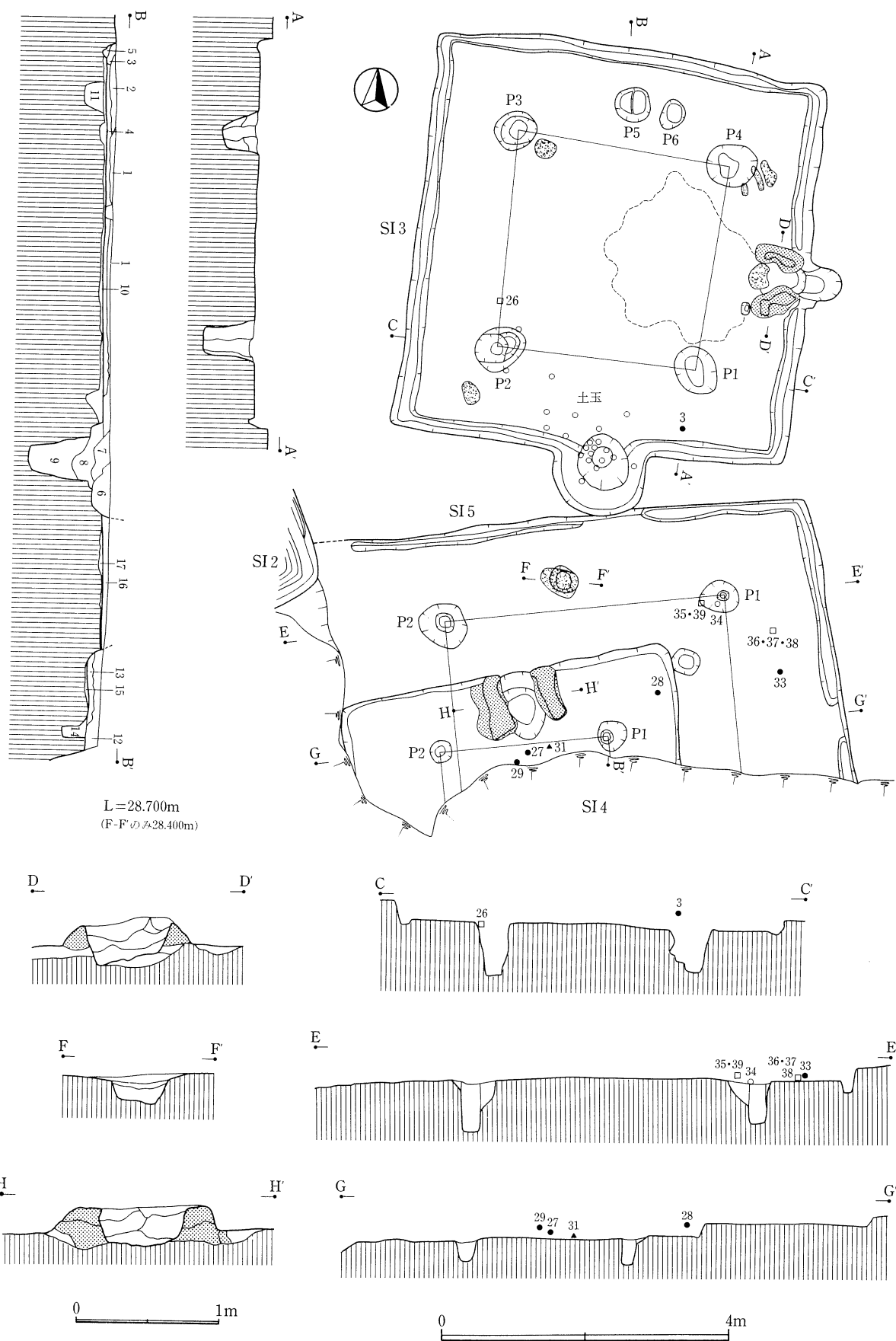
土 層 1層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む、2層暗褐色土でローム粒を多く含む、3層暗赤褐色土で焼土粒を多く含む、4層赤褐色土で焼土ブロックを主体とする、5層暗褐色土でローム粒を多く含む、6層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む、7層暗赤褐色土で焼土粒を多く含む、8層暗褐色土で焼土粒を含む（ピット）、9層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む（ピット）、10層暗褐色土でローム粒を含む（ピット）、11層暗黄褐色土でロームブロックを多く含む（貼り床）。

SI 3（第26・27図）

遺 構 調査区の西寄り、B1-63・64・73・74・83・84グリッドに位置する。SI5を切る。平面形態は方形を呈する。規模は5.5m×5.68mを測り、主軸方位は、カマドを中心とした場合はN-95°-Eとなる。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、確認面からの深さは6cm～26cmである。床は貼り床である。平坦で、カマド前面は硬く踏み締められる。また、わずかに焼土と炭化材の分布が認められた。周溝は全周する。P1～P4は主柱穴で、深さはそれぞれ75cm・62cm・60cm・52cmである。北壁中央寄りには、貼り床下から平行に並ぶ浅い柱穴P5・P6が検出された。南壁中央には、外側に張り出す大型の掘り込みが見られ、貯蔵穴と考えられる。楕円形を呈し、深さは1mを測る。カマドは東壁中央に位置し、煙道上昇角67°、壁への掘り込みは48cmを測る。

遺 物 貯蔵穴付近を中心に、22点の土玉が出土している。土玉には2種類の整形方法が見られ、ケズリにより粗く面取りを行うものと、ナデにより丸く平滑に仕上げるものに分けられるが、重量差には表れてこない。26の軽石は床面、1の蓋・2の杯・3の碗は覆土中からの出土である。

土 層 1層暗褐色土でロームブロックを含む、2層暗褐色土で粗いローム粒を多く含み、焼土粒も混じる、3層暗褐色土で焼土粒を多く含み、粗いローム粒も混じる、4層暗褐色土で粗いローム粒を多く含み、炭も混じる、5層暗褐色土で粗いロームブロックを多く含む、6層暗褐色土でロームブロックを多く含む、7層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む、8層暗褐色土でローム粒を多く含み、炭も混じる、9層暗褐色土で砂粒状のローム土を多く含む、10層暗黄褐色土で粗いロームブロックを多く

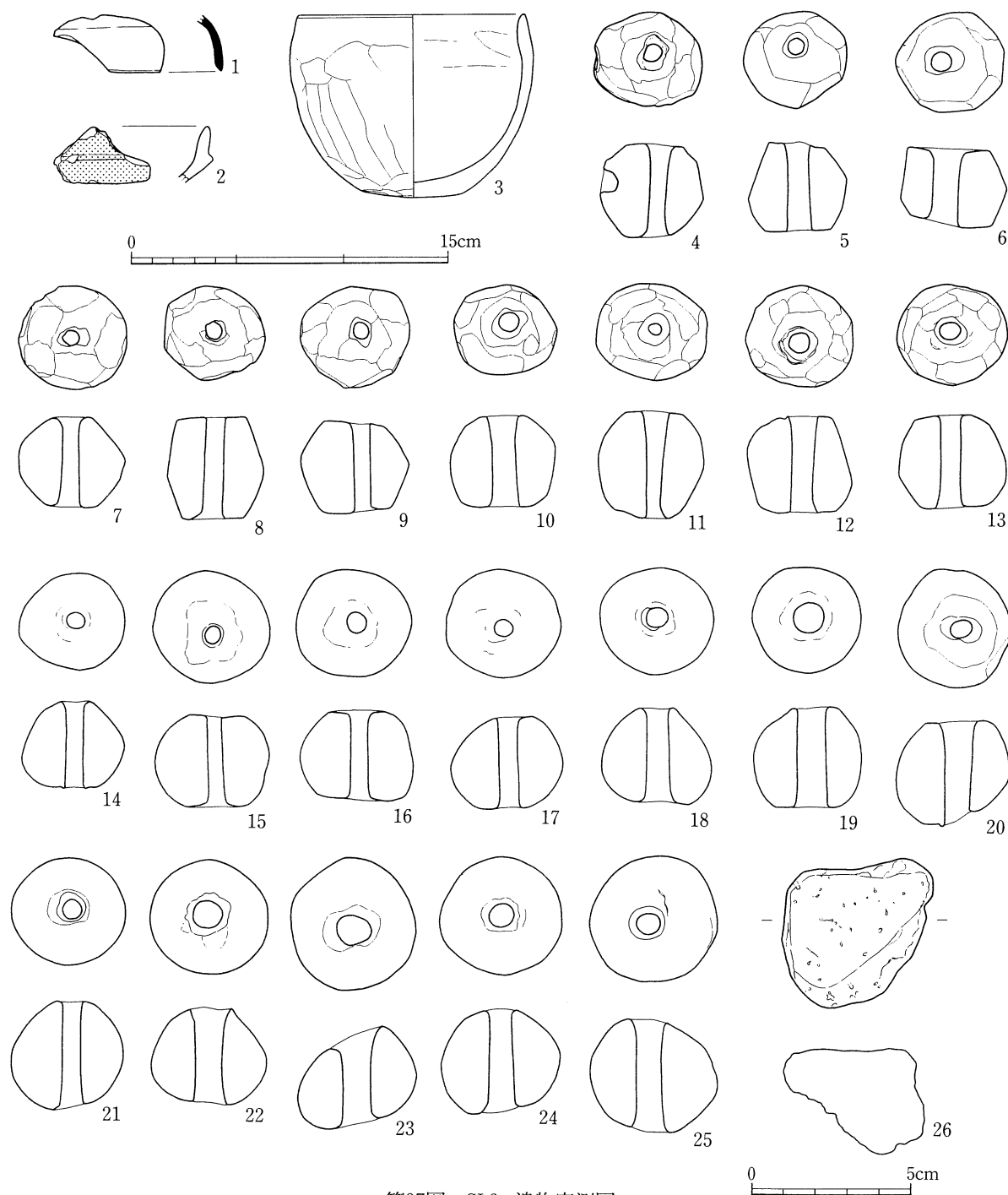


第26図 SI 3・4・5 遺構実測図

含む（貼り床）、11層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む（ピット）。

SI 4（第26・28図）

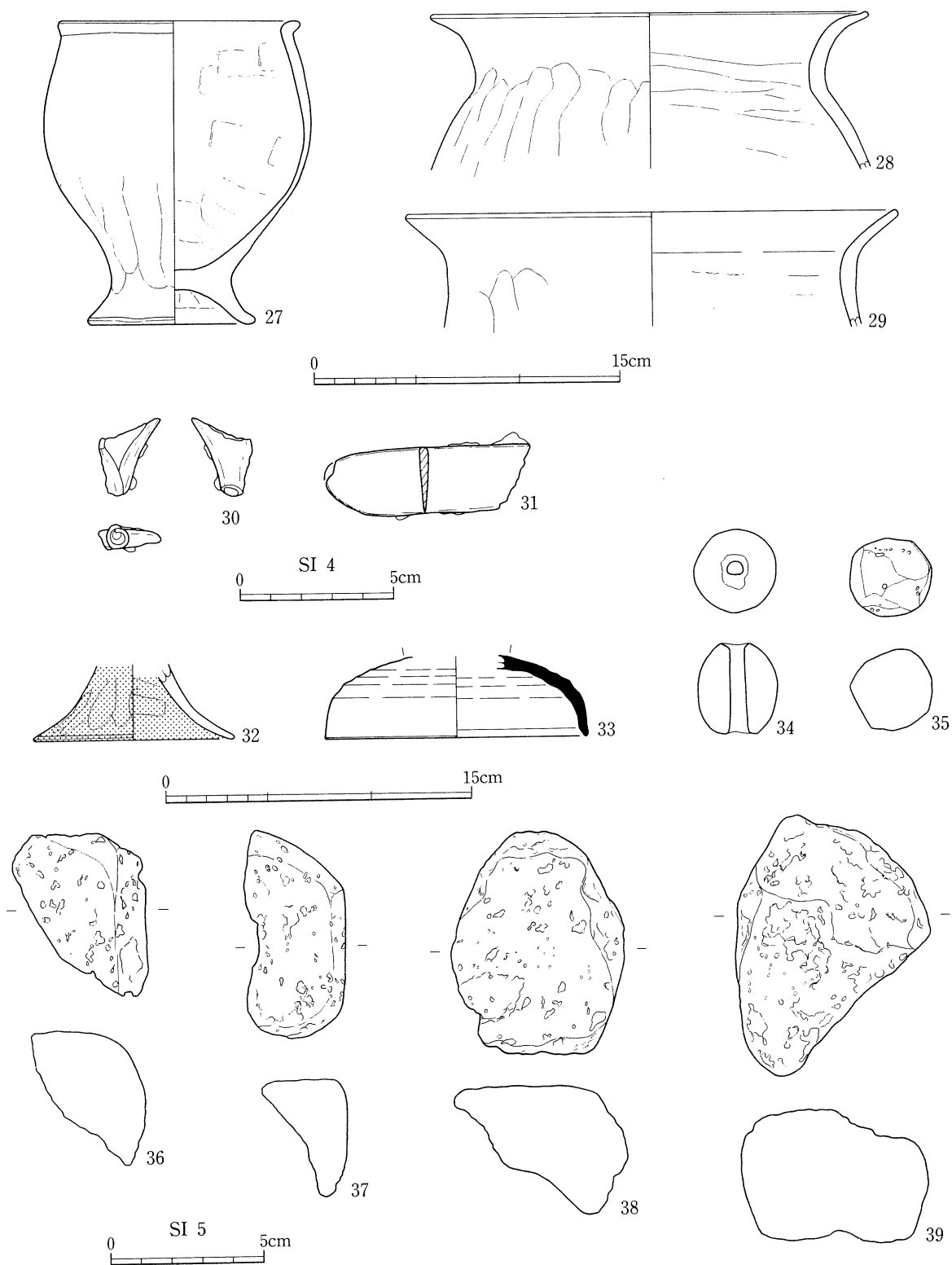
遺 構 調査区の南西隅、C1-02・03グリッドに位置する。SI 5を切る。遺構の南側は削平されるため、全体の1/3程度の調査である。平面形態は方形を呈する。規模は一辺4.68mを測り、主軸方位はN-14°-W。壁はやや開くようにして立ち上がり、確認面からの深さは11cm～19cmである。床は貼り床である。P1・P2は主柱穴で、深さはそれぞれ38cm・27cmを測る。カマドは北壁中央に位置する。煙道上昇角42°を測り、壁への掘り込みは見られない。周溝・貯蔵穴は調査区内では検出さ



第27図 SI 3 遺物実測図

れない。

遺物 27の台付甕は覆土下層、28・29の甕は覆土上層からの出土で、28は混入であろう。31の鉄鎌は、現存値で、長さ6.7cm・幅2.2cm・厚さ2.8mm・重量9.8gを測り、床面からの出土である。30の不明鉄製品は、厚さ1mm程の鉄板の一方が丸く折り曲げられる。現存重量2.9gを測り、覆土中からの



第28図 SI 4・5 遺物実測図

出土である。

土 層 12層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む、13層暗褐色土で粗いローム粒を含む、14層ロームブロックを多く含む（ピット）、15層暗褐色土（貼り床）。

SI 5（第26・28図）

遺 構 調査区の南西隅、C1-02～05グリッドを中心に位置する。SI3・SI4に切られる。遺構の西側と南側は削平されるため、全体の1/2程度の調査である。平面形態は方形を呈する。規模は不明確であるが、一辺6.7m程度を測るものと思われる。主軸方位はN-8°-W。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、確認面からの深さは6cm～19cmである。床は貼り床である。周溝は部分的に途切れる。P1・2は主柱穴で、深さはそれぞれ62cm・72cmを測る。炉跡は主柱穴を結んだラインより外側で、北壁に寄りに位置する。40cm×34cm・深さ15cmを測る。埋土には焼土粒を多く含み、下層には炭と灰も混じる。貯蔵穴は調査区内では検出されない。

遺 物 33の須恵器蓋、34の土玉、35～39の軽石は、床面ないし覆土下層からの出土である。35の軽石は、面取りして、丸く整形される。35・39、36～38はそれぞれ同一地点からまとまって出土している。その他は覆土中からの出土である。

土 層 16層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む、17層暗黄褐色土でロームブロックを多く含む（貼り床）。

SI 6（第29・30図）

遺 構 調査区の南隅、C1-07・08・17・18グリッドを中心に位置する。SI7・SK3を切る。遺構の南側は削平されるため、全体の2/3程度の調査である。平面形態は方形を呈する。規模は一辺4.6mを測り、主軸方位はN-15°-W。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、確認面からの深さは8cm～18cmである。床は貼り床で、中央部付近は硬く踏み締められる。周溝は部分的に途切れる。P1・P2は主柱穴で、深さはそれぞれ52cm・44cmである。P1には柱の抜き取り痕跡が認められた。また、西壁北側にP3が検出されたが、伴うものかは不明である。貯蔵穴は住居北東、カマド右側に位置する。不整楕円形を呈し、深さは44cmを測る。カマドは北壁中央に位置する。煙道上昇角48°を測り、壁への掘り込みは見られない。

遺 物 1の杯・3の甕はカマド内、2の杯はカマド周辺、5の土製支脚は貯蔵穴内からの出土である。4の鉄滓は覆土中からの出土で、溶解時に流れた形態を残す。

土 層 1層暗褐色土でローム粒・ロームブロックを多く含む、2層暗褐色土でローム粒を多く含む、3層暗褐色土でローム粒を含む、4層暗褐色土で粗いロームブロックを多く含む、5層暗褐色土でロームブロックを多く含む（ピット）、6層暗黄褐色土でローム土・ロームブロックを多量に含む（貼り床）。

SI 7（第29・30図）

遺 構 調査区の南寄り、B1-96・97、C1-6・7グリッドを中心に位置する。SI6・SI8に切られる。平面形態は方形を呈する。規模は3.7m×3.8mを測り、主軸方位はN-70°-E。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、確認面からの深さは4cm～10cmである。床は貼り床である。周溝は遺構の北側半分にのみ検出された。P1～P4は主柱穴で、深さはそれぞれ、SI6床面から40cm・60cm・51cm・56cmを測る。カマドは東壁中央に位置する。崩壊しており、カマド前面に粘土ブロックの分布が見られ

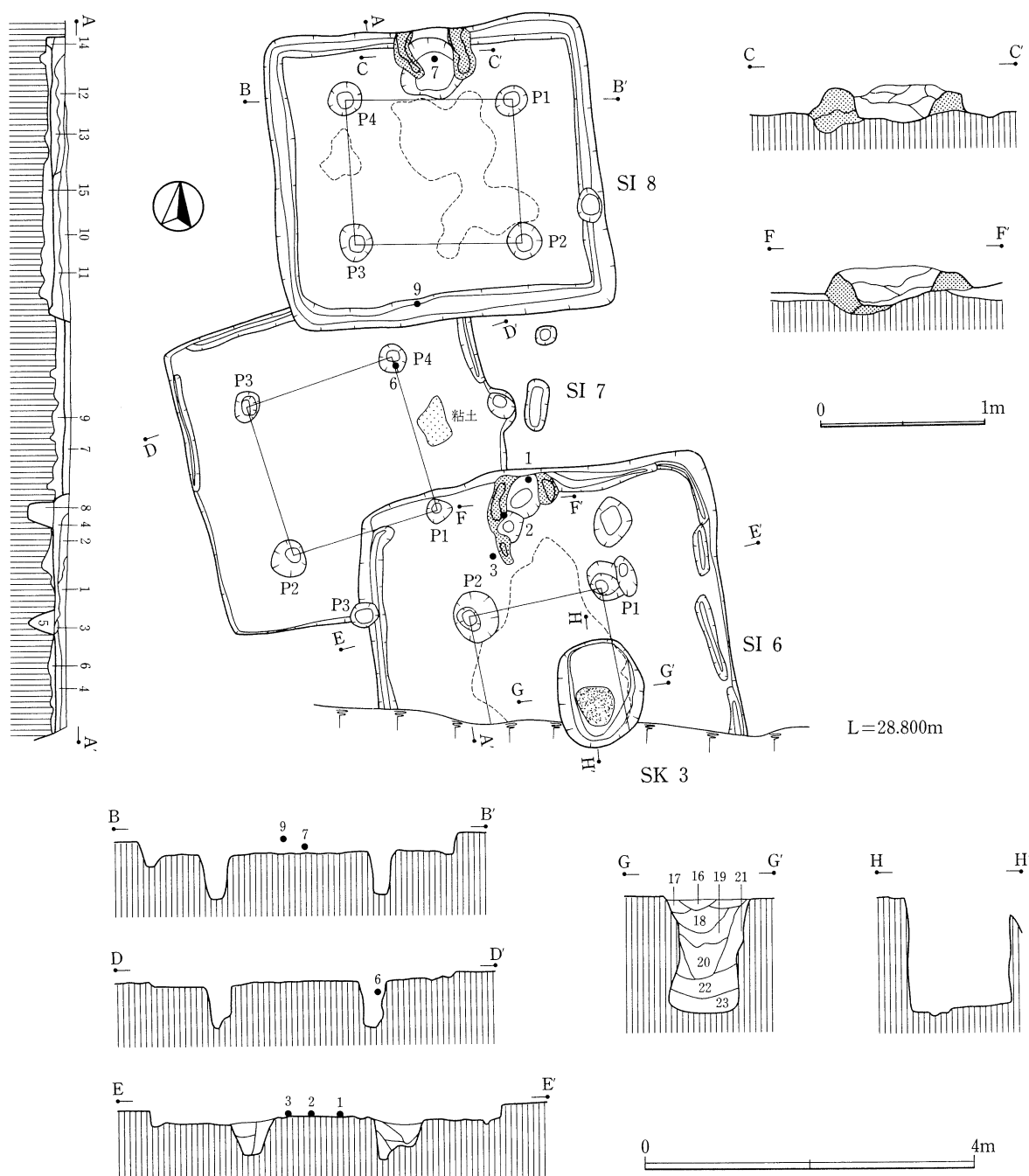
た。煙道上昇角 56° 、壁への掘り込みは27cmを測る。貯蔵穴は検出されない。

遺物 出土量は少ない。6の甕の底部はP4からの出土である。

土層 7層暗褐色土で粗いロームブロックを含む、8層暗褐色土で粗いローム粒を含む（ピット）、9層暗黄褐色土でローム土・ロームブロックを多量に含む（貼り床）。

SI 8（第29・30図）

遺構 調査区の東寄り、B1-87グリッドを中心に位置する。SI 7を切る。平面形態は方形を呈する。規模は3.54m×3.9mを測り、主軸方位はN- 8° -W。壁はやや開くようにして立ち上がり、確



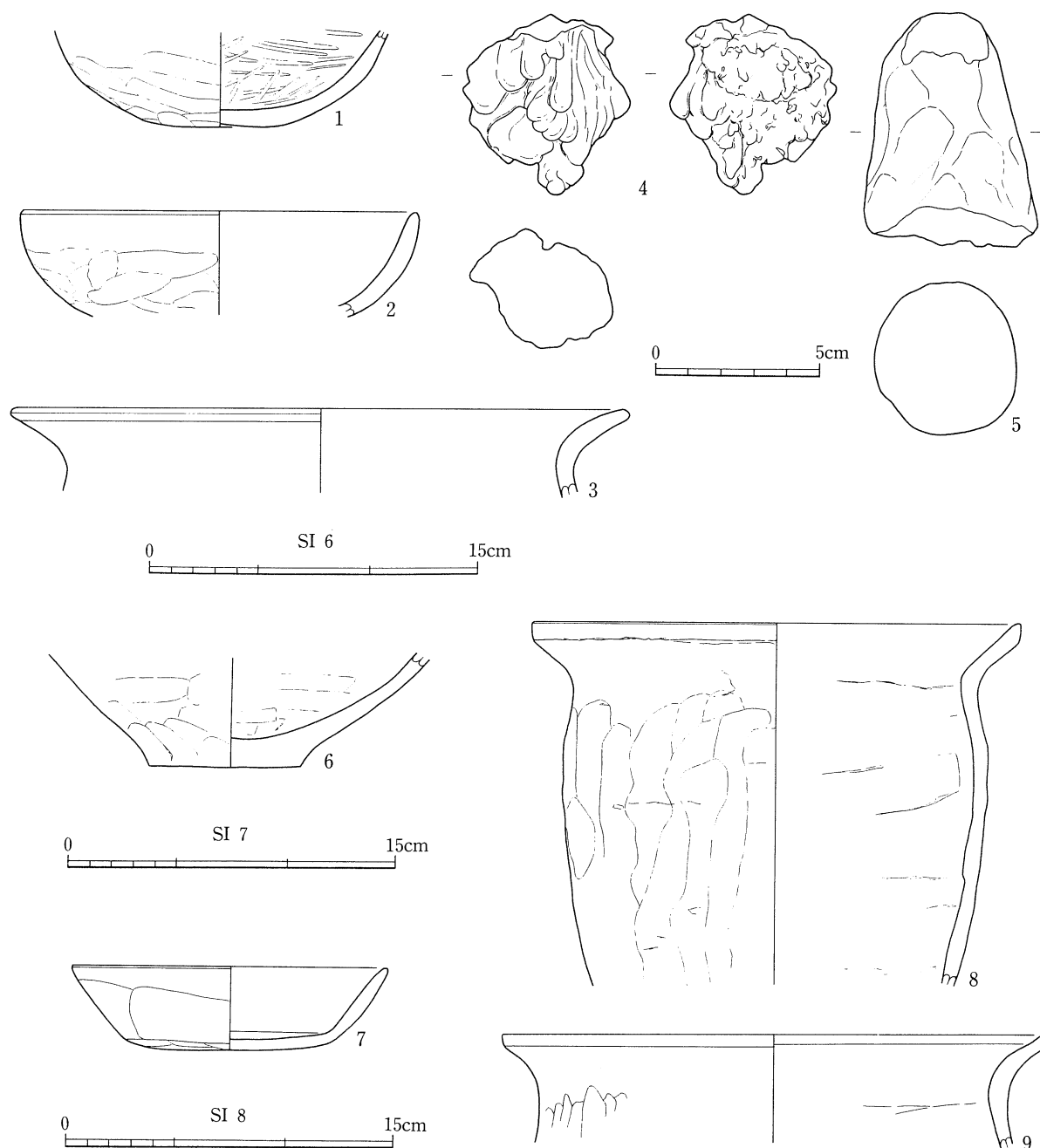
第29図 SI 6・7・8、SK 3 遺構実測図

認面からの深さは16cm～34cmである。床は貼り床である。平坦で、カマド前面は硬く踏み締められる。周溝は全周する。P1～P4は支柱穴で、深さはそれぞれ54cm・49cm・55cm・53cmである。

カマドは北壁中央に位置する。煙道上昇角62°を測り、壁への掘り込みは見られない。

遺物 7の杯はカマド内、9の甕は住居南側の覆土上層からの出土である。

土層 10層暗褐色土でローム土を多く含み、ロームブロックも混じる、11層暗褐色土で粗いローム粒を多く含み、灰もブロック状に混じる、12層暗褐色土で粗いロームブロックを多く含む、13層暗褐色土で粗いロームブロックを多く含む、14層暗黄褐色土で粗いロームブロックを多く含む、15層黄褐色土でローム土・粗いロームブロックを多量に含む（貼り床）。



第30図 SI 6・7・8 遺物実測図

SI 9 (第31図)

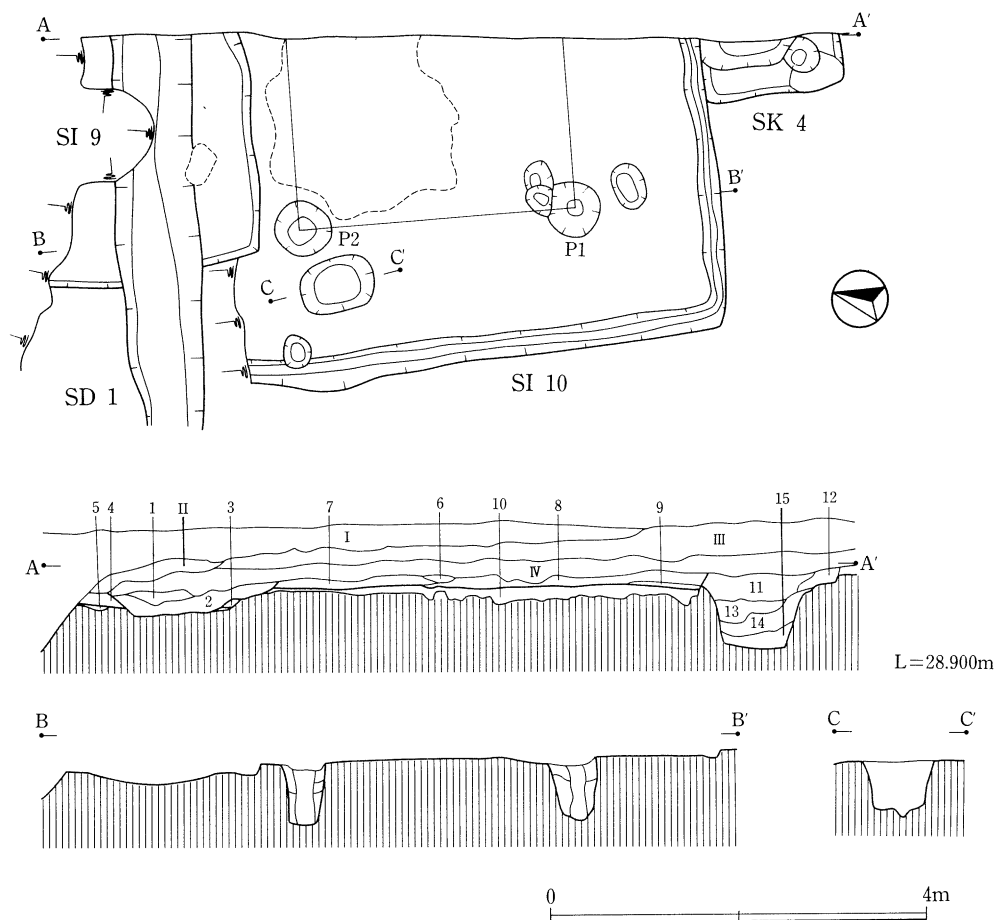
遺 構 調査区の北東隅、B 1 - 49グリッドを中心に位置する。SI10を切り、SD 1 に切られる。遺構の北側は削平され、東側は調査区域外へ延びるため、規模・主軸方位ともに不明である。平面形態は方形を呈するものと思われる。壁はやや開くようにして立ち上がり、確認面からの深さは12cm～15cmである。床は貼り床で、わずかに硬化する部分が見られた。周溝は検出されず、柱穴・貯蔵穴・カマドともに調査区内においては確認されない。

遺 物 出土していない。

土 層 I 層現代の攪乱土、II 層暗褐色土でローム粒、ロームブロックを多く含む、III 層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む、IV 層暗褐色土でローム粒を多く含む、3 層暗褐色土で粗いロームブロックを多く含む、4 層暗黄褐色土でローム土を多く含む、ロームブロックも混じる、5 層暗黄褐色土（貼り床）。

SI10 (第31図)

遺 構 調査区の中央東隅、B 1 - 59・69グリッドを中心に位置する。SK 4 を切り、SI 9 に切られる。遺構の北側は切られ、東側は調査区域外へ延びるため、全体の 2/3 程度の調査である。平面形態は方形を呈する。正確な規模は不明であるが、一辺 6 m 程度を測るものと思われる。主軸方位は、東カマドとした場合は $N-74^{\circ}-E$ となる。壁はやや開くようにして立ち上がり、確認面からの深さは 3 cm～7 cm である。床は貼り床である。平坦で、中央北寄りには硬く踏み締められる。周溝は全周す



第31図 SI 9・10、SK 4、SD 1 遺構実測図

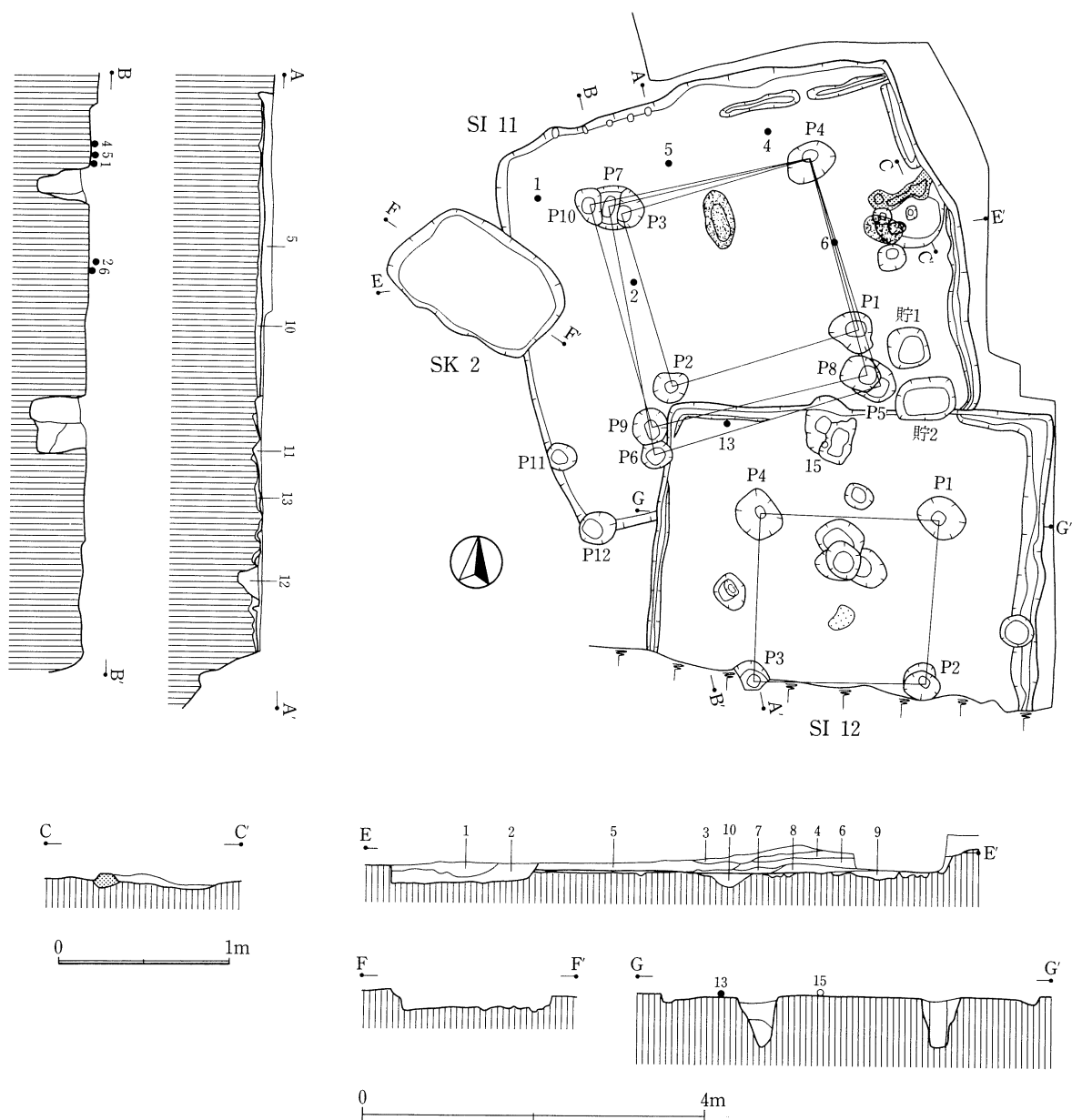
と思われる。P1・P2は主柱穴で、深さはそれぞれ60cm・69cmを測る。貯蔵穴は住居北西に位置する。長楕円形を呈し、深さは55cmを測る。カマドは調査区内においては検出されないが、調査区境界の壁面に焼土を多く含む層が見られることから、東壁側に位置するものと考えられる。

遺物 覆土中から土師器の細片がわずかに検出されるのみで、図示しうる遺物はないが、内外を赤彩される模倣杯が含まれる。

土層 6層暗褐色土で焼土粒・粗いローム粒を含む、7層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む、8層暗褐色土で焼土粒・ローム粒を多く含み、炭も混じる、9層暗黄褐色土で粗いロームブロックを多く含む、10層暗黄褐色土でごく粗いロームブロックを多く含む（貼り床）。

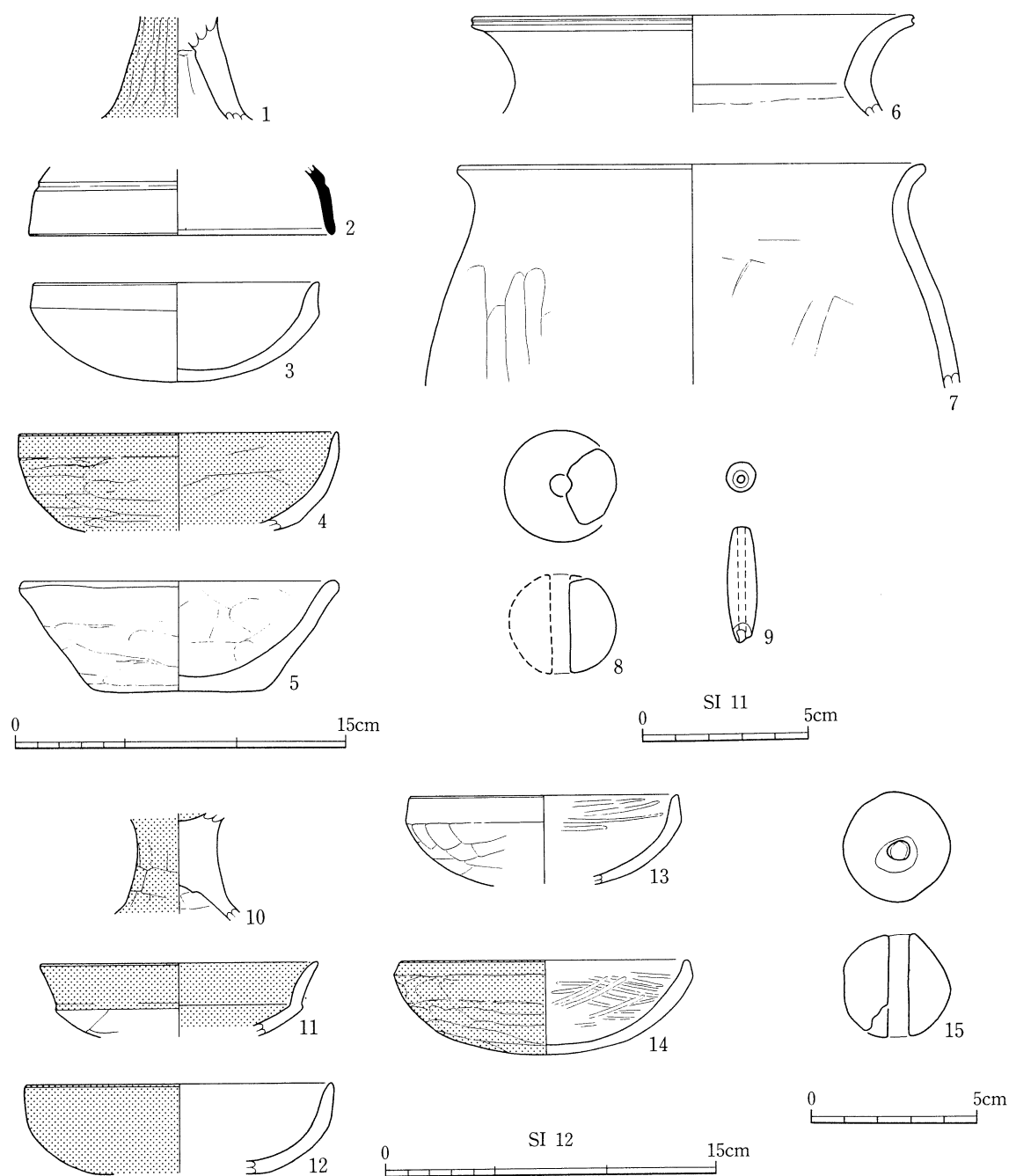
SI11（第32・33図）

遺構 調査区の南東隅、B2-90・91グリッドを中心に位置する。SI12、SK2に切られる。平面



第32図 SI11・12、SK2 遺構実測図

形態は方形を呈する。規模は5.1m×4.8mを測り、主軸方位はN-70°-E。壁はやや開くようにして立ち上がり、確認面からの深さは7cm～22cmである。床は貼り床である。周溝は東壁と北壁の一部にのみ検出される。柱穴には建て替えの痕跡が認められる。P1～P10は主柱穴で、P1～P4、P4とP5～P7、P4とP8～P10がそれぞれ対応する。P4を基軸とした3時期が考えられ、1期から2期へ拡張、2期から3期へ縮小がなされるようである。深さは1期がP1 57cm・P2 68cm・P3 62cm・P4 67cm、2期がP5 32cm・P6 58cm・P7 65cm・P4 38cm、3期がP8 70cm・P9 64cm・P10 63cm・P4 75cmである。北壁西側の小ピットと、住居南西コーナー付近のP11・12は壁柱穴と思われる。床面中央北側には、焼土を含む68cm×32cm・深さ14cmを測る掘り込みが検出されており、



第33図 SI11・12 遺物実測図

建て替え前の遺構に伴う炉跡の可能性も考えられる。貯蔵穴は住居南東、カマド右側に位置する。不整形を呈し、深さ62cmを測る貯蔵穴1と、不整形を呈し、深さ62cmを測る貯蔵穴2の2ヶ所が検出された。カマドは東壁中央に位置する。左袖のみ残存し、煙道上昇角58°を測り、壁への掘り込みは見られない。

遺物 1・4・5・6は床面、7は覆土下層、その他は覆土中からの出土である。

土層 3層暗褐色土でローム粒を多く含み、焼土・炭も混じる、4層暗褐色土で焼土・炭を含む、5層暗褐色土で粗いローム粒を多く含み、焼土粒も混じる、6層暗褐色土で灰を多く含み、粗いロームブロックも混じる、7層暗褐色土でローム粒を多く含み、焼土粒も混じる、8層暗褐色土で焼土・灰・炭・粗いローム粒を多く含む、9層暗褐色土で粗い焼土ブロックを多く含む（火床部）、10層暗褐色土でローム粒を多く含み、ロームブロック・焼土粒も混じる（貼り床）。

SI12（第32・33図）

遺構 調査区の南東隅、C2-11・12グリッドを中心に位置する。SI11を切る。遺構の南側は削平されるため、全体の2/3程度の調査である。平面形態は方形を呈する。規模は一辺4.8mを測り、主軸方位はN-3°-W。壁はやや開くようにして立ち上がり、確認面からの深さは2cm～16cmである。床は貼り床である。住居中央付近にはわずかに粘土の分布が見られた。周溝はカマド周辺部を除き、全周するものと思われる。P1～P4は主柱穴で、深さはそれぞれ55cm・71cm・61cm・62cmを測る。貼り床下からも柱穴が検出されるが、貯蔵穴は調査区内では検出されない。

遺物 10の高杯脚柱部と15の土玉はカマド内、11の杯は貼り床中、13の杯は床面からの出土。12・14の杯は覆土中からの出土である。

土層 11層暗褐色土で粗いロームブロックを多く含む、12層暗褐色土で粗いロームブロックを多く含む（ピット）、13層暗褐色土（貼り床）。

2 土坑

SK2（第32図）

遺構 調査区の南東寄り、B1-99グリッドに位置する。SI11を切る。平面形態は長方形を呈する。規模は1.88m×1.26mを測り、主軸方位はN-59°-W。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは23cmを測る。底面にはやや凹凸が見られる。

遺物 図示していないが、底面から土師器甕の胴部破片が出土している。

土層 1層暗褐色土でローム粒を多く含み、粗いロームブロックも混じる、2層暗褐色土でロームブロック・炭を含む。

SK3（第29図）

遺構 調査区の南隅、C1-18グリッドに位置する。SI6貼り床下から検出された。平面形態は長楕円形を呈する。規模は1.3m×1.04mを測り、主軸方位はN-11°-W。壁は底面からオーバーハングし、中段からはやや開くようにして立ち上がる。SI6床面からの深さは1.43mを測る。底面はほぼ平坦である。

遺物 出土していない。

土層 覆土上～中層には炭を多く含む。16層赤褐色土で焼土・炭を含む、17層黒褐色土で焼土粒・

炭を多く含む、18層黒褐色土で炭を多量に含み、焼土粒・ロームブロックも混じる、19層暗黄褐色土でローム土・粗いロームブロックを多く含み、炭も混じる、20層黄褐色土でローム土・ロームブロックを多量に含む、21層粗いロームブロックを多く含み、炭も混じる、22層暗黄褐色土でロームブロックを多く含み、炭も混じる、23層暗黄褐色土で粗いロームブロックを多量に含む。

SK 4 (第31図)

遺 構 調査区の東隅、B 2 -70グリッドに位置する。北側はSI10に切られ、東側は調査区域外へ延びるため、全体の1/3程度の調査となろうか。2段階に掘り込まれており、平面形態は上面が方形、中段以下は不整円形を呈するものと思われる。ここでは土坑として報告するが、あるいは竪穴住居跡のコーナー部分と貯蔵穴とも考えられる。規模・主軸方位ともに不明である。壁は底面からやや開くようにして立ち上がり、明瞭な段をなす平坦面をへて、垂直に立ち上がる。確認面から中段までの深さは16cm・底面までの深さは60cmを測る。底面はほぼ平坦である。

遺 物 覆土中から土師器の細片がわずかに検出されるのみで、図示しうる遺物はない。

土 層 11層暗褐色土で粗いローム粒を多量に含み、粗いロームブロックも混じる、12層暗褐色土で粗いローム粒を含む、13層暗褐色土でローム粒・粗いロームブロックを含む、14層暗褐色土で粗いローム粒を含む、15層暗褐色土でローム土を多く含み、粗いロームブロックも混じる。

3 溝 跡

SD 1 (第24・31図)

遺 構 調査区の北側、B 1 -50~56、47~49グリッドに位置する。SI 1・SI 9を切り、調査区域外へ延びる。溝幅は62cm~118cmを測り、主軸方位はN-78°-Eで東西方向に延びる。壁は開くようにして立ち上がり、確認面からの深さは3~14cmを測る。底面にはやや凹凸が見られる。

遺 物 覆土中から土師器の細片がわずかに検出されるのみで、図示しうる遺物はないが、器壁を薄く篋削りされる、奈良・平安時代の所産と思われる甕の胴部破片が含まれる。

土 層 1層暗褐色土で粗いローム粒を多く含む、2層暗褐色土でローム土を多く含み、粗いロームブロックも混じる。

4 遺構外出土の遺物

ここでは、遺構外から出土した遺物を時代ごとに取り上げる。なお、遺構内から出土したものであっても、明らかに混入と判断された遺物については、ここに一括して掲載している。

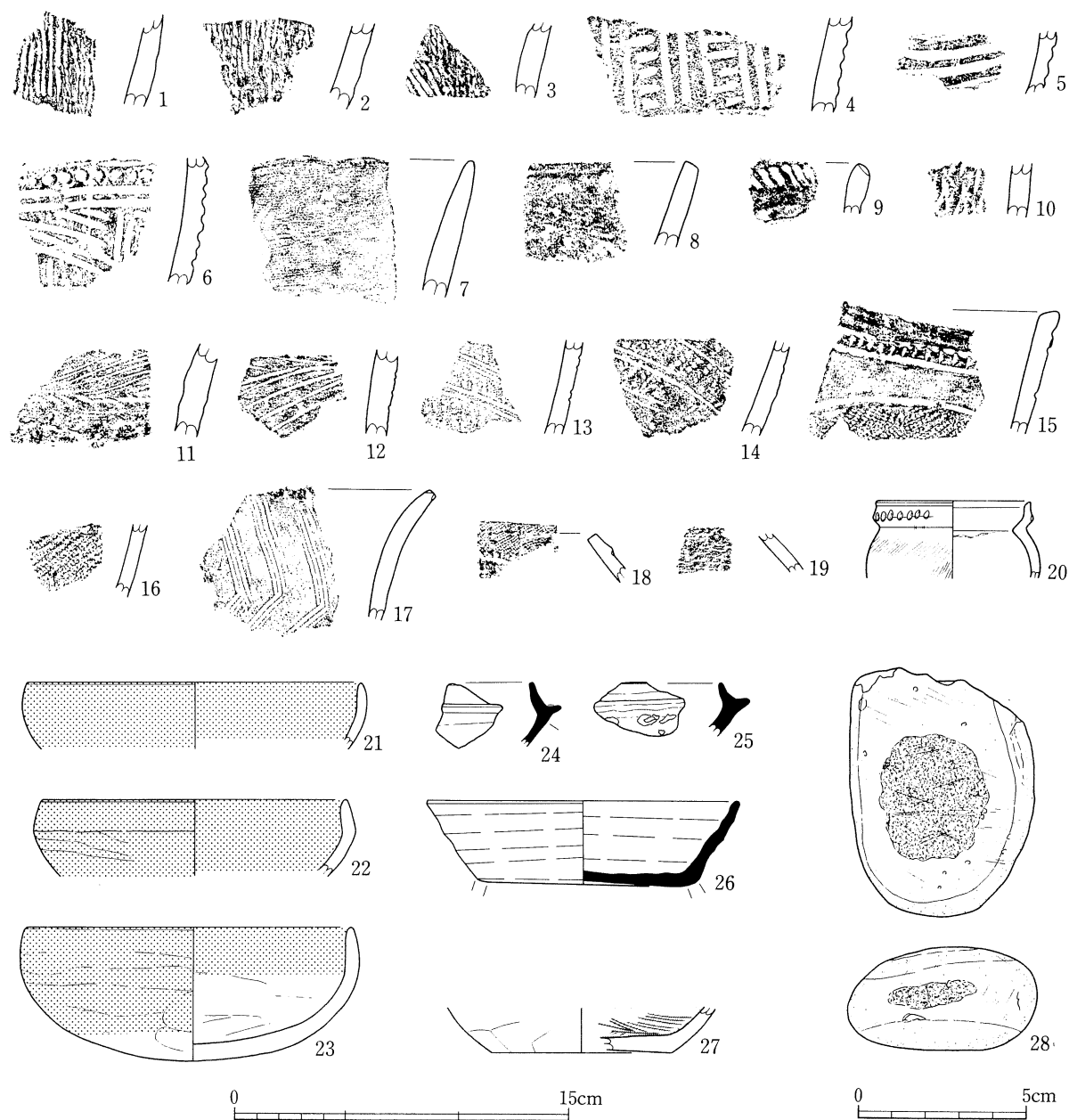
縄文時代 (第34図)

1~3は早期前半、撚糸文系土器である。条間隔の狭い撚糸Rが深く施文され、夏島式と思われる。4~6は早期中葉、沈線文系土器で、田戸下層式に比定される。いずれも太い沈線により文様が描かれる。7・8は無文の土器で、7は尖頭状、8は外削ぎ状の口縁部を呈する。田戸下層式に伴うと考えられる。9・10は前期後半、浮島式系土器である。9は口唇部に半截竹管による深い刻み目を施す。10は貝殻波状文を施す。11・12は同一個体で、半截竹管を刺突して、沈線と無文部分を区画する。浮島式期であろうか。13・14は後期中葉~後葉の粗製土器で、単節LRを地文に、半截竹管による沈線を施す。15・16は後期中葉の加曽利B式の精製土器で、波状口縁を呈す。口縁部には刺突を加えた平行沈線を巡らし、弧線文により区画される。1~3はSI11、4~8はSI1~SI3周辺、9・

10はSI 3・SI 5 周辺、11・12はSI 8・SI10周辺、13・14はSI 3・SI 7 周辺、15・16はSI 6・SI11周辺からの出土である。28は硬質砂岩製の敲石で、SI 7 からの出土である。

弥生時代（第34図）

17は中期後半の甕の口縁部破片で、口唇部は指頭による交互押捺、胴部は4本一組の横走羽状文を施す。18・19は後期後半の土器である。18は鉢の口縁部で、口唇部・口縁部に単節LRを施す。19は複数段の結節文を施す。17はSI10、18・19はSI 3・8 周辺からの出土である。



第34図 遺構外出土の遺物

古墳時代（第34図）

20は外来系の土器である。口縁部にヘラ状工具による刻みが施される小型品で、東海系の初期のS字甕や、近江系の受け口状口縁甕の可能性が考えられる。弥生時代終末から古墳時代初頭頃に比定されられると思われる。周辺では、第1次調査区から、東海系の有稜高杯や畿内系の布留型甕が出土し、遺跡南西に位置する椎津五霊台遺跡からは、東海系のS字甕や駿河東部系の壺、山陰系の高杯が出土している。21～23は内外を赤彩される土師器杯、24・25は須恵器杯の破片で、いずれも古墳時代中期後半以降の所産である。21はSI4、22～24はSI8、25はSI12からの出土である。

奈良・平安時代（第34図）

26は須恵器杯で、胎土には雲母を多く含む。27は土師器杯で、底部回転糸切りし、内面は黒色処理を施す。26はSI6、27はSI11からの出土である。

第3節 小 結

今回の調査では、古墳時代前～中期中葉1軒・中期後葉～後期8軒、奈良時代2、時期不明（古墳時代後期以降）1軒の計12軒の竪穴住居跡、奈良・平安時代1基・時期不明2基の計3基の土坑、奈良・平安時代の溝跡1条、時期不明のピット12基が検出された。

椎津茶ノ木遺跡では、古墳時代を中心として、木對和紀氏による編年案（木對 1992）がすでに提示されているため、これを用いて、時期ごとに遺構を見ていくことにする。

縄文時代 早期前半から後期後葉にかけて断続的に土器片が出土した。遺構は検出されない。第1次調査区では、後期中葉加曽利B式期の竪穴住居跡が4軒検出されている。

弥生時代 中期後半と後期後半の土器片がわずかに出土した。遺構は検出されない。第1次調査区では、当該期の遺構が多数検出されており、なかでも中期末葉に比定される大型の竪穴住居跡からは6点の琥珀玉が出土している。

古墳時代 遺跡の主体をなす時期で、特に中期後葉（鬼高式期）以降、急速に遺構数が増加する。

SI1は出土遺物がなく、明確な帰属時期が不明である。しかし、第1次調査において、①茶ノ木編年V-2期（5世紀後葉）には確実にカマドを伴う、②VI-4期（6世紀前半）にカマド位置が東から北へ移り、それ以降はカマド位置が変わらない、という2点が明らかとなっていることから、東カマドである本遺構はV-2～3期（5世紀後葉）頃の所産と思われる。SI3・SI7・SI10も同様に、時期を判定しうる遺物が少ないが、東カマドであることから、おおむね同時期頃と考えられる。SI11についても、出土遺物からV-3b期（5世紀末葉）に比定され、東カマドである。

SI2は出土遺物からVI-4～5期（6世紀前・中葉）。SI6・SI12は、ともに出土遺物からVI-5期（6世紀中葉）と考えられる。

SI5は今回の調査区で唯一カマドを持たず、支柱穴を結んだラインよりも壁寄りに炉が構築される。遺構の形態からは、出土遺物は混入と考えられ、帰属時期は明確でないが、5世紀後葉と思われるSI3に切られる。SI9も出土遺物がないが、5世紀後葉と思われるSI10に切られ、VI-4期（6世紀前葉）以降と考えられる。

奈良時代 古墳時代終末期以降、奈良・平安時代にかけて急速に遺構数を減らす傾向が認められる。

SI4は長胴甕と台付甕が見られるが、幅を持たせてVIII期（8世紀代）の間で捉えておきたい。SI8

は出土遺物からⅧ-14期（8世紀後半）と思われる。

平安時代 土師器杯の破片が1点のみ出土している。遺構は検出されない。第1次調査区では、9世紀第2四半期～第4四半期にかけての竪穴住居跡が検出されているが、これ以降、竪穴住居跡の痕跡は見られなくなる。

以上、検出された遺構を時期ごとに概観したが、椎津茶ノ木遺跡を特徴づける点のひとつとして、土鍾の大量出土があげられる。

土鍾の形態は、下総台地西端から東京湾東岸にかけて多く見られる、一般に土玉と称されるもので、時期は5世紀後半から7世紀初頭が主体となる。この時期の東京湾内湾地域では、土鍾の出土する遺跡が比較的多く見られるが、遺構数から見ても、茶ノ木遺跡が漁撈と深い関わりを持った拠点集落であったと言える。しかし、同一遺構内から、漁具とともに鉄鎌などの農耕関連遺物が出土しており、漁業専業ではなかったようである。一方、近年の調査で、近接する椎津五霊台遺跡の古墳時代前期の遺構からも土鍾が出土し、集落の連続性はともかく、この時期にも漁撈活動が行われていたことが明らかとなっている。

茶ノ木遺跡は、古墳時代後期を中心に漁撈活動とともに隆盛をきわめ、古墳時代の終焉とともに急速に集落規模を縮小させる。このような傾向は、東京湾北部地域においても認められるようであるが、その要因については、今後の課題である。

《参考文献》 木對和紀（1992）『市原市椎津茶ノ木遺跡』 財団法人市原市文化財センター

表2 椎津茶ノ木遺跡土鍾観察表

遺構番号	挿図・遺物番号	位 置	種別	整形方法	遺存度	焼成	色 調	胎 土	直径(mm)	高さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)
SI3	27-4	貯蔵穴上層	土玉	ケズリ	完形	良好	2.5YR5/4にぶい赤褐	細砂粒	33	29	5	29.5
SI3	27-5	貯蔵穴上層	土玉	ケズリ	完形	良好	7.5YR4/1褐灰	細砂粒	32	28	5	28.2
SI3	27-6	貯蔵穴中層	土玉	ケズリ	完形	良好	10YR5/3にぶい黄褐	細砂粒	34	26	7	27.9
SI3	27-7	貯蔵穴上層	土玉	ケズリ	完形	良好	2.5YR5/4にぶい赤褐	細砂粒	34	29	5	31.9
SI3	27-8	貯蔵穴上層	土玉	ケズリ	完形	良好	5YR5/2灰褐	細砂粒	32	32	6	32.8
SI3	27-9	覆土下層	土玉	ケズリ	完形	良好	5YR5/3にぶい赤褐	細砂粒	34	29	5	32.6
SI3	27-10	貯蔵穴上層	土玉	ケズリ	完形	良好	5YR5/3にぶい赤褐	細砂粒	32	29	6	26.8
SI3	27-11	貯蔵穴中層	土玉	ケズリ	完形	良好	5YR5/4にぶい赤褐	砂粒多い	34	34	4	37.2
SI3	27-12	覆土下層	土玉	ケズリ	完形	良好	7.5YR4/2灰褐	砂粒多い	34	31	7	34.5
SI3	27-13	覆土下層	土玉	ケズリ	完形	良好	2.5YR5/4にぶい赤褐	細砂粒	35	30	6	32.6
SI3	27-14	貯蔵穴中層	土玉	ナデ	完形	良好	5YR5/3にぶい赤褐	砂粒	33	27	6	24.3
SI3	27-15	覆土下層	土玉	ナデ	完形	良好	5YR5/2灰褐	細砂粒	37	29	5	38.9
SI3	27-16	床直	土玉	ナデ	完形	良好	7.5YR5/1褐灰	細砂粒	37	28	6	33.8
SI3	27-17	貯蔵穴中層	土玉	ナデ	完形	良好	2.5YR5/3にぶい赤褐	密	36	29	6	35
SI3	27-18	貯蔵穴中層	土玉	ナデ	完形	良好	5YR6/6橙	密	36	31	6	29.9
SI3	27-19	貯蔵穴上層	土玉	ナデ	完形	良好	7.5YR6/4にぶい橙	密	34	32	10	32.9
SI3	27-20	貯蔵穴下層	土玉	ナデ	完形	良好	2.5YR5/6明赤褐	密	35	33	7	41.1
SI3	27-21	貯蔵穴上層	土玉	ナデ	完形	良好	7.5YR6/3にぶい褐	密	36	34	6	31.4
SI3	27-22	貯蔵穴上層	土玉	ナデ	完形	良好	7.5YR5/3にぶい褐	砂粒	37	30	9	35.4
SI3	27-23	貯蔵穴上層	土玉	ナデ	完形	良好	7.5YR5/2灰褐	密	39	32	9	40.7
SI3	27-24	床直	土玉	ナデ	完形	良好	7.5YR6/3にぶい褐	細砂粒	38	32	8	40.5
SI3	27-25	床直	土玉	ナデ	完形	良好	7.5YR5/3にぶい褐	細砂粒	40	36	8	49.6
SI5	28-34	床直	土玉	ナデ	完形	良好	2.5YR3/1黒色	細砂粒	26	30	5	21
SI11	33-8	覆土中	土玉	ナデ	欠損	不良	10YR6/3にぶい橙	密	—	—	—	—
SI11	33-9	覆土中	管状	ナデ	欠損	良好	7.5YR7/4にぶい橙	密	9	—	2	—
SI12	33-15	カマド内	土玉	ナデ	欠損	良好	10YR5/3にぶい黄褐	密	33	31	6	—

表3 椎津茶ノ木遺跡土器観察表

遺構番号	挿図・遺物番号	位置	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	遺存度	焼成	色調	胎土	口径	器高	底径
S12	25-1	P1内	土師器	高杯	ナデ→縦方向ヘラケズリ	ナデ	脚柱部完存	良	2.5YR5/4にぶい赤褐	黒色粒を少量含む			9.4
S12	25-2	焼土中	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部斜方向ヘラケズリ	ナデ	口縁～体部1/6遺存	甘	内10R6/4にぶい赤褐、外7.5YR8/1灰白	砂粒を僅かに含む	(12.7)		
S12	25-3	覆土	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部横方向ヘラナデ	ヘラナデ	口縁部～体部1/8遺存	良	2.5Y6/2にぶい橙	密	(14.3)		
S12	25-4	焼土中	土師器	壺	口唇部ヘラケズリ、口縁部ヘラナデ	ヘラナデ	口縁～頸部1/8遺存	良	7.5YR7/4にぶい橙	粗い砂粒を多く含む	(13.0)		
S12	25-5	焼土中	土師器	甕	口縁部横ナデ、頸部以下縦方向ヘラケズリ	ヘラナデ	口縁～頸部1/8遺存	良	7.5YR4/1褐灰	白色小礫・雲母を少量含む	(19.0)		
S13	27-1	覆土	須恵器	蓋	ロクロ成形		口縁部僅かに遺存	堅	5Y4/1灰	白色微粒を僅かに含む			
S13	27-2	覆土	土師器	杯			口縁部僅かに遺存	並	2.5YR4/4にぶい赤褐	密			
S13	27-3	上層	土師器	碗	口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ→上位・下端方向ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	口縁～底部1/5遺存	並	7.5YR6/4にぶい褐	暗褐色粒を僅かに含む	(10.5)	8.5	5.0
S14	28-27	下層	土師器	台付甕	口縁～胴部上半器面荒れ、下半縦方向ヘラケズリ、脚部ナデ	横方向ヘラナデ	口縁～胴部1/3欠損	良	内7.5YR5/4にぶい褐、外5YR5/3にぶい赤褐	粗い砂粒を多く含む	11.8	(14.7)	8.2
S14	28-28	上層	土師器	甕	口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ	頸部横方向ヘラケズリ、胴部横方向ヘラナデ	口縁～胴部上位1/4遺存	良	5YR5/2灰褐	細砂粒を多く含む	(21.6)		
S14	28-29	上層	土師器	甕	口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	口縁1/8遺存	並	5YR5/4にぶい赤褐	粗い砂粒を多く含む	(23.7)		
S15	28-32	覆土	土師器	高杯	縦方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	口縁1/6遺存	良	内5YR5/4にぶい赤褐、外2.5YR5/2灰赤	黒色粒を少量含む			(9.8)
S15	28-33	下層	須恵器	蓋	ロクロ成形→天井部回転ヘラケズリ		口縁～天井部1/12遺存	堅	N6/0灰	白色小礫を少量含む	(15.5)		
S16	30-1	カマド内	土師器	杯	口縁部横ナデ、体～底部斜方向ヘラケズリ	ミガキ	口縁～体部2/3欠損	良	内7.5YR4/1褐灰、外5YR5/3にぶい赤褐	細砂粒・小礫を少量含む			
S16	30-2	床面	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部横方向ヘラケズリ	横・斜方向ヘラナデ	口縁～体部1/4遺存	良	5YR5/4にぶい赤褐	細砂粒を僅かに含む	(18.0)		
S16	30-3	カマド内	土師器	甕	口縁部横ナデ		口縁部1/4遺存	良	7.5YR5/2にぶい褐	粗砂粒を多く含む	(28.0)		
S17	30-6	P4内	土師器	甕	胴部下位横方向ヘラケズリ、下端斜方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	底部完存	並	7.5YR4/1褐灰	細砂粒を僅かに含む			6.9
S18	30-7	カマド内	土師器	杯	器面風化激しい、体部横方向ヘラケズリ、底部不定方向ヘラケズリ		口縁部1/3欠損	甘	7.5YR6/4にぶい橙	細砂粒を少量含む	14.3	3.8	9.2
S18	30-8	覆土	土師器	甕	口縁部横ナデ、頸部以下縦方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	口縁～頸部1/6遺存	良	5YR5/4にぶい赤褐	砂粒を多く含む	(24.7)		
S18	30-9	上層	土師器	甕	口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	口縁～胴部上半1/4遺存	良	7.5YR6/4にぶい橙	粗い砂粒をやや多く含む	(22.0)		
S111	33-1	床面	土師器	高杯	縦方向ヘラケズリ	ヘラナデ	脚柱部1/2遺存	良	内2.5Y4/1黄灰、外2.5YR5/3にぶい赤褐	細砂粒を僅かに含む			
S111	33-2	覆土	須恵器	蓋	ロクロ成形		口縁部1/12遺存	堅	N6/0灰	白色粒を少量含む	(14.0)		
S111	33-3	床面	土師器	杯	器面風化激しい、口縁部横ナデ	ヘラナデ	口縁～底部1/3欠損	良	7.5YR6/4にぶい橙	細砂粒を僅かに含む	12.9	4.4	—
S111	33-4	覆土	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部横方向ヘラケズリ	斜方向ヘラナデ	口縁～体部1/8遺存	良	2.5YR4/3にぶい赤褐	細砂粒を少量含む	(14.4)		

掲載遺構番号	挿 図・遺物番号	位 置	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	遺 存 度	焼 成	色 調	胎 土	口径	器高	底径
SI11	33-5	床面	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部横方向ヘラケズリ、底部不定方向ヘラケズリ	斜方向ヘラナデ	口縁部1/2欠損	良	内5YR5/4にぶい赤褐、外7.5YR6/6橙	小礫を僅かに含む	(14.4)	5.0	7.6
SI11	33-6	床面	土師器	甕	口縁部横ナデ	頸部横方向ヘラケズリ	口縁部1/4遺存	良	7.5YR5/2褐灰	細砂粒を僅かに含む	(20.0)		
SI11	33-7	下層	土師器	甕	口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	口縁～胴部上位1/8遺存	良	内7.5YR6/3にぶい褐、外10YR4/1褐灰	粗い砂粒を少量含む	(21.0)		
SI12	33-10	カマド内	土師器	高杯	縦方向ヘラケズリ→横方向ヘラナデ	ヘラナデ	脚柱部遺存	良	2.5YR5/4にぶい赤褐	細砂粒を僅かに含む			
SI12	33-11	貼り床	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	ナデ	口縁～体部1/6遺存	良	内2.5YR5/4にぶい赤褐、外5YR7/6橙	細砂粒を僅かに含む	(12.6)		
SI12	33-12	覆土	土師器	杯	器面荒れる、口縁部横ナデ、体部ヘラナデ?		口縁～体部1/8遺存	良	内5YR7/6橙、外5YR4/3にぶい橙	細砂粒をごく僅かに含む	(14.0)		
SI12	33-13	床面	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部横方向ヘラケズリ	ヘラナデ→ミガキ	口縁～体部1/4遺存	良	7.5YR6/3にぶい褐	黒色粒・赤褐色粒を少量含む	(12.0)		
SI12	33-14	覆土	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部横方向ヘラケズリ	ナデ→ミガキ	口縁部1/5欠損	良	内7.5YR6/3にぶい褐、外5YR5/3にぶい赤褐	細砂粒を少量含む	12.9	4.2	—
遺構外	34-20	SI11内	古式土師器	甕	口縁部横ナデ→キザミ、胴部斜方向ハケ		口縁～胴部1/4遺存	良	5YR5/4にぶい赤褐	細砂粒をごく僅かに含む	(6.8)		
遺構外	34-21	SI14内	土師器	杯	ヘラナデ	ヘラナデ	口縁～体部1/8遺存	良	2.5YR5/3にぶい赤褐	密	(14.8)		
遺構外	34-22	SI8内	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部横方向ヘラケズリ		口縁～体部1/8遺存	良	2.5YR5/4にぶい赤褐	細砂粒を僅かに含む	(13.5)		
遺構外	34-23	SI8内	土師器	杯	口縁部横ナデ、体部横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	口縁部ほぼ欠損	良	2.5YR5/3にぶい赤褐	細砂粒を僅かに含む	(14.4)	5.9	—
遺構外	34-24	SI12内	須恵器	杯	ロクロ成形→体部回転ヘラケズリ		口縁部僅かに遺存	堅	2.5YR7/2灰黄	白色微粒をごく僅かに含む			
遺構外	34-25	SI8内	須恵器	杯	ロクロ成形、オリブ色自然釉付着		口縁部僅かに遺存	堅	5Y5/1灰	白色粒を少量含む			
遺構外	34-26	SI6内	須恵器	杯	体部ロクロ形成→下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り→周縁手持ちヘラケズリ		口縁部1/4欠損	並	2.5Y5/1黄灰	白色小礫・雲母を多量に含む	13.9	3.9	9.7
遺構外	34-27	SI11内	土師器	杯	体部下端横方向ヘラケズリ、底部回転糸切り	ミガキ	底部1/4遺存	良	内N3/0暗灰、外7.5YR6/3にぶい褐	細砂粒を僅かに含む			(8.0)

写真図版



調査区全景（姉崎方面を望む）



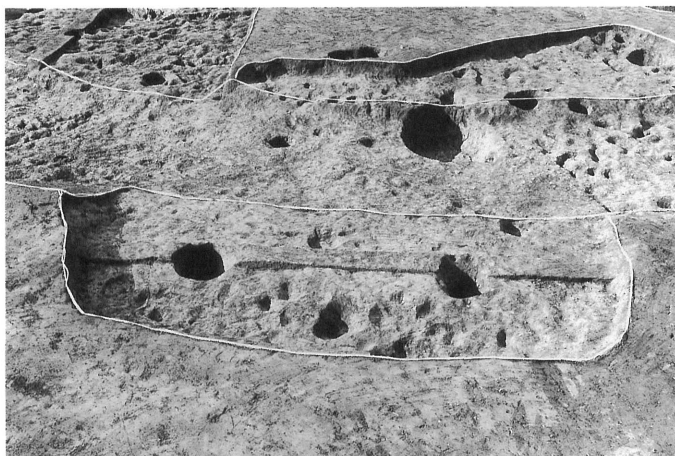
調査範囲全景



19号遺構全景（南東から）



25・24・31号遺構（手前より）全景（南東から）



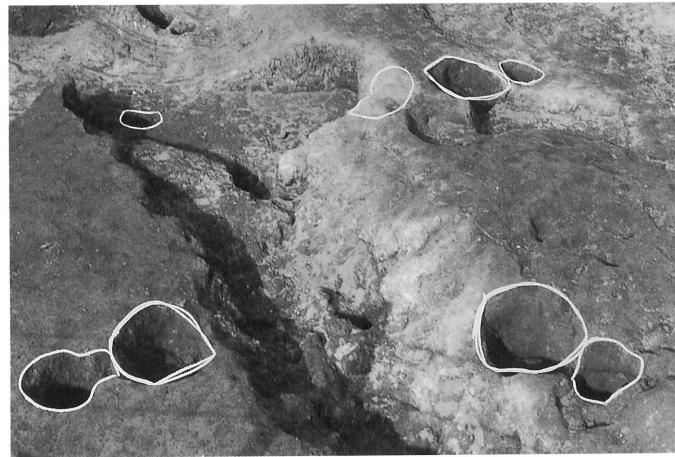
26号遺構全景（南東から）



26号遺構遺物出土状況（南東から）



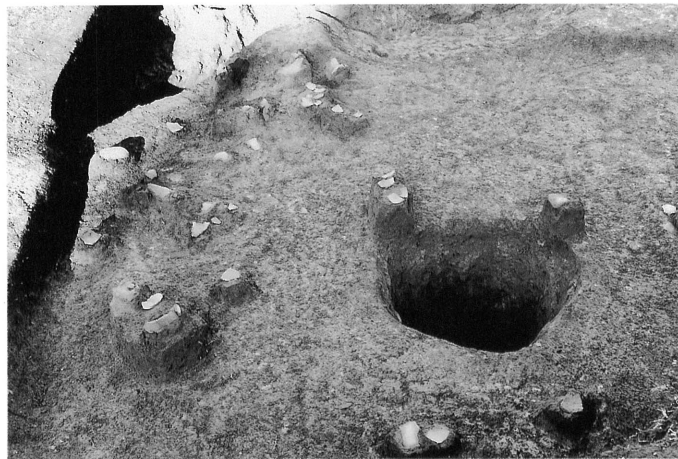
26号遺構貯蔵穴遺物出土状況（北西から）



28号遺構全景（南東から）



29号遺構全景（西から）



29号遺構遺物出土状況（西から）



30号遺構遺物出土状況（南東から）



31号遺構遺物出土状況（東から）



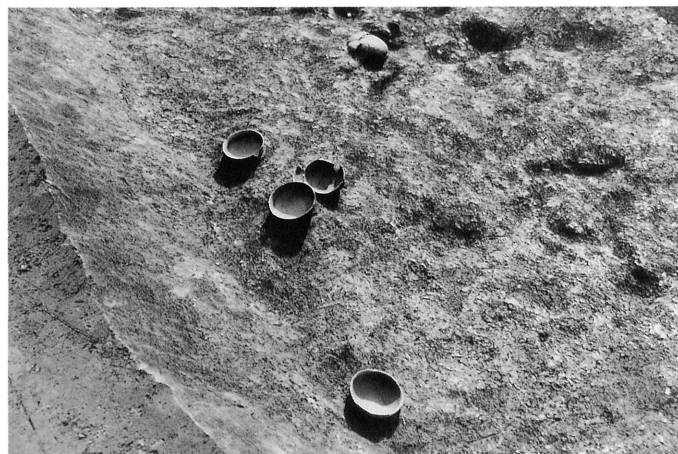
31号遺構遺物出土状況（北東から）



32号遺構カマド検出状況（北東から）



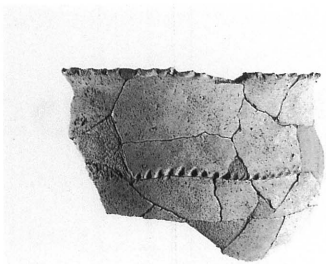
33号遺構全景



33号遺構周溝内遺物出土状況（北から）



19号遺構-5



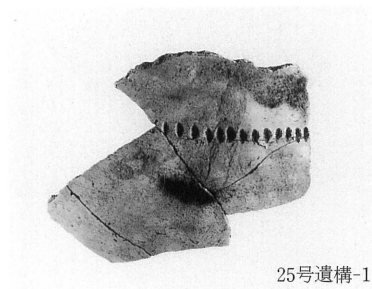
19号遺構-6



19号遺構-7



20号遺構-1



25号遺構-1



26号遺構-1



26号遺構-2



26号遺構-4



26号遺構-6



29号遺構-2



29号遺構-4



30号遺構-2



30号遺構-4



30号遺構-5



30号遺構-3



30号遺構-3



31号遺構-1



31号遺構-7



31号遺構-8



31号遺構-9



31号遺構-10



31号遺構-11



31号遺構-12



31号遺構-13



31号遺構-14



33号遺構-1



33号遺構-2



33号遺構-3



33号遺構-4



33号遺構-5



33号遺構-6



33号遺構-7



33号遺構-8



33号遺構-9



33号遺構-10



33号遺構-11



33号遺構-13



33号遺構-15



33号遺構-17



33号遺構-22



33号遺構-21



33号遺構-23



33号遺構-24



33号遺構-28



33号遺構-26



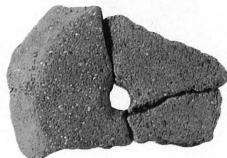
33号遺構-27



33号遺構-32



33号遺構-30



34号遺構-1



34号遺構-2



34号遺構-3



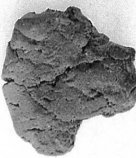
34号遺構



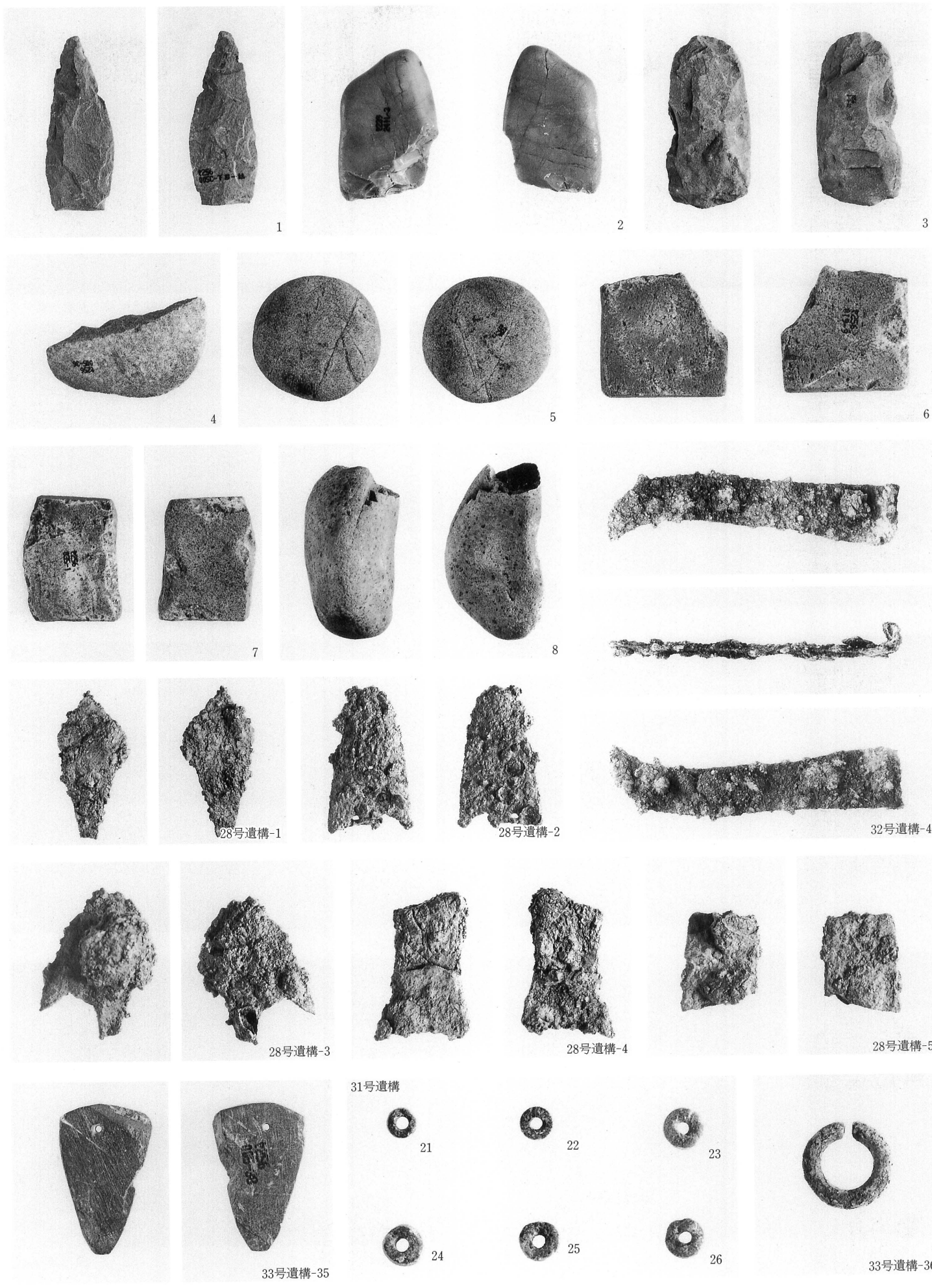
34号遺構-4



32号遺構-2



31号遺構-20





椎津稲荷山古墳 (北東から)



椎津稲荷山古墳 (東から)



調査前近景



SI 1



SI 2



SI 3



SI 3 カマド



SI 3 貯蔵穴



SI 4・5



SI 4 カマド



SI 5 炉跡



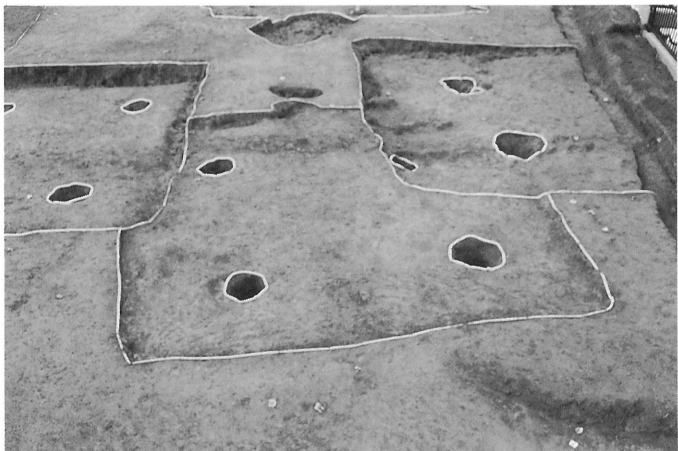
SI 6



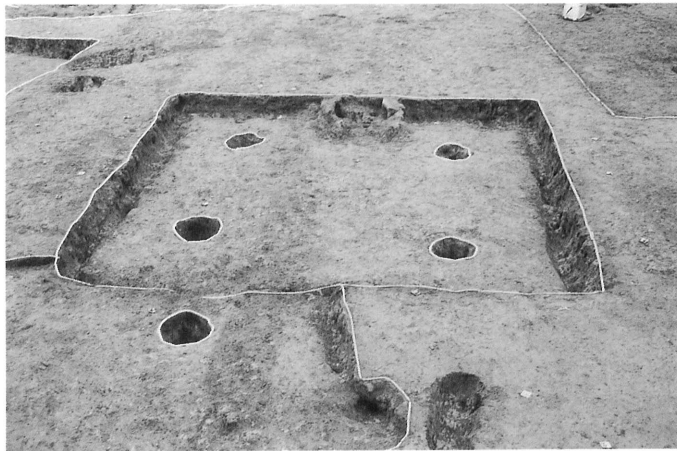
SI 6 カマド



SK 3



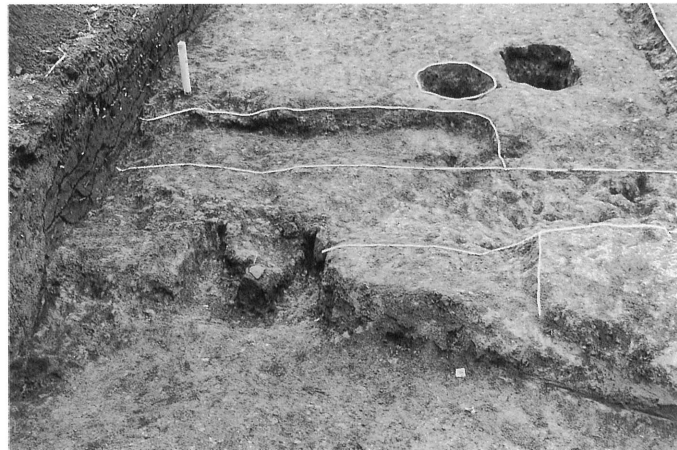
SI 7



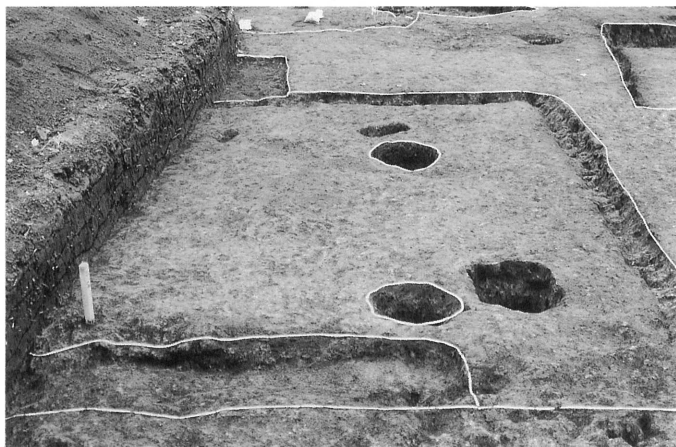
SI 8



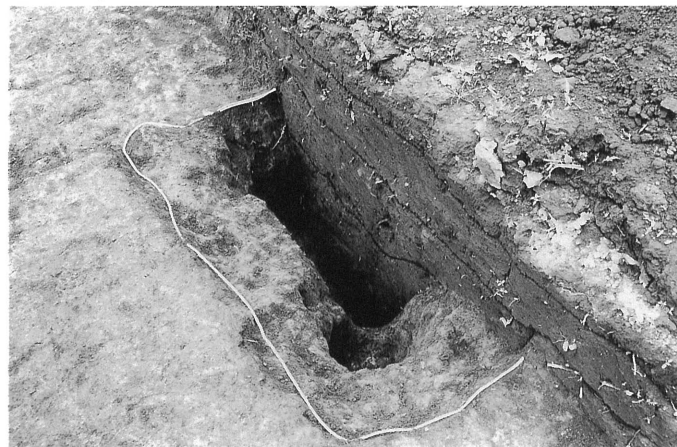
SI 8 カマド



SI 9



SI 10



SK 4



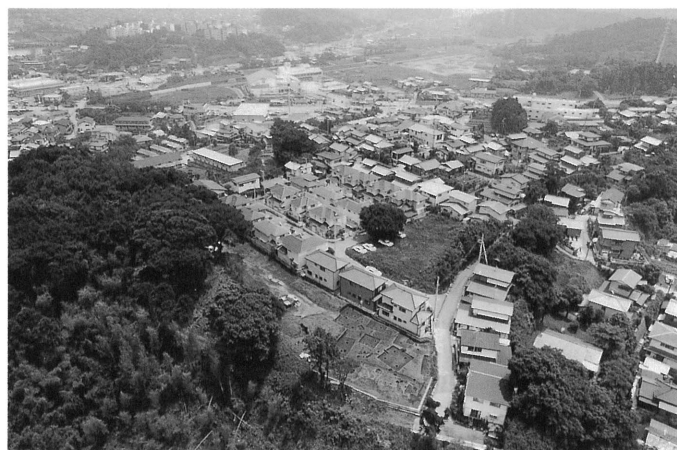
SI 11・12, SK 2



調査区全景（東から）



茶ノ木遺跡（第2次）空中写真



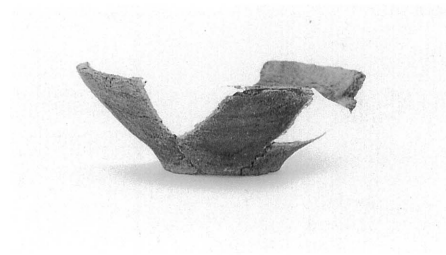
茶ノ木遺跡（第2次）遠景



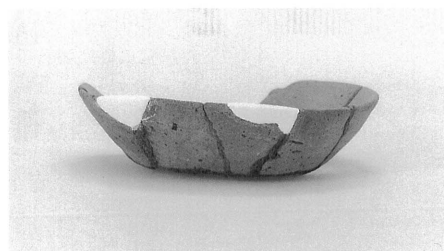
SI 2



SI 4



SI 7



SI 8



SI 11



SI 11



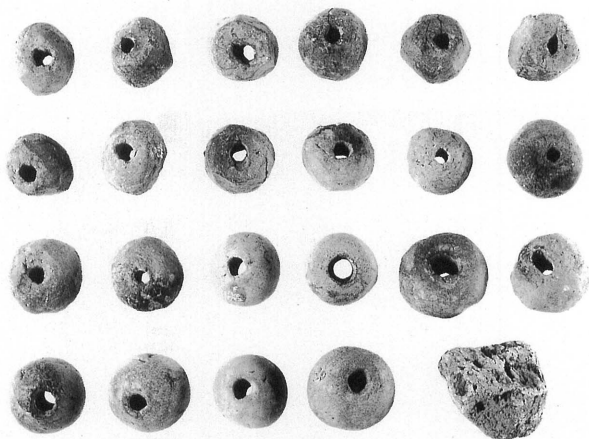
SI 12



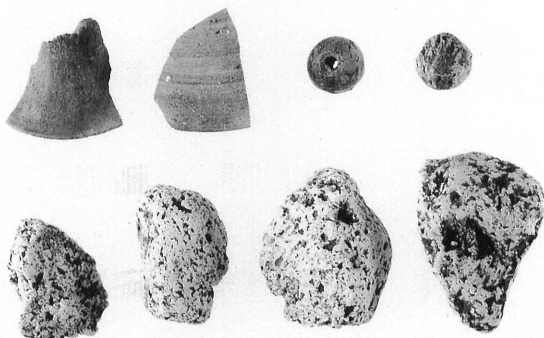
遺構外



遺構外



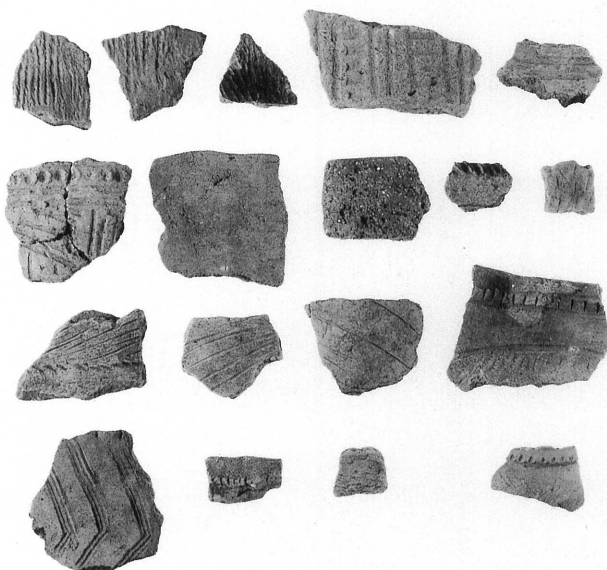
SI 3



SI 5



SI 4



遺構外

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いちはらしはたきこやついせき・しいづちゃのきいせき（だい2じ）
書 名	市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木遺跡（第2次）
副 書 名	不特定遺跡発掘調査報告（3）
巻 次	
シ リ ーズ 名	財団法人市原市文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第73巻
編 著 者 名	北見一弘・鶴岡英一
編 集 機 関	財団法人 市原市文化財センター
所 在 地	〒290-0011 千葉県市原市能満1,489番地 TEL 0436-41-7300
発 行 年 月 日	2000年3月21日

所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はたきこやついせき 畑木小谷遺跡	ち ば けんいち はら し はたき 千葉県市原市畑木 246-1の一部 246-2の一部	12219	セ256	35° 28' 06"	140° 04' 09"	19971021 ～ 19980130	2,350	身体障害 者寮護施 設の建設 に伴う埋 藏文化財 調査
しいづちゃのき 椎津茶ノ木 いせき（だい2じ） 遺跡（第2次）	ち ば けんいち はら し しいづ 千葉県市原市椎津 545-1 他	12219	セ266	35° 28' 07"	140° 02' 29"	19980513 ～ 19980611	470	宅地開発 に伴う埋 藏文化財 調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
畑木小谷遺跡	包蔵地	縄文時代早期		縄文時代早期土器、 石器	弥生時代後期から古墳 時代中期までの集落及 び、古墳時代後期の墓 域の広がりが確認され た。
	集 落	弥生時代後期 ～ 古墳時代中期	竪穴住居跡 14軒	弥生土器、古墳時代土 師器、鉄鏃、鉄鎌、白 玉	
	古 墳	古墳時代中期 ～後期	円 墳 1基	古墳時代土師器、須恵 器、石製模造品（剣形）、 金銅製耳環	
椎津茶ノ木 遺跡（第2次）	集 落			縄文土器、弥生土器	古墳時代後期を中心と した、漁撈に深く関連 する拠点的な集落遺跡 である。
		古墳時代中期 ～後期	竪穴住居跡 9軒	土師器、須恵器、土錘、 鉄鎌	
		古墳時代後期 以降	竪穴住居跡 1軒		
		奈良・平安	竪穴住居跡 2軒 土 坑 1基 溝 跡 1条		

市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木遺跡（第2次）

— 不特定遺跡発掘調査報告（3） —

平成12年3月15日 印刷

平成12年3月21日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 市 原 市 教 育 委 員 会
市原市国分寺台中央1丁目1番地1

財団法人 市原市文化財センター
市原市能満1,489番地

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町2-5-5